川柳雜誌

四月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和七年四月一日發行（毎月一回一日發行）　第九卷　第四號　川柳雜誌社發行

本社四月例會

日時 四月十四日午後六時半

會場 大阪市南區千年町日本橋北詰西の辻北入東側 ちとせ倶樂部 電話南二四五五番

兼題講演 「幻」三句 路郎選 題未定 岩本素人

會費 金參拾錢

初心者の來會を歡迎致します

祝百號記念 廣告を募る

本誌五月號が創刊百號に相當するので柳友諸兄の祝百號記念廣告を募ります絶大の御後援を祈ります。**一口金五十錢**幾口にても御申込下さい。

締切四月十日限。

（切手代用參錢以下）

各地支部增設

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込んで下さい。

川柳雜誌 第九卷 第四號目次

文苑

今非明是 阿部閑生（二）
句評公開 岩本素人（四五）
寶の帖漫興 蛭子省二（三八）
或る返書 山本丹路（二五）
紙上噴水 船津梵兒（二四）
柳の絮（十二） 長野吉高（二六）
川柳幽明無線電話（續） 秋農屋（三三）
月評 句の世界 路郎、山雨樓、葭乃ひろし、杏三、町二（二六）
自分を忘れる 吉田水車（五）
疵も共に光る 山本葉光（六）
俎板 大久保大夢子（七）
秋斬り犯人 中野裸人（八）
松江支部漫談 天痴人（二）
斷片 丘町二（二）

創作

近作 麻生路郎（一）
第一線 麻生路郎選（五）
春秋點 同（一九）
近作柳樽 松丘町二選（二一）
川柳塔……（二五）
粒々集 諸家（二七）
光耀抄 麻生葭乃選（三二）
各地柳壇……（四八）

一路集（募集句）

妻 橋本綠雨選（四〇）
空想 岩本素人（四二）

◇

續川柳家戸籍調 山雨樓（四〇）
西之町MEMO 橋本綠雨（四三）
編輯の窓 路郎（六六）

◇

表紙題字 大西長三郎 麻生路郎

地下鐵

近作

麻生路郎

吹込みのあれも仕事かさびしき世

大寺にて

客を背に餅賣れるこゞ賣れるこゞ

勘定高い人に輕蔑されてゐる

南京豆をたべたべ首の飛ぶ話

空想癖が古本を賣りに行く

昌一君を悼む

風もなき父のくらさを君知るや

二南君の結婚を祝して

劍戟の手へすがる君うつくしき

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ平二ゞこそは書かれたり

今非明是

阿部閑生

我々が物を見、聞き、物に觸れる迄の過程は誰も一樣であつて、何等の差違はないが、是によつて受ける刺戟の强弱と、それに應じて起る感情とは各人千差萬別であり、一樣であつて云へば云へる範圍は科學であつて、云ふに云はれぬのみ或る方法で云ひ現はすのが藝術の領分である、詰り我々が日常云ひ、書き、行ふところの有らゆる仕事の根源が、智能と感覺の二元から發じてゐると云ひ得る譯である。

○

前月號「古机に倚りて」の一文は筆者山雨樓君が、如何に熱心に川柳に努力せられるかの一つの現れで、川柳を導くものゝ言葉として作者自身の自覺が何よりも有力であるとし、一生川柳を止めるなといふ事を主張されてゐる、私など昨今作句の沈滯からそろ〳〵怠けやうかと考へてゐた際、この熱心な主張に動かされて、今月も何うにか投句を果し得たので、こゝに起たされた懦夫としてお願ひしたいのは、山雨樓君の斯うした工夫ある研究と、それから町二君が縱横批判の名文とが、月おきに發表されるならば、我々の思束ない自覺よりも、それの他覺の方が効果が大きいかに思はれる事である。

けれども一生川柳を止めるな、止めぬと云ふには執著や刺戟だけではなく、何よりも先つ川柳自體が不滅の光でなければならぬと思はれる。

○

天平の佛像を見ると刀刻の技においては後世のものに及ばぬけれど、智能の現れの乏しい事が藝術の至妙に達せしめてゐるやうである、鎌倉以後のそれは局部の技術には著しい進歩が見えるけれど、智能と我慾の浸潤が藝術の魂を瀆してゐる所に末世の騷しさがある、その他詩歌、書畫、建築物乃至器物に至るまで、日本固有の美術はその樣式外觀が略奈良朝時代に完成せられてゐて、陶磁器などでも新しい工夫のものは大抵失敗し、法隆寺、二月堂御物、奉日式などに摸したのが新時代にも成功してゐるといふ事は、不滅といふ點において局外者の我々にも何かの考察の參考にならぬ事はない、そして六朝、隨、唐より現代に至る支那の文藝美術を見るなら、更に明確な事例に接するであらう。

○

詩歌の中でも俳句と川柳とは、事物から受ける感覺、感覺より起る感情を、その事物に托して正直に表現するのが目的で、感情はそのまゝ自分で見、他人に見せる方法がないから、仕方なくそのまゝに近いか、そのまゝ以上にひゞく言葉で現すのであるが、唯感情に伴ふ感歎の詞を發した丈では頗る物足らぬ事は「これは〳〵こばかり花の吉野山」と獨りで呆れてゐても「松島やあゝ松島や〳〵」と驚いてゐてもその人限りの事で、吉野の霞も松島の砂も讀者の胸に反影しないのでも明かである、こゝに技巧の苦心が有り、知能の跳梁があり、時には特異な思想主張、寓意、捻造の句と迷ひ込むのである。

○

こび離れた所から鳥獸虫魚の戯れ、人間の葛藤を眺めると、何れも皆滑稽であり、眞面目であればある程可笑しさが強く、自ら沒入すれば苦惱と辛勞の外何物もなく、あゝ面白いと云ふ感じ、これは堪らぬといふ嘆き、その悉くが川柳を成すべくして、成るのは極めて稀であり、成すべからざる修得の模倣で成る川柳が割合に多く、智能を掩ふに巧妙な字句を驅使し、如何にも感覺描寫めかし得たる、いはゆる飛躍的な句が、眞に活き〳〵とした感情を觸目の一事物に托して心ゆく迄發露した本統の句と混列してゐる實狀である。

こんな間に合はせの云ひ方で、川柳價値を獨斷するのは亂暴かも知れぬが、古いとか、新しいとか、傳統的であるとか、ないとかいふ事も、型や時代の問題ではなく、要するにこの感覺と智能の區分によつて評決する方が目下の我々として、作句の永久性を定め易いと云ふものである。

○

夕陽が梢にかゝつて千條の金線を斜めに流す時、地上に默々として輝きそむる微弱幾つかの光がある、その最も燦として輝いたものは、太陽が沈むと同時に消え失せて、近づけば其處に硝子の破片があり、こゝに一滴の水球があるばかり、然るに見よ、燃ゆる夕光の中に有るとしもなき微弱な光を保つてゐた、こゝそこの誘蛾燈が暮れるに隨つて明るさを增し、僅かながらも自分の周圍を圓く照し出してゐるではないか、我々の求むる所の川柳は、小さくとも自ら燃ゆる光であつて、輝く硝子の破片と、水滴の何れでもない。

そして箇々の感情こそは　白くも赤くも自ら點る灯であると云はねばならぬ。

○

遠親近攻は國際間の現象だけでなく、川柳と俳句の關係にも及んでゐる樣だが、川柳のうちにも俳句があり、俳句の中にも川柳があり、それが俳句か川柳かは問題でなく、俳句としても川柳としても佳作か否かに注意すればよいと思ふ。この間ある人に俳句の季題から人事を削つて川柳へ繰入れたら何うでせうと云つたところ其の人は、俳句では自然の季題は詠み盡されて人事に餘裕を殘すばかりですと云つた、自分は然うとも思はなかつたが、默つてゐた。

川柳と俳句と、相並んで色をちがへた二つの池、隔ての堤を

切れば交りあふ水の巴が吹きあげる蜃氣樓に、浮き出す十七字共和國の遠望は、やゝ無稽のユートピアにしても、頭の高低さへ揃つてをれば水面の均齊は保たれる事であり、作句永續のうへに朧ろげな興味を投げるには足るであらう。

○

意義あるものゝ斷片と、意義なきものゝ繼續と、何れが無意義であるかと自問して、少しく作つては多く休み、短く作つては長く止め、何をやつても三年と續いた試しがなかつたのに、珍らしくも川柳が細々と續いてゆくので、我ながら可笑しい事もある、鋭い感覺を必要とする以上は若い年齒と幼い頭腦の持主でなくてはならず、それもせつぱ詰つた刹那の鋭敏性が詩歌を生むので、常に作るのは徒爾であるとしたのが、大きな見當違ひで永く續けてゐる人の句に見ても、年代的に後のほうがずつとうまくなつてをり、例外はあるにしても、若い時非常にうまかつたと云ふ人でもあの時分に既にこんな句を作つたと云ふ程度で、矢張り後の方が次第によくなつてゐると知つたので、今非明是、少しづゝでも進んで見やうと志したので、尤も自分としては時機餘りにおそいので、その點は頗る心もとなく、

折鞄靴のかゞとがありません　　綠雨

の一句を借用して、意赴けども脚の從はぬこの稿を〆括ることにしやう。

本誌百號
記念事業

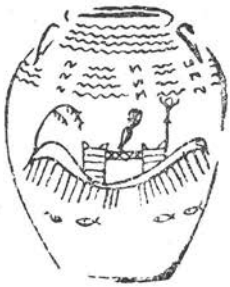
(1) 百號記念特輯號の刊行
從來の型を破つた編輯振りは愈々次號

(2) 祝賀と宣傳の催物　—於 朝日會館
(A) 柳壇人の講演
(B) 長唄「新曲浦島」
(C) こども新舞踊
(D) 川柳座の川柳劇

(3) 百號記念川柳句會　—於 ちとせ倶樂部

詳細は次號發表

◇五月の豫告◇



第一線

路郎選

揉手かさ〳〵鉛のにほひ　山雨樓

歸國

赤松のみどりが僕を生んだ村　同

縱に横に赤いあかぎれ女中さん　同

遊廓があるあの町の空風ひやり　同

二南氏の結婚

給封筒束にする日のても麗ら　同

父の還暦

耳がすこし遠くなつたと云ふ父よ　同

子を思ひ

まゝごとも忘れ讀み方の習字だの　線雨

陳列にひかるばかりの貴金屬　同

交際がエロにかたむく年だろか　同

だまされて女のゆくゑもあるものか　同

自分を忘れる

吉田水車

涙ぐましき出征挿話。大阪から乘船する或師團の將士が着阪後夫れ夫れ民家に分宿した。其内の一人を泊めた家の人の話によると、泊りに來た兵隊さんが帽子を脱ぐと、何と半分だけ刈つて、後半分が殘つてある珍妙な頭ではないか。一應はたゞして散髮をも薦めてみた。そして當の時なら間違ひなしに爆笑が起るのだつたが、其譯が、召集から出發迄の寸時を割いて晴れの首途に身も心もさつぱりすべく散髮の最中に、出發命令が下つたので、散髮中端にして出征の途に就いたのであつたのを知り、哄笑を押さへて、感慨て熱いものが込み上げて來た。殘りの半分は乘船してから片付けると云ふ希望を强ひてまげさせるのは、却つて非禮であり、且つ翌日早朝の出發を慮り靜に休ませたのであつた。一朝有事に際し、一意君國の爲に父母を顧へりみず、兄弟をおもはず、妻子を捨て、果は自分をも忘れた其兵隊さんの夢

雛段へ濕布した子が座つて居　同
鼻々を覺えたゞこへ・パパ戻り　杏三
掌をひらいて握つたものを觀よ　同

總選擧雜觀（二句）

公明な選擧が日本にあつたかい　同
棄權率四割强の一人なるこそこゝろよき　同

路郎師新居にて

此の次は草花なりゞ持つて來ん　同
毒藥の壺の如くに扱はれ　素人
一人呑む膝へ冷たく酒流る　同
この上に俺の無能を數へるな　同
水仙に素足の春を思ふなり　同

哀れかくて一日終る

吸ひためた煤が酒に溶けゆく胃の腑　町二
座せば膝拱けば腕に殘る寒　同
悲しみの光のごゝく雪が降る　同
大阪に青き空ある日なり寂し　同
逢ふまいゞきめりやミルクの色かなし　鐵洲
滿されぬ心番茶に香りなく　同
父親に襷をかける用が出來　同
唄もなく日蔭に鋸の目をたてゝ　同

は、嘸戰場を驅せて居たことであらふ。

（一九三二、三、三）

疵も共に光る

山本葉光

一言の言葉もなく心持ちの解るものは親子の間柄か、戀人同志か極く親しい友達ぐらいのもので、それも極く稀れな事だ。

所が「句の世界」では、名人の砥師が名刀を砥いだ如くにその實力を光らせて魂を見せて呉れる。

ある時は選者も作家も驚ろかされる事がある樣に思はれる。

三月號の月評の句の

退屈な人に蜂の巣潰された。

暇のある退屈な病人が見つけたユーモアの寸景を、義憤だと見る眼と、蜂の巣の賑やかさと復雜なる多忙の勞働の團結を潰すと云ふ、人間社會の縮圖と見る眼と、作爲の寓意が餘り顏を出し過ぎてゐると言ふ眼とが、ある。

義憤と暗示とを匂わせる偶然の名句。

お母さん長い屈從でしたねえ。

博士論文の通過した報にとか、卒業證書を握つた時に未亡人が一人子をようやく世の中へ出す嬉びに對する子の獨白と見る陽氣な嬉びと見るのは輕すぎないか知ら。

老ひてむすかしい夫と死別に會つた母親に對する子の複雜な感情と、めぐまれずに死んだ母親に不幸の子の涙でもある。

春の觸手　琴人

ククと啼く蛙いつぴきにひきの夜　同
なだめてもすかしても實の母がよく　同
お氣に召さずば僕は僕でゆこ　同
人寢しづまれば月光屋根に下りて　丹路
扁平な鼻に思想がうづくまり　同
春泥に少女は細い脚をたて　同

故郷にて

地曳網に竹馬の友の顔竝び　雅幽
羽織着て惱ましき春を室に座し　同
口笛や兵作ごんの伴にて　同

○

新妻の煙草吸ふ口見附けられ　閑生
足踏んでいつたまひ兒の女親　同
闘踏むはづみに襖こけかゝり　同
射たれ雉子茜に翼ひるがへし　同
庭掃いてゐて病犬の眼に憑かれ　同
死は安し思ひなをして立ちあがり　晃卓

言葉の切れ端や斷片にしても、味わうべき魅力がある。磨けば光るが光れば疵がまた目立つ、疵も又愛すべきにあらずや。

切れそうもない錆刀を、磨いて砥いで、夏なほ寒き氷の刃にする砥石の月評「句の世界」の名人砥師の腕の冴えを感謝する。

俎板

大久保大夢子

「もつと堅い俎板おまへんのか」

お臺所から可なり大きな鮮音がトツ走つて來た、女房が聲を出せば一人しきや外に居ない僕に對してゃあらうが抑々俎板は女房の獨占品であつて亭主の僕が堅からうが柔からうが何の責任もない筈だ。

「アンタア、こんな俎板けづれまへんのか」

のか、は愈々以て不穩當ではあるが仕方がない立つて行く。ナアル程、チビつて居る。天王寺西門の敷居のやうに。

「けづれまへんやろか」

亭主の顔を見て女房は妥協的に出て來た。

削る？削れんこともないが、だがしかし鰹節削りでは刃が立ちそうにもない。

「いつ買うたんかナア」

「職工學校の展覽會で」

「フーン？」

よつてもつて沈思默考職工學校の展覽會なるものを思ひ浮べてみると、確かに一度女房をつれて行つたことがある。僕が此前のも一つ前の家に居た時分だから大正——イヤ昭和二年の春だ。三四五六七九五年毎日

燈明へあなたまかせの手を合せ　同
金借りに行けば流儀に茶を出され　同
利の高い事は思はで恩に被る　同
レッテルのいゝのが鼻で笑つたな　夕鐘
横町でしやがんで女給の無理をきく　同
窓口へ金を出す人ばかりなり　同
いゝ鴨へかはる〳〵にちよくを差し　同
早起きをしたが雀の方が先き　計加
そんなもの描ける描けんで爭ふ子　同
本見ると煎餅のかけが挾まれて　同
半身を搖つて思春期が笑ふ　艸樂
推定は峠も下りもない稅務　同
空氣銃を買ふて送れといこやすく　同
よく與ふ君も貧しき者ならむ　鶴峰
ふと見れば相不變と書いてある　同

選擧雜觀

誰を入れるか妻にも言はず　同
眞けんの金策に來て笑はれる　紅

コツ〳〵叩いて居る俎板であつた。

「何とよくつかつたなア」

「ソヤ〳〵角の下駄屋でたのも」

女房はもう帝主を見る事我に如かずといつた風にサツト俎板に水をかけて陽なたに立てかけてしまつた。アノ俎板は削られてまた五年また削られて天板が折箱の蓋の如くなるまで使はれるのであらう。

ウチの女房もう十何年か使つて來た、もう下駄屋の鉋にもかゝらないのである。百貨店の地下室に俎板は安つぽい正札がつけてあるのに。

「ガ、憂鬱なる人生！」

袂斬り犯人

中野裸人

戰爭氣分が漲つて到る所喧しい今日、それは又人の出盛る活動寫眞館や、芝居見物の人込みを狙つて、若い女の袂を斬り髪を斬り或は頰を斬つて悅に入る阿呆な人間の出現した事は、何よりも悲しむべき厄介な出來事に違いない。

が、併し今我々は一歩退いて斯樣した阿呆な人間のその心理狀態を少しでも考へて見る時、彼等は誠に憫むべき氣毒な性格の持主である事を知るのである。彼等の中には何の底意もなく面白半分或は只人のやつた事

後さしの炬燵内職向を替え　同
孫の爲子の爲みかんの繼木　同
本懷の姿も悲し雪の夜　水車

新滿洲國成る

宣統の君はモダンに在はしまし　同
合札と金を握つていゝ晦日　同
明日を待つ心はただに淋しけれ　蒼太
インク壺投げつけてさて何んになる　同
しんしんと雪は冷めたい忍び足　同
男は賣れぬ三疊の部屋　光路
春風へ水は流れて止まらない　同
ネクタイを解けば疲れた息が拔け　同
虫二匹、虫三匹の春になり　華水
オーバーのポケッの中に穴があり　同
序幕から河合武雄の聲になり　同
人妻の乳汁がポンプのように出る　鮎美

赤椿に寄す

赤椿愛傷篇とはなりぬ　同

を眞似て面白がつてする惡戯もあらう。又プロ、ルンペンと云つた風の者の常にプル的有閑階級に對する反抗心が著しく抗じて主義や思想だけでは我慢が出來ず、直接行動に依つて自分の心持ちを幾等かでも和らげ樣とする目的から行われる場合もあるであらう。併し被害者の殆んど總てが若い女のみに限られてゐるのを見ては大部分變態性慾者の行爲であると見なければならない。若しこれ等の大部分が變態性慾者の行爲であるとすれば、彼等は餘程病勢の進んだ極端な重患者に違ひないのである。ずつと以前私は某活動寫眞館の喫煙室で、變な男と出會つた時、その男から私は彼の是迄の行動や經驗談を色々聞いた事があつた。今それに依つて考へて見ると變態性慾者の種類も色々あらうが、大体若い女の身につけてゐる赤い物や若い女の履物、黑い髮等々に興味を覺へたり或は公衆便所の厭な空氣に少しでも刺戟を感じる頃が、そも〳〵變態性慾のもう可成り病勢の進んだ第二期とも云ふべき頃なんださうである。それが段々慣れてくるに隨つて、病勢はいよ〳〵進み、二三ヶ月もすれば見たり想像したりする位では到底滿足出來なくなり、羽織の下で活躍する豊滿な肉の迫力を感じたり、或は胸の邊の柔らかな突出や下駄やフェルトの重壓をひし〳〵と感じ

彼に扮する

俳優の魂までも赤椿　同
濕布したまゝで落選寢てしまひ　豆秋
うれしそな顔して兵士出は出たが　同
あの邊が大阪あたり春霞　同
寢食を忘れて二等兵の足　明珠
苦勞した机いねむる間を許せ　同
丹精をこめて砥石を減らすのみ　同
もうこてもねむくお針をしごくなり　靈壺
誘惑にかゝるお顔でないつらさ　同
放浪の子あり三勇士を拜み　同
强ひられて踊る妓の拔き衣紋　翠夢
金は出來たしかし彼氏は死んでゆき　同
春、春、春、煙草の煙りにも春だ　同
横暴ゝ怨嗟こゝでは碁をかこみ　春秋
旅の恥赤き蒲團の印象よ　同
花畑にマダムの多情そゝられぬ　都之介
街頭の戀爭奪ゝなる春ぞ　同

てそれ等の總ゆる物に手を觸れなければ、感興が湧かなくなるんださうである。私の出會つた彼の男も且ては吳服屋の陳列をのぞいたり、便所の空氣を滿喫するかせなければ日の暮れなかつた阿呆な人間だつたさうであるが、今では完全なサディズム患者であると、彼自らが堂々と名乘つてゐた、併し何にしてもお氣毒な次第である。さて何故彼等は其の目的物に損害をあたえて喜ぶかと云ふと私の考へではつまり「可愛さが餘つて憎さが百倍」と云ふ樣な意味で極く輕卒な考へから、其の目的物が少しも自分の自由にもてあそべないとか、其の女等に對して自分は少しの所有權も得られないと云ふ處から、いつそ目前の寶とも云ふべき美の一部分にでも破壞を加へて、それ等の目的物から受ける羨望とか、魅惑悲觀失望と云つた苦惱の域から少しでも自分を救ひ出さうとする結果、かゝる行爲が演ぜられ、又その場合恐ろしい勢で迫つて來る惱みによつて人間の慘酷な潛在意識が頭を持ちあげて來て、すつかり理性を失ひ、盲目的にその行爲が行われるのではないだらうか。そしてだん〳〵常習的になり病氣が慢性になるにつれそんな事を平氣でやつて被害者の逃げ廻つたり騷いだりするその有樣を眺めては、異樣な快感を覺へるのではないかと私は考へてゐるのである。併

麥の芽へ嗚呼冷酷な煙よな　奇可愛
仕方ない笑ひと知らず子は踊る　同
悠々として居れず安達謙藏　綠之助

病む友へ

病めばとてそれ青空と葱畑　同
小説に思ひ當てられ一服し　濁水
振替はバン〳〵バンと一つくれ　同
藥湯のおばあさんの臍見つからず　裸人
面白い繪を見せに來る啞の客　同
揚足をとられ旦那はきらいなり　夢裡
しもぶくれの頰感傷の春となり　同
ライター！に晩い憧れとも見られ　民郎
春の夜のルパンたくみに路次をぬけ　同
鹽まいた妻も女の姿にて　變人
ふりむけば姿は見えず灯が見える　同
滿足に育つて親を困らせる　錦水

明日公休

混雜な風呂でゆつくり髭をそり　小柳子

し何にしても此の病氣は藥や灸はおろか、一通りな療法では到底癒らない。至極厄介な病氣である事は云ふまでもない。自分には妻も子供もあり教育も相當ある立派な人ですら、時々この病氣に見舞はれて惱ましい日を送つて居られる方が可成りにある位である。暖かな春が訪れて、ぼか〳〵と陽氣になつて花が咲いて、セルを着て、町内の花見が初まる頃になれば、こんな病人は定めし惱ましい日が續く事だらう。

終りに臨んで讀者諸君に一言する「私が決して秋斬り犯人や頻斬り犯人」でない事を吳れ吳れも云つておく。

（昭和七年二月二十八日）

松江支部漫談

天　痴　人

川柳雜誌松江支部は現在六人の支部同人に依つて堅實な歩みを繼續してをります。

仲が好すぎて時々「愉快な私的闘爭」を演ずる巻二君都之介君。カフエーが其「私的闘爭」の演技場であり、白粉斑らな女給さんがアンパイアであるのであります。玲人君は町二第二世と言ひたい程、つゝましくがつちりしてゐます。そして時々巻二君達のカフエー遊びへ誘惑されます。田中雪丸君は句會に出て貰つただけで有難い程の大伯父さんで、いつもニコニコしてをられます。川柳

◇

わが夫婦アルミの音に似た暮し　大夢子
北濱を寒う曲れば陰陽師　同
半額を切抜いてため切抜いてため　同
何ほ子がないこて其襟其鼻緒　同
春寒の今日負摺に二度出會ひ　不然
仲のよい夫婦だい〳〵湯を好み　同
醉ふて寢た所か此處の小穢さ　同
寢姿が憎しみきつて見守られ　同
勤め先まで高利貸しくじらせ　沒食子
晩婚に妻も判任官であり　同
放縱もよしあるここの息子なり　同
子に意見する年輩をのみあるき　方眠
村の道なんにゝ言はず梅が咲き　同
緣談へ酒はにほひもいやこ言ひ　同
あぶらゑをしきりに書いた頃の戀　露斗
新婚の自動車にゆれ汽車にゆれ　同

雜誌へ入つてもやはり、松陽柳壇式な句を作られるのが御愛嬌であります。柳人君は兄上がこの間うら若い花嫁樣を迎へたので催眠劑を毎晩呑んで寢るとか寢ないとか言ふ噂がもつぱらであります。そして天痴人君は第三號が出來たのであります。そして天痴人君は第三號が出來たので ダツチペツサリーの必要を痛く感じてゐるさうであります。（之は內證にしてをいて下さい）（完）

斷片

松丘町二

時局の歌

最近の新聞歌壇から拔萃數首

生きの身に爆彈つゝみ敵陣へおのれとび入るそのをゝしさは
日の丸のちぎれるまでに打ち振りて皇軍を迎ふ子供等愛し
千人針に應じてゐる妻の傍に戰禍を呪ふ暗いこゝろ
出征兵士ひとり違つたこゝろで俺も一しよに見送つた
廣告氣球をぼんやりと見上げる男 突如召集令狀だ
平和來の號外を三月の鋪道にさす痩せた都市

川柳では前號に銀雪氏の喜んで戰地へ行つたことにされ

針包む女工の歌がもれて來る　同
怒る事その位にして子を思ひ　勝二
聞き分けられて貧乏がいやになり　同
年に無理させて待つてる子の出世　同
打沈む耳へ母の口叔母の口　虚白

分掌替に會ひ

今更に老驥伏櫪誰に曰ふ　同
犧牲者は出さぬと上司慰める　同
ひとこころのほろさ思へば働けず　翠峯
十人に吹きこばされし我が意見　同
榮轉の一家展望車に列び　柳兒
生字引閥でないのが自慢なり　同
蔦の舞ふ空まで春を引上げる　湖山
迂濶にも神を冒瀆せんとせし　同
年頃を腰の湯から拾ひ出し　如空
函館へ遣るぞと寒い日を叱り　同
懐手へ御多忙ですかとは皮肉　耕民

がある。その外あまり見當らない。

友　達

何時間話してゐても、話し飽かない。
その癖何時間默つたまゝでゐても、退屈しない。
話してゐても、默つてゐても、お互の心が通ふ。
こんな友達を只の一人でも持つ者は、人生最大の幸福である。
棺側に友達一人居ればよし　杏三

時計の性格

ネジは捲く時間と、捲く回數をきめてやること。腕からはづして靜置することは却て禁物。タイピストの腕時計も四時には、ちやんと四時を指す。持主の生活に馴致されて、時計も性格を持つといふ話。

轉居

楊井二南君（大阪府下豐能郡北豐島村字玉坂二一矢野松太郎方）
宮内白峰君（大阪市港區鶴町二ノ八八）
上村壽夫君（高知市西唐人町五二）

正誤

三月號近作柳樽中「猫背へつぶてとなりしカレンダー」秀樹

紙上噴水

船津梵兒

面白い句

綠雨氏は一向面白くない句を作る人である。だが一体面白いことは何んなことかと考へてみると、魂から乃至自然から滲み出してゐない川柳、機智の連鎖から卽興的に作られた空虛きはまる川柳が、聯想的に讀者の經驗と合致したり、讀者の好尙に適應したりした場合、きまつて用ゐられるのが、この「面白い」といふ言葉である。そんな面白さは私には寂しく思はれる。そんな面白さは遊戯的な川柳や工藝的な川柳の生命ではあらうが、ごうも今の私は、そんな句を苦心して作つてみやうといふ興味も、勇氣も、そして惡いことには能力もなくなつて仕舞つた。

だから綠雨氏が所謂面白い句を昔から作つてみせぬといふことは、云ひかへれば默々として自分の畑へ蹴をおろしてゐることは、敬意と共に甚だ好感がもてるのである。

石垣の冷える時分に夜が更ける　綠雨
の時代から
外交員葉がはらりはらりとおちる　同

の最近まで、一度も綠雨氏は他人の言葉で歌つてはゐない。「綠雨の熱」は健康に續いてゆく。

損得

同じ土地に住みながら、今は滅多に顏を合さないZが嘗て私に云つたことがある。

「僕は夕刊は必ず夕刊大阪を買ひまんね。同じ二錢でも紙數が多いから」

亦ある時、「のりかへなし」の電車に乘つて

「ごうも乘換券を貰はぬと、何だか損をしたやうな氣がする」

かうした日常茶飯事に現れる考へ方は、Zが經濟學部の學生であるがためでは必ずしもないらしい。

年輪

川柳漫畫「冬集明治の卷」の中から

僕は立つてゐる煙突は煙吐いてゐる　路郎
夜の息は强く洋書の繪の匂ひ　三太郎
葉書さへ來ぬ一日あり秋淋し　路郎

社を歸る老人のごと秋は來る　紫痴郎
悲しみの溢るゝまゝに吹く笛か　三太郎
園はれの白粉燒や逝く年や　喜代志
憂り日を憂ひの人よ日向葵よ　奈良武
木犀の窓に女の生唾　三茶
燻りそたとへば世をば拗れ者の　奈良武
白靴の底から秋が身をつたひ　五葉
秋高く蝶の行方の覺束な　水府

これらの人々のうち、當代の大家として活躍してゐる路郎、三太郎、水府、五葉の諸氏の現在の創作を思ひ併せて、なか〳〵興味深く覺えた。以上の句は明治時代では最も新しい形式の一つだつたのであらう。假令そこには通俗の感傷精神と、星菫文學らしい臭味の上に置かれた表現であるとしても、尙作者の感情が生きて動いてゐるのを感得することが出來る。

爾後二十年の歲月を經て、諸氏は行きつくところへ行きつかうとしてゐる。川柳詩人として誰が最も高く評價せらるべきか？この疑問符に答へるものは、尙此後に續く數十年の歲月であらう。後代に於て昭和の川柳と川柳家に批判のメスを向ける鋭い正しい眼であらう。

望　蜀

「きやり」の三月號で雨吉、太郎丸、迷亭の諸氏が月評をして

女十八アダリンの夢　路郎

の句について、雨吉氏は

「これは句であつて詩ではない。主觀の强い句は結局自分だけの滿足に終つて了ふ」といふ意味を述べてゐるが、そして「三味線草」の雞牛子氏がこの說に共鳴してゐるが、可惜雨吉氏は詩に於ける主觀といふことについて考へ違ひをされてはゐないか。失禮な云ひ方であるが、詩についての明瞭な自意識といふ點に遺憾がありはしないか。「これは句であつて詩ではない」などゝいふ言葉も、決して頭の善い云ひ方ではない。私は何もこの句の優劣を云つてゐるのではなく、雨吉氏にして尙かくの如きであるといふ事情を指してゐるのである。折角の月評である今少しの叡智と示唆とを望むのは、望む方の無理であらうか。

期　待

「たまむし」に毎號諤々の論陣を張る日吉一夫氏は、確かに特異の存在ではあるが、惜しいことに、行文が晦澁で論理が一貫しない。少くともさう見えるのは、生硬な文字の亂用によるのだらうが、うつかりしてゐると、何が何やらわからなくなる。これは讀者である私の頭が悪いのか、日吉氏の頭が悪いのか、恐らくその兩方であらうが、も少しやさしい言葉を使つても、論旨を進めるのに別に不都合はないと思ふ。只氏の眞劍な一本氣な氣持には好意が持てるし、その學究的な對度には尊敬を惜しまないが、此上氏に望むところは、長詩と短詩とを問はず、眞に詩を解し得るものは、それらの詩の創作に苦心してきた詩人に限る。元來「歌はぬ詩人」なんてものは意味をなさないのだから、氏も先づ論ずる前に——若しくは論じつゝ——歌ふべきである。といふことである。そうすれば、百の詩論も一の創作に如かぬことを悟られるであらう。私は來月からの同誌上に、詩論の實踐として、氏の創作川柳を樂しみたい。

月評 句の世界

杏三　町　ひろし　山　荳　路

二　し　楼　乃　郎

第一線　杏三提出

わが生命南京玉となつて散れ

蒼　太

杏三―近頃病床に親しんでゐる君の句として一讃胸を打たれるものがある。ひろし―胸を打たれると云ふ様な感じではない。明朗な感じだれ……

路郎―病弱の人の句としては受取れるが、或る暗さとか強さとか云ふものを感じる事が少い。之は未だ生活に餘裕があるからであらう。美しい弱さの出てゐる句である。

荳乃―「南京玉となつて散れ」と云ふのは餘り珍らしい奇拔な比喩ではないと思ひます。死ぬ時でも花火がパッとはぜる様な快さを望んでゐられると云ふよりは、彩とりどりの美しさに憧れを持つてゐられると云ふ方が克つてゐると思ひます。

ひろし―死なうとか死と云ふ様な事を作者が考へてゐるとは、讀者は感じてはゐない。要するにこの句の「生命」と云ふのは生命を絶つ事では無さそうだ。作者の魂と云つたものだと思ふ。南京玉の様な美しさを以て散切れ〳〵に夢遊したいと云ふ様な氣持ではなからうか。

路郎―確かに南京玉の美しさと死の讃美とが相交錯した氣持が盛込まれてゐる。

町二―或る意味で嘘の句と思へる。それは、作者の氣持は決して嘘ではないが、句となつてあらはれた表現が、嘘らしく見える結果になつたと思はれる。それは「わが生命」と云ふ言葉に對する下の表現が投げやりでお粗末であるからだと思ふ。この句の上から考えると生命をもてあそんで嬉しがつてゐる様に思ふ。「布團が皮膚になつた生活」の方が遙かに眞實であらう。

荳乃―若しこの作句者が死に面した刹那の閃めきを望んでゐられるのでしたら、「南京玉」と云ふよりは鳳仙花かスヰートピーの莢をはじくと云ふ方が、氣持を出す事が出來る

町二―問題はひろし氏が言つた「わが生命」の解釋如何に依るのでせう。

近作柳樽　路郎提出

でも臺所に明るいお前だつた

羅　門

路郎―口語調としても古い口語調でなくて現代味の流れてゐる口語調として推奬したい。或る人達から言はせれば、文章の切れ端しだと評するかも知れぬが、かう云ふ句をさして文章の切れ端しと感ずる人々には、おそらく新らしい詩のリズム等は全然感ぜられないのだと思ふ。この句の中で「明るい」の三字は臺所にかゝつてゐる光線的のものでなくて、經濟的家庭的の意味の「明るい」である事は云ふまでもなからう。

杏三—この句は「でも」で切れ「臺所に」で切れ「明るい」で切れ「お前だつた」で切れて、この四つに切れた齣は、斷切れぬ惱みを表現するのに効果的であると思ふ。

ひろし—この句はそんなに四つに切れてゐない。「でも臺所に」は二つに分けても可笑しくないが、「明るいお前だつた」と詠まないとその頃を偲ぶ氣持なり、その頃の二人の生活が浮んで來ない。

杏三—私は「明るい」で切れてその明るさが「臺所」と「お前」にかゝる處にこの句の面白さがあるのではないかと思ふ。

路郎—僕はひろし君の解釋を聞いてから一寸疑問が湧いて來た。僕の積りでは「でも」で切れて「臺所に明るいお前だつた」と解釋してゐたのであるが、ひろし君の說を聞いてみると成程その方が自然な解釋の樣に思はれる。併し僕の解釋には從來に持つてゐない味があるけれども、作者の考へ方は寧ろひろし君の說の方であるらしい。只齣切り方に依つてこの句は二樣に解釋される。

ひろし—僕は今杏三君が四つに切つてあるからいゝと言はれたから、四つに切られては困るから言つたまでゞ、この句をどう詠むかと言ふ事に就ては「でも」で切り「臺所に明るいお前だつた」でもよいと思ふし「でも臺所に」で切り「明るいお前だつた」で切つてもよいと思ふ。——私の選をした際の考えではやゝ夫婦の倦怠を覺えて來たそんなに年老いてゐない若夫婦つまり結婚後二年程の僕自身の夫婦生活のその頃を思つた。妻は御飯支度等には興味がなくなり、結婚當時の樣にいそ〳〵と夫の爲に食事の支度をしなくなつてゐる。夫も今晩はどんな御馳走を拵らへるかと言つた興味を持たなくなつた頃その頃に何かのはずみで、それでも君だつて臺所に明るく立働いてゐたのだつたが——と云ふ樣な僕の實感にピツタリ來たわけである。

路郎—僕は「でも臺所に、明るいお前だつた」と二つに切るのと「でも、臺所に明るい、お前だつた」の切り方とでは句意が全然變つてくると思ふので繰返して述べておく。

町二—杏三氏が先にこの句を四つの齣に分けたのは、リズム論から言つたのであれでいゝと思ふ。羅門君の句にはリズム的に非常に面白い句があるので興味を持つてゐる。句意は「明るい」を先生の言はれた經濟的に明るい意味にとつた方が自然であると思ふ。

杏三—この作者にはこの樣な句の構成手法をよく用ひてゐる樣だ。例へば前月號「月へしろきひとすじ溜息すてる」でも「しろき」が「月」と「溜息」にかゝつてゐる樣に思はれる。

町二—だから「明るい」が「臺所」にもかゝり「お前」にもかゝる或る種の餘情をもたせた形式である。(このとき山雨樓氏出席)

ひろし—前の「月へしろき」の場合は「しろき」は如何にも「月」と「溜息」と相方に白い感じがかゝつてゐると言へるかも知れぬが、この句の場合の「明るい」は「明るい」の意味が人物そのものゝ動作が明るい、それから臺所の光線が明るい、それから臺所の仕事そのもの——御飯をたくとかお菜をたくとか買物が上手とか——經濟的に明るいとの三樣の說が諸君に依つて提示されたわけで大變意味の違つた句になつてゐる。第三番目の解釋であればこの人は今ではそうした世話女房式から離れた生活をしてゐる對象となるわけで、僕の考えとは全然違つたものになる樣だ。

町二—單に別れた妻であつてもいゝ。それ等三通りの解釋をひつくるめて「明るい」と言つてゐると見てもよからう。

杏三—句の鑑賞に於て必ずしもその內容を詮索しなくとも、例へばこの句であれば「明るい」の內容を詮索しなくともたゞ「明るい」と云つた表現だけを味はつて十分であらう。

山雨樓—然しこの句の生命は「明るい」と云ふ處にあるのだと思ふ。その明るい感じがどう響いてくるかゞ問題でなければならぬ。僕

の感じでは單に容姿とか 年齢とか云ふものを抜きにした全体的の感じが 現在の彼女の姿と變つてゐると云ふ點に、ある淋しい感情がにじみ出てゐる樣に思ふ。

杏三—勿論前から「明るい」と云ふ事が句の生命である事は前から言つてゐる筈である。たゞその「明るい」と云ふ内容が何うであつてもよいと言つたまでゞある。

（三月十日、於不朽洞、丹路筆記）

✦ ✦

路郎—今晩は諸君のお集りも遲かつたし、時間の關係もあるので、俎上にあげた以上の二句だけでは甚だ淋しく思はれるが、これで打切りとする。尙三月號には特異な句として提出したいと思つてゐた左の數句があるが、前述の次第で遺憾乍ら割愛する。

第一線の中では

冬の汗が女工さんの体臭となる　町二
折鞄靴のかゞとがありません　絲雨
眼鏡くもれるまるき心になり給へ　鮎美
牛のちゝ戀を戀する目にとまり　靈壺

目論見の出會ふた人も數に入れ　如空

春秋點では

闘病のプランに明けるお元日　美子朗
喜んで戰地へ行つたことにされ　銀雪
風邪で寢て四五十圓をしぼられる　九葉

近作柳樽では

愛兒の足袋まつか眞冬　羅門
言葉の上の愛に空虛が出來し春　葉光
常盤津ばかり青く見えてる　卜居

光線抄では

笑ふても泣いてもエロを持つ女　房子
有田洋行の象に
明日居ない象へお酒をやりに行き　壽枝女

川柳塔では

嫁ぐ話か風がころ〳〵　愚陀
薄情を聖天樣へ告げに行く　豆秋
信心に凝るなきつい目になるぞ妻　明珠
處女の足電氣炬燵は彼でなし　春秋
猿廻し宿へ戻ればある女房　綠之助

關西訪問團行程

▼四月三日　午前七時十八分大阪梅田驛着、自動車に分乘—中の島—堺筋を經て 新世界 噴泉浴場へ（各自入浴）—八時半出發—自動車にて—住吉神社（神樂、住吉踊）—四天王寺、（物故川柳家のために 引導鐘）—茶臼山（晝飯、雲水 普茶料理）十一時三十分出發—大阪城（天守閣）—南北御堂さん—新町（九軒吉田屋夕霧の遺物）—四ツ橋—文樂座—會場へ—午後二時 句會後—歡迎晩餐會、それより 夜の心齋橋、道頓堀、千日前を 散策—宿泊

▼……▲

▼四月四日　—午前十時天滿橋集合—京阪電車にて 桃山御陵參拜—京都へ—三條大橋下車—（晝食）—自動車にて 知恩院—大極殿—御所—北野—嵐山— 本願寺—三十三間堂—清水まで 自動車—都をどり—平の家にて（夕食）夜、京極散策

百號記念 懸賞川柳大募集

「川柳雜誌」創刊第百號の刊行を記念すべく、五月四日 朝日會館に於て「川柳の夕」を開催し、この擧をして可及的意義あらしめるため、左の規定により川柳を募集致します。奮つて御投句下さい。

▼題「世間」三句　麻生路郎選

賞　一等　五圓　一名
　　二等　三圓　一名
　　三等　一圓　三名
金　但し受賞は當日出席者に限る事
　　購讀券）廿名

用紙　官製葉書（住所氏名明記）

〆切　五月二日本社着

發表　五月四日朝日會館に於て

投稿　大阪市住吉區平野西之町　川柳雜誌社

春秋黙

路郎選

はさまれた指もびつくりした痛さ　大阪　大門
古本屋まだ賣れてゐぬ安堵あり　同　同
太陽に叱られてゐる靴磨き　同　同
鐵筋の裏へ廻れば鷄を飼ひ　松山　秋無草
グランドの月を宿直懷しみ　同　同

京都にて

トランクの重みへお西さまの屋根　同　同
寒の水ですと仲居の親切な　京都　草村
賢兄は二度目の選擧費用なく　同　同
自轉車で來る鮮人の緊張よ　同　同
僞善者よその財産を棄てなさい　釜ヶ池　愚龍
刀根山の音をみんなはさびしがる　同　同

ウルトラ、マダム

二人でも食へぬ世帶だ解消だ　大阪　山茶花

照子君へ

ヂレットの刃にもひどしき理性なる　同　同
世の中がうるさき物にうつる歳　松江　巷二
純情を抱いて世間にそむかれる　同　同
リゾールの手をなつかしむ妓もまじり　大阪　湧三
往診へ仁術とみた紙包み　同　同
兄妹へ曖昧宿が呼びかける　大阪　橙舍
婦人會夫の月給でならんでゐ　同　同
休職へ氣の毒そうにする舞妓　神戸　柳川亭

飛行機活躍

西向いて行く飛行機へのび上り　同　同
おのれだけよい顏をする淺ましさ　大阪　青光
能率と云うて人間機械にし　同　同
軍籍にないから彼は主戰論　東京　銀雪
立志傳中途半端な人が書き　同　同
自分の美貌を信じ戀を疑はず　京都　一正
胸を張りきつた鷄へ朝日が昇る　同　同
寂しきに裸木の古巢見上げぬ　大阪　南面子
給料を握り夕陽に息す　同　同
死ぬるんぢやないぞと笑つてやりぬ　尼崎　義郎
救ふ氣もなくて醫長は休診し　同　同
結束は堅く湯もたぎつてる　大阪　いわを

巡査が笑うた　プルの子供に　同　同　素月
スキーヤー　海軍ナイフまで　脊負ひ　大阪　大阪　無鬼
おこつても　居られない程　バスがゆれ　同　同　利生

新家庭

辛過ぎてよし甘すぎてよし晩の卓　大連　三碧
日支變南京豆も賣れずなり　奈良　南京豆
金策の妻寒月へ春をまるめ　京都　啓秀
春の空へ心の躍る青春よ　大聖寺　水玉
淋しさは流れにそうて石を蹴る　同　醉羊
兩隣り子供を叱る上手下手　大阪　緩勾配
父のして居る職業がわかつて來　京都　初歩

夫に死別の農婦へ

ぜひもない事女手に米俵　島根　蒼星
冬の風こんなに痩せた男がゐ　養ヶ池　晴夫
えらい雪だんなあと焚火を圍み　同　松雨

施療院にて

屈辱に今日も甘んじ悲がなし　同　美子朗
ベットへ消えた青春よ二十二よ　同　芳朗
着剛れたる胴着に母の弱々し　同　卷巴
彼にだけ凡てを許し愛してる　大阪　あや美
任官へ禮服が出來借が出來　同　吐句坊
結局は義絶に終る判を捺し　鳥取　暢山
金ためて不具者のやうにあつかはれ　大阪　みつる
共々に働く白髪染てゐる　同　四五磨

ひら〳〵と雪舞妓の傘を繪にしたり　金澤　花曙
盗人に嗤はれてゐる金庫税　大阪　無鬼
ハイ〳〵と四十の男使はれて　同　利生
ショールの眞白さ處女と云ふ姿　同　一久
手の筋を信じきつてる二十一　神戸　霞川
ラッパの音とつと歩調を合して見　大阪　錦石
幸運が授かりさうな子の名前　名古屋　七笑
寢附かうとすれば南無妙法蓮華　石川　しとし
富山から伺ひますと冬越えて　大阪　鉛位

友自殺す

鈍刀に似て夜のレールの此處彼處　大阪　蝸牛
貰ふ氣かと言はれる迄も默つて居　同　灯羊子

新和歌浦に二人來て

思ひ出を新和歌浦に殘すまじ　同　みつる
休んでたくせにえらそうに云ふない　堺　慈雨來
ソプラノの旅歐洲で戀に落ち　大阪　おさむ
疑視されて處女白ころにつまづきぬ　神戸　鬼笑太
八百屋さへ聲をかけなくなりました　堺　曲豆
兒の寢顔見ては出て行けとも云へず　大阪　菊路
眉落す人に悔しい歳であり　同　えいを

新妻を迎へて

精力の相違もあらず花の春　平塚　草夫
安物でよい事だけはわかつてる　京都　甫三
失職して火の見の見える塲末にゐ　大聖寺　溪鶯

未亡人淺間しい瞳へ突きあたり　青森　夢一文
死際の醜い坊主嘲けられ　大聖寺　白花子
此頃は兒のおみやげにまようなり　犬山　練屋丁

己が裝の嬉しくて歩む乙女等　東京　蒼梧樓
醫者ちらり下着のあらを見逃さず　同　同
負けられぬ話切口上になり　同　同

春月妙照信女の靈へ

鏡臺のちりも其のまゝ一週忌　同　同
走つてた夢は希望にありしよな　同　同
フロイドに問ふまでもなき惡夢なる　同　同
彼女と歩けば輕々しさをたしなまれ　同　同
眉毛の疎なるなつかしい母です　島根　羅門
山に音應へてトロの列過ぐる　同　同
太陽と月と疲れた生活よ　同　同
電柱がつゞける嵐の風景　同　同
口笛と水平線と春の女　同　同

C子へ（二句）

悲しき答は針が眼を射たる　同　同
唄つて唄つて嵐の中なる悲哀　同　同

出征へ昨日貰つた燗が出來　大聖寺　一寛
ルンペンのメガネ曇つたまゝでよし　大阪　柳次
極みなき慾へ同志を賣つた奴　同　千雨

近作抄

町　二選

月が出たのに息の短かい口笛よ　京都　司郎
働いてゐる小僧ッ子に馬鹿にされ　同　同
津浪を思ふ黑い夕べだ　同　同
泥龜のしごろもごろのほゝゑみに似て　同　同
蝶の夢希望の夢もほろにがし　同　同
病室へ白く靜かな春が來る　神戸　竹風
雜音に强く交つたせき拂ひ　同　同
滿員の脇の下から子が覗き　同　同
虛無主義の男袂草とゐる　同　同
いくつかの罪が生れる港の夜　同　同
這ふ虫の心へ空は廣すぎる　岡山　雀子郎
落葉樹冬の罵聲へ目をつむる　同　同
燃え上る心へ嘘がからみつく　同　同
消えるべく煙素直に消えてゐる　同　同
もうだまされぬぞ乾いてる唇　同　同
チャブ臺のあれで涙の日もあるよ　松江　翠句朗

うそのない姿眞晝間の長屋　同　同
ヒステリー牛乳壜がおいてある　同　同
海面のにぶく光つて春よ來る　同　同
思ひ出は悲し現實また悲し　同　同

松江聯隊船津部隊渡滿

幼稚園までもミリタリズムの旗　松江　天痴人
米價八圓　同　同
犬養景氣しばらく嬉し地主樣　同　同

新入生体格檢査

卷尺が悲しむブルヂョアの子の胸圍　同　同
春の野良搾取戰線活氣めき　同　同
パッカードの君を待つ間を鳴るピアノ　大阪　沐天
黙すれば春の陽射しに放ごかれ　同　同
落魄の素足も哀し二月なる　同　同
ひしがれた三味に泪のかず〳〵や　同　同
雪がこけるのに田を取上げられてた　長野　有爲郎
春が來るぞと百姓は笑はない　同　同
雪こけだ蹴が光つて居てうれし　同　同
淺ましく選擧の渦の中の父　同　同
三人で來て進物のまこまらず　大阪　龍一
失戀へ遠く謠の聲すなり　同　同
ゆれるまゝ後ろを見ればふと淋し　同　同
商賣と戀とは別なものにする　同　同
不養生言はれるまゝにするときめ　神戸　幸村
財閥の儲けを知つた共稼ぎ　同　同
提灯を持つて電氣屋直しに來　同　同
愛妻家なぞと言はれて座談會　同　同

母病みて

寂しさを日ましに母の顔に見る　不明　舟路

十才の妹K子

看病に疲れ教科書開けたまゝ　同　同
戀されて幸福さうな口をきく　同　同
嘘ついた後でお經を上げてゐる　大阪　洋々

工場街警見

サイレンをふと魔笛とや思ひけむ　同　同

デモ風景

鐵門へぶつかつて行く人礫　同　同
買初めに行けば笑顔を添へて呉れ　兵庫　瑞穂
死なんには餘りに疲れ過ぎてゐる　同　同

出征風景

萬歳も云へぬ小さな手を擴げ　同　同
雪の夜を弄つて欲しく逢ひに來し　大阪　愛緒
ネオンサインに女の心が讀めさうだ　同　同
壁一重のかるたの聲が焦らせる　同　同
貧しき飯へ素直な膝たちよ　松江　晃史
朝の陽に夕日に壽命信じ居る　同　同
生き甲斐を語る女給とお客さん　同　同
腹は立つが切斷機の眼は外されぬ　大阪　秀樹

朝風呂はいゝが彼奴は守錢奴だ　同　同
スチームハンマーにくだけてしぶモガの脚　同　同　白柳子
人生を見詰めて壁へ折れる影　明　石　虚聲
寂しさを隱し切れない笑顔です　同　同　同
許された夜へ手足が伸び切らず　同　同　同
四十女四五人寄つて可笑がり　大　阪　鐘生
獨りで醉うて辻占買はされる　同　同　同
滿蒙を語るを聞けばエロの事　同　同　同
冬木立渴しても居ぬのゞ佛　神　戸　龍王
生眞面目な返事突然笑はれる　同　同　同
當世向きなんでもへいゝかしこまり　同　同　同
猫の足ふくのに女中かゝり切り　大　阪　憲坊
母だけが高價なものゝ思ひこみ　同　同　同
泉水に油が浮いて冬ゝなり　同　同　同
あくびした其の儘の手で窓を開け　島　根　鴉天
自惚をそゝる女給の賀狀が來　同　同　同
誘惑に來たなゝ財布さけて出る　同　同　同
親展なら無心であろゝ姉笑ひ　螢ヶ池　靜太
見すかした樣に看護婦笑ふだけ　同　同　同
惚れてゐるたゞそれだけでいゝのなり　同　同　同
母さまへラジオ解らぬことばかり　石　川　幾郎
アナウンサー人間的な咳をして　同　同　同
子守唄電車の中を憚らず　同　同　同
ぢつゝ聞くセコンド少しむらがあり　大　阪　白柳子

妹の死

合掌に位牌の文字の眞新らし　同　同　同

同窓會にて

煙草くはへりや先生はたゞ笑つてり　松　本　正司
初午の太鼓ドンドコ春が來る　同　同　同
べラ〳〵ゝ喋べる弱さに氣がつかず　大　阪　應軒
裏返すその座蒲團が本心さ　同　同　同
他人から案じられてる男前　高　知　青果
自轉車に乘るも職業婦人なり　同　同　同
世帶なれて酒の味が變るなり　大　阪　呑吸
喰へるだけが最後の諦めだ　同　同　同
歡心を買ふに三越まで走り　松　江　慕秋
響く鐘頰のくぼみへ滲みる鐘　同　同　同
惡い事出來ぬゝ笑ふ久しぶり　大　阪　一笑
妹ゝ言譯したき程見られ　同　同　同
平凡な若さを退屈させる朝　松　江　柳人
感覺も失せてインチキバーを出る　同　同　同
モーションが解らず酒はからいなり　大　阪　葉光
オシメよく乾くデン〳〵太鼓の音　同　同　同
女給が半分吸うた煙草の美味さ　松　江　玲人

バラソルくる〳〵春は街から　同　大阪　同　小松園
白痴の嘘が人を走らす　同　熊本　同　水人
先祖には濟まぬ勤めの引き眉毛　同　同　同　卜居
金策に廓をぬける春の雨　大阪　同　同　かずま
日溜りに犬と居る子のハーモニカ　同　高岡　同　同
煤煙降る低い屋並の重い呼吸　大阪　大阪　八歩　同
瞳をやれば青き空限り無く淋し　同　同　同　英智夫
動員令もう許婚泣いてるず　高岡　同　同　公兎美
灰をならして女欠伸する　同　同　同　同
こびの輪へトンネル抜けた汽車の煙　大阪　大阪　愛媛　同
幸福はぢつとふさいだ瞳の内ら　同　同　同　同
出は出たが金がないのですぐ戻り　愛媛　同　同　同
信じてと言へど我身は女給なり　同　同　同　同
くつたくな朝親指をかんでゐる　釜ヶ池　釜ヶ池　同　秋彦
順調に進んで慾がふと起り　同　同　同　同
炬燵の娘未だ號外を知らぬなり　神戸　神戸　同　同
蜘蛛の巣を破つて椿溝へ落ち　同　同　同　同

滿洲事變

商人のもうかるまでに事變やみ　福井　佐顯　大阪　鯉友
わからずに聞いたはじめの言葉なり　大阪　正路　名古屋　鳳石
忍従の指に粉な煙草がこぼれ　高知　比呂詩　一本の燐寸に頭下げて呉れ　大阪　坊茄子
公休日袂のすみの電車賃　大阪　幽光
目覺むれば女は口を開いて居る　滋賀　小柳子
入營に母も萬歳叫びたり　大阪　雪丸
よごれてる靴で中學生の戀　松江　こも坊
痩せて又太つて氷柱節があり　大阪　右月
今起きた子供へ朝の陽がまぶし　郡山　白峯
心境の變化近頃吝になり　大阪　與詩雄
自家用はのろ〳〵走る堺筋　島根　笛秀
死ぬ迄さと無茶な男が言ひ切つた　大阪　世都象
號外で太平洋の幅を知り　愛媛　愛草
肩揚の未だありさうな若き妻　大阪　薫
茶話會で氣になる菓子の置所　大連　蝸牛
元日も女房エプロン掛け通し　大阪　富美三
戀もなく名もなく砂塵の中に立ち　京都　玄坊
己れの意志の弱さに恥ぢる兒の寢呼吸　大阪　耕朗
厄除につれた子供が風邪でねる　松山　合歡人
思はない戀を拾つた歸り道　釜ヶ池　梨風
あらためて見直す冬の夜の病舍　同　のぼる
淋しさを語る友なく脈をとる
鼻筋は白し女のよく唱ひ

或る返書

山本丹路

Yさん。御手紙を有難うございました。相變らず作歌に御精進遊ばされてゐる由、嬉しく思つて居ります。早速川柳雜誌三月號お送り致します。また讀後感をお聞かせ下さい。

Yさん。貴方の短歌への疑惑はまた私の川柳への疑惑とその根本に於て同じだと思ひます。然しかう云ふ惱みは、單なる作句上の行詰りから生ずる惱み等と異つて、大いに意義のある事と存じます。よく行詰りと云ふ事を聞かされます。不愉快な顏をして鉛筆をなめながら「句が出來ない〳〵〳〵」と嘆く人があります。でもそう云ふ單純な作句上の惱みは、眞摯な川柳愛と云ふものさへ自覺して居れば、時の經過と共に何時かは解決さるゝ事と存じます。そして愈々川柳家としてその川柳技巧が磨かれることでせう。

Yさん。ひるがへつて私達の惱みは、そう云ふ末梢的惱みと違つて、川柳が新らしい詩の一分野としてひたぶる發展を求めるその過程に生じた惱みであるのです。御存知の通り川柳も亦藝術であられねばならない、詩であられねばならないと自覺して、既成柳壇に登場したのは、最近の事であります。言はゞ現在は第一期第二期工事の過程であります。まだ〳〵多くの難關を控へ、多くの未解決問題を殘してゐると言はねばなりません。所詮私達の惱みはその過程に必然味はゝねばならぬ苦しい試練であると思ひます。その意味に於て私達の惱みは有意義だと信じ、反つて誇りを感じていゝと思ひます。惱みそれ自体が有意義と云ふのではありません。如何にこの惱みを處理せんかの努力が尊いのです。

Yさん。貴方が短歌への疑惑に徒らに降服の白旗をかゝげず、ひたぶる惱みと四つに組んで、此を清算し益々發展の駒を進めんとされる眞摯な御努力に對し、滿腔の敬意を表します。私も亦、徒らに降服の白旗をかゝげる醜態を演じますまい。傳統川柳への逆戻りや尖端を喜こぶ自稱新興川柳への無自覺な概念の飛躍は、共に無價値な逃避として私の取らざる處であります。私も亦大いに惱み拔かんの意氣に燃えて居るのであります。

Yさん。川柳人でない貴方から「貴方達の川柳は當然もつと社會的に認められていゝ筈だ。此點に於て川柳が短歌や俳句以下である事は、川柳人自身何等かの手落ちがあるのではないか」と眞正面に指摘されて、一介の川柳家である私と雖も少々たじ〳〵ならざるを得ないのであります。勿論川柳に親しみそめて尙日淺き私如き者の、川柳社會進出と云ふ改策的頭腦準備までは手が届きかねるのでありますが、兎に角大家と言はれる方々が其大きな問題を忘却して、徒らに井戸の中の蛙的存在に止まつてゐる事實は、私達初心者の大いに殘念に思つてゐる處であります

Yさん。川柳人でない貴方からいろ〳〵と御忠告をお伺ひしましたが、川柳人自身としてもそれに氣付いて居らないわけでは決してありません。（三月號でも山雨樓氏がこの大きな問題に就て所懷の一端を洩して居られます）獨り居れば之を案じ、多數寄れば之を論じ、誤られた川柳社交を輕蔑する自覺ある川柳人の力强き團結の續く限り、この問題も近く樂觀していゝ時が必ず來るものと信じて居ります。

Yさん。いづれお目眉いたし、親しくお話したいと存じます。川柳人でない貴方と、同じ短詩畠にある貴方と、膝を交へて語り合ふのもまたこよなき喜びです。

（一九三二・三・一）

柳の絮

長野吉高

（一二）

尾張屋といふよりは頑久と呼ぶ方がよく解るかも知れない頑久なら先づ界隈では大抵の者は知つてゐる。店は餘の華々しくはやつてゐないが、其れでも二、三人職人を使つて相當がつちりした菓子屋だ。

おらが國は尾張の名古屋のご城下が自慢の頑久さんは、二十二の年に東京へ出て夜の目も寢ずに臭い息の出る程稼いで腕一本でかなりの資産にまで叩き上げたゞけあつてなか〳〵の儉約人で頑固だ。久吉と言ふ立派な名があるが、誰か呼び初めたか到々頑久が通稱になつて了つた。だが人の世話もする、必要な事にはドン〳〵金を出すので町内の氣受けはいゝ

「七十まで生きても後十年でせう。この年までいゝ加減苦勞して來てゐますから、もう伜にでも後を讓つて樂隱居がしてみたいんですよ。そこで伜の嫁ですが——。」

頑久さんは人毎に樂隱居と伜の嫁の事を振廻す。風呂屋でこつつかまつた雨軒居士も聞かされた組の一人である。出入ではあり、秘藏の鉢植の松を無理に貰つた關係もあるので

「そりやいゝ。なアに、嫁なら澤山なものだよ。」

其の時うつかり饒舌つたのが因で、到々嫁探しを引受たが悅んだのは頑久さんで

「先生のお世話でしたら、大船に乘つたやうな氣でゐます。何分よろしく——。」

かうなつては、もう後へは退けない。

「怎うだね。先づこれと思ふ娘さんを紹介するから、當分の間は自由に交際さして、本人達に配偶者としての適否を定めさしては——。」

雨軒居士のこの提案に

「飛んでもない——近頃の新しい嫁取り法かも知れませんが其んな事は私が不承知ですよ。」

頑久さんは速座に否決する。

「舊套でも、やはり昔からの式例通り見合結婚をやらしたい

と思ひます。どうか其のお心算で何分よろしく——。」

雨軒居士も乘りかゝつた船だ。頑久さんの注文通りの嫁御察候補の物色を始める。

「輕々しくお引受けになるからいけません。有るやうに見えて割合に尠いのはお嫁さんでございますよ。」

妻君は頗る不安がる。

「何處にでもあるよ。」

妻君は苦笑して

「まゝ、氣輕な事ばかり仰有いますが、品物とは違ひます。人樣一生の大事でございますから——。」

だが、妻君の心配を裏切つて案外易々と候補者が一人あつた。東西の古書類の取扱ひで讀書界によく知られた神田の××堂の主人の遠緣で、巢鴨の方にゐる藥種屋の娘である。何處か適當なところがあれば嫁にやりたいと先方でも探しをやつてゐるといふ。雨軒居士の話に××堂の主人も乘氣になつて、

「本なら古くなる程、値の出るのがありますが、女の古くなつたのは一寸困ります。買手があればせいぐ〳〵新しい中に仕末をつけた方がいゝんですよ。」

「蠶魚の喰はない間に何んとかしないといけないわ。」

「一つ先方を說いて見ませう。ですが、こればかりは緣もので、外の者がどう氣を揉みましても成就するかせぬか、何んとも申上げられませんが——。」

「其れはさうだね。本人達が厭やだと言へばそれまでだから」

「兎に角、只今早速こいふ譯にもなりますまいから念の爲め先方の寫眞を貰つて來ませう。人物の凡その見當だけでもつけて置いて頂きます。」

主人を煩して、巢鴨から取寄せた候補者の寫眞を受取つたまではいゝが、其れを持つて歸る途中、何時の間に何處へ落したのか紛失して了つた。茂里榮ちやんに引張られて神田の汁粉屋へ立寄つた時、其處のテーブルの下にでも落したのか？松屋へ寄つた時に落したのか？其れとも銀座の鋪道の上にでも落したものか？これには雨軒居士が仰天したのも無理はない。××堂の主人は、極端なご幣かつぎである。こんな事でも知れやうものなら「緣起でもない、ケチがついた」で、折角の話が本論に入らない中に取消されて了ふ。其れでは困る。

××座で氣がついて、吃驚して其のまゝ神田の××堂まで引返しかけた雨軒居士、途中で思ひ直してこの寫眞の件は發表せぬ事に定めて了つた。大事の前の小事である。

頑久さんの悴の武君は當年二十八。經濟科出身である。近代づれのした世間並の平凡な陽氣な青年だ。勤めに出るといふ譯でもないので、親爺さんに叱られながらも間がな隙がな馬ばかり乘廻してゐる。カフェー入りをしたり其の他の惡遊びはやらないが、乘馬となると朝から飛出して一日中歸つて來ない。頑久さんはこれが氣に喰はない。

「學生時分ならまだしも、學校を出てからまで馬ばかり乘廻してゐてどうする。ちと家業の方でも手傳ふがいゝ。」

武君は一向半氣だ。てんで耳を貸さない。雨が降ると馬に乘れないので、友人を四、五人も連れて來て蓄音機を鳴らしてダンスをやる。頑久さんはこれがまた癪に觸る。

「これ武、中學生ぢやあるまいし友達を大勢引張り込んでガン〳〵騷がれては堪らん。第一お前の友達が來る毎に店の菓子を喰はれるので、あれでは幾ら商賣しても何の役にも立たん。ちと考へな。」

武君は武君で

「ケチ〳〵言ふもんぢやありませんよ。何んです、菓子の一つや二つ——。」

「これ〳〵、菓子の一つや二つが何んだとは何んだ。凡そ商人といふものは、厘毛の損益から見るやうでないと成功は出來ん。消費ばかり考へて生產を知らないのでは困る。其れでは經濟上の破綻だ。大學で何を習つた。」

これには武君も閉口する。

「それから、あのダンスとかいふものを止めてくれ。何んだ女の腐つたやうな眞似をして——。」

「阿父さんだつて醉拂ふと活惚れを踊るぢやありませんか。あれだつて餘りいゝ格好ではありませんよ。」

「わしは踊つても疊を傷めるやうな踊り方はしない。見な、お前の部屋を——ドン〳〵踊るから疊の表が皆んな磨り切れてゐる。不經濟至極だ。總べて商人といふものは——。」

「厘毛の損益から見るやうな者でないと成功出來ませんね。いや、解りましたよ。」

毎度の事なので、武君も口先だけではあつさりと頑久さんに勝を讓るが、實行方面ではなか〳〵敗けてゐない。

武君は、學生時代にはラグビーの選手で鳴らしたものだ。同じくラガーで一緒に學校を出たのに參謀本部詰の陸軍少將閣下の二男坊がゐる。學校は出たけれど、就職口が無いので遊んでゐる。この前ラガー君は、武君に會ふ毎に長太息して

「君んとこの親爺も頑固らしいが、僕の親爺も頑固だぜ。何んしろ氣味の悪いサーベルをぶら下げてゐるので、一歩違ふとすぐ軍人精神が出る。窮屈でやり切れないよ。」

「同情するね。」

「何もかも軍隊式だ。プラ〳〵遊んでゐると精神まで柔弱になるといふので、毎朝六時には必ず庭へ引張り出されて猿股一つで体操をやらされる。親爺が破鐘のやうな聲で號令をかけるんだぜ。馬鹿らしいつたらありやしない。時々は假病で胡麻化してやらうと思ふと親爺め、眼が高い。そんな時には室内体操とくる。蒲團の上に座らされて枕を振廻されるんだよ。其れから時によると珍問が發せられる。——敵が二人前面から攻擊して來る、同時に背面と側面から一人宛攻擊すると假定すると先づ其の何れから防ぐべきか——といふやうなのだ。軍人でないから其んな事は解りません、とでも言ふと

男子は身邊に常に七人の敵がゐると思へ、莫迦！と、やられる。」

「オヤ／＼」

「この親爺にして僕に經濟學をやらしてくれたのは妙だと其の事を質すと、軍人にしたらお前はわし程に偉くなれないと思つたからだ、親に勝らざる者は不肖のだ。で全然異つた方面の勉强をさした、有難く思へ——なンて變な事を言ふんだからね。」

「親爺不信任だナ。」

武君も親爺教育には頗る惱んでゐるので、ラガー君とは意氣投合だ。

武君の家の二階からは　稍々下手の方角に當つてさる舞踊研究所が見える。二十名餘りの研究生がゐて、時間中は四肢も露はな輕裝でバアにつかまつて脚を跳ねたり、蝦のやうに脊を曲げたりする。バラック建の長い練習場は眞正面だ。

ラガー君は、武君の家へ遊びに來る度に必ず少將閣下秘藏の双眼鏡を無斷で持參する。

二階の窓から研究所をのぞく爲めだ。

「どうも惡い趣味だね。」

最初は武君も少々氣がさすらしかつたが

「神秘境を探るのは愉快なもんだよ。不可知に興味を感じるのは人間本能だ。」

ラガー君の勝手な理窟につい〳〵釣込まれてのぞき出したものである。西鶴の「好色一代男」には女の入浴する所を望遠鏡で見る一節があるが、これ程の度を過ごした惡戯でも無い武君はいゝ氣になつて樂しんでゐると、頑久さん何時の間にか嗅ぎつけて

「呆れた奴だ。惡戯にも程がある。それでも學士か。」

「二口目には學士、學士と勿休なぶるんですね。學士が何んです。博士になつてすら見向きもされない時代ですよ。今頃學士ぐらゐを鼻にかけてゐると人に笑はれます。一体、大學なんて天下の能無しが集る所で——。」

「小理窟を言ひなさんな。其れなら其れでいゝが惡戯は止めるがいゝ。外聞が惡い。」

「ロシアの或地方へ行くと、女が素裸で水泳してゐるのを双眼鏡で見る男がたくさんゐるさうです。だから——。」

「お前はお前だ。くだらぬ眞似はしないがいゝ。それに嫁取り前だ。輕率な事は慎むがいゝ。」

元來、今度の嫁取り一件は本人の武君が全然問題にしてゐない。直接の原因としては、花嫁候補が氣に入らないにある見合ごころかとつくの昔に雨軒居士を出し抜いて、敏捷なもので直ぐに友人に賴んで先方を調べ上げ花嫁候補者の外出の機を狙ひ、早手廻しに一人で首實檢をやつてゐる。ラガーだつただけあつて、總べて驀進的に動作は疾風迅雷的である。頑久さんも雨軒居士も、こんな事は知らない。

「武君、結婚は本人の自由意志を尊重せねばならないから、

見合したら君の意見を遠慮なく述べてくれ給へ。ラグビーと同じに都合によればパスしてもいゝ。タックルはやらないからね。」

「はア。」

武君は何も言はない。其して乘馬をすつかり止めて時々帳簿を繰つて親爺さんの手傳ひをやり出した。だが、暇があるとチョイ〳〵雨軒居士の家へ遊びに行く。

「武君の家業勉勵は解つたよ。」

雨軒居士はニヤ〳〵笑ふ。妻君一向受取れず

「何んでございます？」

「テイ君が來るからだと睨んだ。若い者には油斷が出來ない敵本主義の家業勉勵だよ。本能寺の溝の深さが淺かつたかナ」

「まア！」

「親爺さんは武君の此頃の奇特な行爲に感心してゐるらしいが、親馬鹿チャンりンとはよく言つたものだ。だが、武君はあれで人物はいゝ方だから心配は無い。」

「貞子にしましても、割合しつかりしてゐるとは思つてゐますが、武さんは一寸スマートな人だし、其れに貞子は大變なラグビー狂でございますから——貞子が來るのがいけないのでございますよ。」

「さうかね。」

「さうかね、ぢやございません。そも〳〵貴郎がおよろしくありません。私貞子が參ります爲め隨分と迷惑いたします。」

「迷惑なのはテイ君だよ。來る毎に何んのかんのと言つてはお前の方が使つてるぢやないか。テイ君は其れでも厭やな顏一つせず、默つて手傳つてくれる。あれでは折角勉强に來ても何にもならぬ。少しはテイ君の立場も理解せねばいかん。」

「理解？何の理解でございませう。私、貞子の希望には最初から不賛成でございました。假りに作家として立つたと致しましても、其れで生活の獨立が出來るかどうか疑問ではございませんか。」

「現在のやうな社會狀態ではね。」

「外國は怎うか存じませんが、日本あたりでは特別な人を除いて女流作家は割合に不幸ぢやないのか知ら、と思ひます。分けて劇作など、男性作家ですら非常な努力と苦心とを要すると聞いて居りますのに、貞子などとても——。」

「さうテイ君を否定してかゝつてもいかん。」

「貴郎はすぐに貞子をお擁ひになりますが、不相應な希望なんか捨てゝ女は女らしう着物の一枚でも縫つた方がよろしうございます。」

「其れも悪くはないがね。」

雨軒居士は別に妻君に抗辯もせずいゝ加減にあしらつて相手にしない。張合が無いので妻君も默つて了ふが、貞子さんに對してはつけ〳〵と

「毎日〳〵よく机に向つて居られるわね。役にも立たない原稿ばかり書き潰して、其れ目鼻がつくの？」

貞子さんは、また始つたといふ顔して
「だつて、これがお仕事ですもの。」
「馬鹿らしわね。止めたらどう？」
「でも——。」
貞子さんはこれ以上決して口答へしない。何んなに妻君が言つても「お仕事だから」の一點張りで押通す。小石川の家では正夫君と母堂に事毎に叱られ通し、雨軒居士の家へ來れば妻君にガミ〳〵言はれる。唯一の味方の筈の雨軒居士にさへ、書上げたものゝ出來榮が悪いと叱り飛ばされる。
「駄目〳〵。こんなものを書いては——何時も言ふ通り戯曲作法の要件は、白を練りに練つて書くにある。冗長冗漫なのは大禁物だ。眼を通して理解する小説の白と違ふのはこの點だ。俳優がゐる、といふ事を常に忘れてはいけない。四百字詰の原稿紙一枚の白も、それを舞臺で俳優に饒舌らすと、かなりな白になる。いけない。これでは觀客が欠伸する。と、言つて餘りに簡單でもいけない。これではプロットの説明になつて了ふ。其れから登場人物の出入は、其處に必然性が無いやうなのはいけない。君のはどうも偶然性が多くて困る。こんなのは極めて幼稚な作法だ——。」
「あたくし、六ケ敷くつてとても思ふやうに出來ません。」
「出來なければ書くのを止め給へ！」
忽ち雷が落ちて來る。一度は、折角丹念に書上げた原稿を雨軒居士の蟲の居所が餘程悪かつたと見え
「こんなもの書いて怎うする！今日限り止めるがいゝ。」
と叱りつけ、貞子さんの眼前で其れをビリッと引裂いた事もある。悲しいやら口惜いやらで、忍び音に泣いてゐると
「泣く事は無い筈でせう。泣くだけ悲しいのだつたら、其んな望みは捨てるがいゝぢやありませんか。」
妻君は妻君でつんけん當り散らす。荆の道を行く貞子さんは正に血みどろである。（つゞく）

關東團 柳川を迎ふ

歡迎の言葉

川柳明治に復興し大正昭和に至りて益々隆盛ならんとす。時に關東の柳人諸氏關西訪問團を組織して近く關西の風物に接すると共に柳交愈々濃やかならん事を期せらるゝに到る。これ柳壇空前の快舉にして我等關西柳人たるもののひとしく欣慶措く能はざるところ、茲に京阪神各社は京阪神川柳團の名を以つて協力之を迎えんとするにあたり聊か蕪言をつらねて歡迎の言葉となす。

京阪神川柳團

光耀抄

葭乃選

大阪武子

片田舎を詫びて娘は茶を入れる
處女の手にもう花の種播かれて居
春なれや傘の雫の若柳

大阪機見女

飽食も朝寢も今日は安息日
カツの薄さが人情に似てさみし
春がすみビルは青春さぢこめて

撫順松代

引越した隣新婚らしい聲
四十にも近く灯の町忘れてず
父の皺はつきり見へる引伸し

神戸茂もよ

さらの子を出して半襟買ひませう
母親は村はづれまで泣きに來る
雛まつり去年と違ふ雛もあり

堺道子

ふいてもふいても曇る此の頃の鏡
此の願せめて羽交にしのばせて

大阪壽枝女

春雨の朝おちついて爪を切り
押賣の事情を聞いて買はされる
愛猫もこかく出勝の春となり
葉牡丹は五重の塔のやうに伸び

○葭乃

見渡せばバット級ばかり
鐘がひゞかぬ大都市の淋しさよ
エヤガール淒慘な日もあらばあれ
バスガール拍車を踏めば似合ふ君
改札を出るも先驅者たらむとす
サービス百パーセントマッチ減。減。

□ □

私達は光耀抄の海に沈んでゐるアコヤ貝です。只今の所はどなた様のお目にも止まらないでせうが、今に其二枚貝の中から優良な眞珠が現れます。私達はなるだけ多く作つてなるだけ多くを捨てませう。十句の中から一句の佳句が得られたら結構です。第一線に比べると光耀抄は非常に寛選です。一人で二句や三句投句される方の句は嚴選したくても出來ません。勢、多作家の句でページを埋めればなりませんので、折角の一句が他の凡作のために光らなくなつて終ひます。自から努めて作句氣分を養つて頂きたいのです。女流作家は常に紙と鉛筆を懷にして下さい。お臺所で立ち働いてゐる最中でも、子供達を叱つてゐる焦燥のたゞ中にも必ず一句が轉つてゐます。

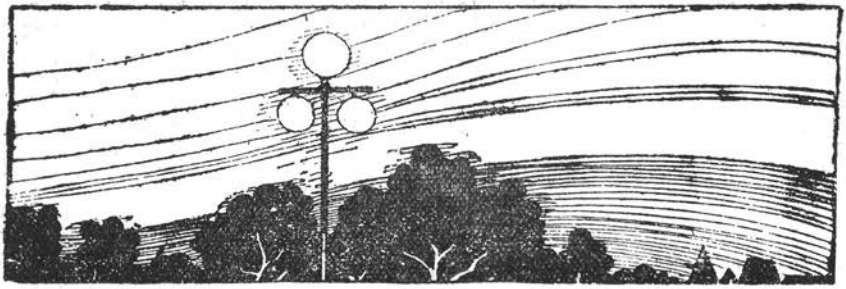
光耀抄の句はそれ〴〵生活の相違や、年齢の等差などがはつきりと出てゐます。

此句作態度はいつまでも續けて行きたいものです。唯、叙法の點についてもう少しお互に研究したいと思つてゐます。

嘗て、不路子さんといふ妙齢の作家がありましたが、八卷四號の光耀抄で、

年頃になればやつぱりもらひに來
云ひ分は有れどうるさしだまつてゐ

などの句を見てから、其後二三回號を追ふて新婚の甘い句で少々あてられてゐましたが、いつの程にか消えてなくなりました、どうか皆様スキートホームをお持ち遊ばしても消えて終はないやうにお願ひします。句作精進は墳墓へ迄といふ意氣込みでお續け下さい。



川柳 幽明無線電話（拾遺二）

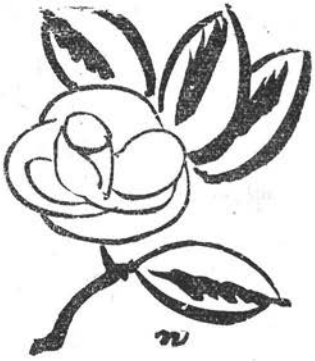
秋農屋

●綠亭九世川柳
○秋農屋

●今日、君を呼び出したのは、曩に君と十一世川柳と談話された中に、少し誤謬の點が有るからそれを訂正する爲です。○夫れは有難うございます、成る可く正確な事情を聽取したいので有るから、どうかお話をして下さい。●十一世は自身の事であるから、たゞ表面だけの事を語つてその裏面の事情には、少しも觸れなかつたのです。僕の死後に、昇旭が十世を繼承すべきで有つたのを、同人が固辭した故に、雪雁が社中より推薦されて、十世を繼承したと云ふのは、その表面であるが、その裏面に於ては、波瀾曲折が有つたのである。僕が晩年胃癌に罹つて、長く病床に臥し、日々に衰弱が加はり、餘命旦夕に迫つたと自覺した故、柳風社中の靜丸、九七四、昇の三氏を、病床に招いて後事を託した。○夫れは無論後繼者の事でしたらうね。●如何にもさうです僕の後繼者の撰擇には、疾く多大の注意を拂つたのであるが、我が當時の社中に於て、昇旭は學問の方は兎も角も、是迄斯界の爲に、尠からず盡力した功勞もあり、又彼れならば、十世を繼承せしむるに、他の人々も異議は無からう、と考察した故に、三氏を招致して、自分の死後には、昇旭を十世に推薦してくれと遺言したらば、三氏もこれを承諾してくれた故、僕は大いに安心して、冥土の旅途に上つたのである。其後、僕の遺言を、三氏より昇旭に傳へると、同人も元よりその心算であつたから、直にそれを受諾なし、頓て十世川柳立机狂句會を開く、準備に着手する

と突如として故障が起つた。○何人か昇旭の就任に、異議を唱へたものです歟。●イヤ夫れは異議で無く、實に意外なのである、君も知つて居られる如く、雪雁といふ人は、社中の古老ではあつたが、人望は少しも無かつた。然るに當時、深川の小名木川連を牛耳つてゐた、獨酌亭一盃といふ人があつて、此人と雲雁とは、狂句仲間といふ而已でなく、金錢問題に就いて、平素親密の交際をしてゐたが、僕の死後、雪雁は遽かに野心を起し、一盃を後援者と頼み、昇旭が十世繼承を、世間に發表せざる内に、同人を排除して、自分がその位置を奪はんとした。○雪雁には衆望が無く、一盃とても社中の有力者で無いのに、如何にして兩人の策謀が、遂に成就したのです歟。又、社中には多くの、昇旭の後援者も有つたであらうに、此等の人々が何故に對抗して、雪雁の非望を打破しなかつたのです歟。●昇旭には有力の後援者も有つて、僕の遺言を盾に把り、對抗したのではあるが、肝心の昇旭が、眞先に腰が碎けて、尻餅をついた爲に、後援者は手も足も出ず、反對派の爲すが儘に成つた次第です。○如何なる理由が有つて、さう成つたのですか。●夫れが裏面の事情で、重大な理由が有つた。雪雁の依頼を受諾して、其非望に加擔した一盃は、昇旭と同じく酒類販賣商であつて、手廣く營業をなし、自然、昇旭の店と取引してゐるうちに、昇旭は一盃に對して、多額の負債が出來た。一盃はそれを悪く利用し昇旭に對つて、今回、足下が坐るといふ十世の椅子を、俺の親友雪雁に讓與してくれ、萬一、此れを拒絶して、足下が強ひて十世を繼承する意志ならば、先づ俺に對する負債を、即坐に償還してくれ、サア二つの内何れを聽くか、と强硬の談判に及んだので、元來、人の善い昇旭は、相手の談判を拒絶し、强ひて十世を繼承する時は、多額の負債を還さねばならぬが、其頃營業が不振の爲に、金子の調達が出來ず、悲憤の涙に咽んで一盃の暴言に屈伏なし、十世の椅子を、雪雁に讓與した次第である。○さういふ裏面の事情は、餘り世間に知られて居ませんね。●斯る事は狂句社會の恥辱であるから、世間に知られない方が宜いのだ。夫れに就けても、僕の遺言が蹂躙されて、横路より飛出した雪雁が、十世を繼承したのは、實に遺憾千萬です○夫れは私もお察し申します。●前述のやうな事實が有つたので、後年、十世の收賄問題が起つた時、僕の遺言を聽取してくれた三氏が、率先して隱退の勸告をしたのである。其時は十世の後援者一盃も、擁護する口實も手段も無く、遂に昇旭を十一世に推薦する事となつたのです。○新しい事實を伺つて、有難うございました、此外にまだ何かお話か有りませんか。●前の話にも出たが、先年、淺草千束町より出火して、十世の居宅が類燒した時、宗家傳來の什物が、全部烏有に歸したと、世間に發表されたけれども、其中の四世の畫像を、羽前荒砥町の某氏が、現に秘藏して居る而已ならず、有名の錦木塚の色紙も、宇都宮市の某氏の許に、現在してゐると云ふ噂が有るのです。○夫れが事實であると、元祖の印章も、何處かに存在して居さうですね。●八世は困窮しても清貧に甘んじて居たが、十世は批議すべき非行を敢てした。○小人閑居して不善を爲すですね。●又そろ〳〵悪口が出さうであるから、此邊で通話を停めましやう。○加何に幽明無線電話でも、幽靈が屢々顯はれて口をきくのは、第三者の迷惑でしやうから、スイッチを停めます。

今回、他より新事實を聽取した故に、此稿を起草したるが、之れを以て擱筆する。



川柳塔

素・琴・山・綠・合議選

○　關本雅幽

働人(ド)冬の電車が廣すぎる
自からをいぢめつくして夜のウガイ
不甲斐なさは父だ叱つた子の寢顏
自惚れへ急はしう春の雲が來る
抽斗へ財布投げ込み淋しき夜
ハーモニカへ應へるものもなき朧
妻君が留守で布巾が目立つなり
むらさきの雲よ少女ら胸痛む

○　高橋かほる

二升で足るかとお客するつもり
食堂の見本へ大分腰を曲け
車屋も車も後ろを見せて晝
兵隊を送りにみんな目をこすり
春の雨宵寢してゐる戸をたゝき

○　岩崎柳路

道ぶらも銀ぶらも思ふホームシック
青柳の惜しいところで糸が切れ
公園へ來て巡禮はパンを喰ひ
猫の子を上げますウ井ンド閑な店
神詣り二度目の厄へ念を入れ

○　山本丹路

愛人はうれし去りゆく影ながら
春は虚僞ぞと髪を光らせ

◇　西村明珠

蜃氣樓俺の出世を妨げず
子の寢顏睦の長さはりたし
信用をさせて戻れば暗い部屋
芹摘みに出て母親が陽にやける
腹這ひを幸福らしく見つめられ
理想ではない角帶がよくしまり
激性を殺せば筆がおのののきぬ

◇　中野裸人

今日のぬくさへ子のある人のまだ笑ひ
アンパンをちぎつてたべてゐる見合ひ
儲からぬ欠伸號外讀んでゐる

人相が悪く飛田通りをまだ歩き
納家へ呼び入れて指輪の賣る話
二番目の息子の嫁を母はほめ
帶もせずモデルは煙草すうてゐる

◇　水谷　鮎美

御下賜品を謹拜す

一本の煙草に菊の御紋章
頰の温みに想ひつゞける
バットを吸ふてたゆまざる陽よ
冬の手にカムフラージなる赤インキ
赤兒にも感情があり泣いてゐる
肌白き人の哀れにそゝられて

◇　日野　華水

電燈にすかして見てる黑ビール
綿入れるねえさんかぶりの母若し
卒業の娘の足が肥りすぎ
あぢきなき世よ海苔がしなびてゐ
教へてる道湯歸りの女來る
なごやかな事郊外の新世帶

◇　西田　艸樂

思案する手には掬へぬ錦魚なる
後ろ向の返事眉に餘念なし
物思ひ小石を一つ拾ひ上げ
マダムの常識がとゞかぬ遊び場所
奥さんと呼んで温泉如才なし
迷惑をかけられ夫婦氣が揃ひ

◇　熊谷　紅

人絹の手柄で村の春祭
水虫がかゆし電車もバスも來ず
もう少し言へばよかつた程かりて
コップ酒今日働いた丈けを醉ひ
歌澤の名取り旦那は禿けてゐる

◇　中澤　濁水

食べさせて貰ふ氣もする齒の治療
自轉車の腰を泳がす坂になり
贈り物腑に落ちぬまゝ服を脫ぎ
糸屑を噛んで極つた縫ひ返し
デパートの日覆も春の氣をそゝり

◇　岩垣　奇可愛

退院近し

三歲の男子病に勝ちました

二南君結婚

これでもうごこを突かれるすきもなし
大聲で怒鳴つて見たい留守の晝
草花へ輪血してゐるお孃さん
機密費にしやうか交際費にしようか

◇　中見　光路

うらぶれた鉢に四五輪春が來た
欠伸の手ゆるんで寢ると氣を換へる

戀の線大きく引いて雀消え
俎板を減らす女こ生れ來し
何か持たねばならぬ洋裝　吉田水車

◇

二男二女さすが闘志もおころへし
赤い線引いて試驗期も近し
叱られしこゝは大阪堺筋　路耶師

◇

指し示す方向盤の止みてあり　喜多春秋

◇

錢湯で桶をこられる他國者
學歴があつて馬鹿々々しく思ひ
床屋だけ明るい田舍町の夜
道具市安い火鉢へ腕を組み　田中都之介

◇

黄昏れてたもこへ銀貨一つ投る
ダラ幹こ飢餓に盲從して居たり
お馬鹿さんネーこそろ〳〵罠を解く
OKの瞳が理智的に微笑むよ　松下小柳子

◇

一錢がほしさ枕を持つて來る
貸してやる智慧もなく懐手
公園へ泣きに來たこは誰が知ろ
桃割の後姿が引きずるよ　妹尾變人

◇

逢曳の見つけた遠い〳〵火事
眞直に伸びるつもりへ風の吹く　父來る（二句）

父上のよろこぶここは本願寺
父親に金の事だけ嘘をつき　福田鶴峯

◇

父と共に參宮して（三句）

溪一つ〳〵樹のたちかたをかへ
お詣りに母のゐませぬのが寂し
御神苑鶏しやはせに見ゆるなり　平井蒼太

◇

ありがたう蚯蚓煎じて飲みませう　新墓

土饅頭にそほぬれてゐる笠一つ

粒々集

松山　前田五健

油しむ椅子から決議案は成り
待合所行李の父の豆煙管
千圓の犬だこ書生綱を曳き
迷惑な戀だが其れも面白し
カナリヤの囀る緣で剃つてやり　〇〇聯隊出征（二句）

萬歳の堤を續く鐵兜
ふちだけの軍旗へ堵列肅こする

『寶の帖』漫興（三）

蛭子省二

蒼太さん——君の「石の中から」（三月號）をよむだ。ギプスの鎧は苦になることであらう。病に對する覺悟は、容易につかぬものだ。天が特別の習練を與えたものと、思ふより外はない。從妹に脊髓カリエス患者がゐた。今は人の妻となつて居る。患はちがつても闘病方法には色々ある、私は五尺の弱い躰を内省して、日々感謝して居る。——丁度喘息に特効ありと鳶の肉と黒燒を持つてきて呉れた友情に浸り、一片を炙つて食ふ。では此の漫興の（三）を、君に届けるため、一氣にペンを走らせよう。

女相撲の句に就てお尋ねを蒙つたが、隨分奇怪な、そしてエロ味のある興行が、古川柳家の興趣を案外刺戟しなかつたのは事實で私はたつた二句より記憶にない。——書留めた册子不明ゆゑ後日に讓る。ケイ後編中卷に支離にもあらて女の角力取が廿五點となつて居る。私が女角力を見たのは、名古屋大須觀音境内で、力持藝なども演じた。女角力の考證は略そう、三四年前「文藝春秋」にも書いた人があり、無聲氏の「見世物研究」に詳かで、それには御引用の流言記や俳諧時津風も載つてゐる筈だから、お讀になつた事と思ふ。兎も角茲には古川柳に詠まれたもののあるを明言するに止める。

（36）中々に聞き物雪の朝

連日雪であつたのが、今日はとけかけた。闇はいそがしきとよむ。武玉川五にも、「闇しい日は病人も跨がれる」とある。雪の夜は到つて靜寂なものだ、朝はどこかに、ざわ〳〵する感がありはせぬか。さわがしきと讀むでみたい氣にもなる。喧闇、熱闇、雜闇等にぎやか（擾）に相當の語でもある。「戸をあけてぢや〳〵〳〵と雪の朝」「ふんどしをしながらのぞく雪の朝」で、「雪の深さの知れる大聲」（ム五）であるから。

（37）鍋より重き菅笠の雪

其角の五元集冬には、「わが雪とおもへばかろし笠の上」とある。柳亭種彦の足薪翁記に

天の恩重くぞ着たる笠の雪
おもしろし重しとままよ雪の笠
編笠におもからぬ雪や櫻花

笠の雪はおもき事にいへり。尤もおもきは父母の恩、ためしのかぶとに具足、鎧袴、古布子、年貢俵…笠の雪

（38）天地せましとぬかす活僧

（39）元狗のやうに歩行禪僧

知己に臺北で阿耨多羅三藐三菩提寺を開いた臨濟宗の和尚があつた。性行に尋常でないところがあり、相思樹の下を疲れた天狗が歩いてくる趣があつた。和尚は洋傘をいつも携帶した。豊田軍務局長も天氣豫報におかまひ

なく、洋傘を持つて歩るくとか新聞で讀むだが、英國仕込み風ともいふ。禪宗坊主とは常々此の用意は當然な事なのだ。

(40) 鐵牛の德は江戸でも受取られ

鐵牛は黄蘗高僧道機の事、石見の産長崎崇福寺で隱元に學むだ。稻葉正則に厚遇せられ、春日局墓のある湯島の麟祥院に住し、古川柳に多く詠まれて居る。向島弘福寺を創め、木庵二世となつて瑞聖寺に入つた。下總椿湖の開拓を經營、二十餘年を費やして完成するなど、開墾事業に遺した奉仕も多い。元祿十三年七十七寂。

甲子夜話には、鐵牛の活機其他二三ヶ所に傳へられて居る。が卷十八には、「隱元禪師舶來して新に黄蘗の一派を開きしが、佛學よりは世事功者の漢にて一世の人を誑したりとなん、鐵牛も稻葉美濃守の歸依にて長興山と云る大寺を剏建す、これも同じ趣の由」などゝある。近代の默仙とか宗演なども實業家政治家の信者を集め、俗世間的手腕も卓絶してゐたようだ。禪も山から街へ出た。

(41) 馬方にまで三千風は知られ鳧

「空花に射る矢數や一念三千日」の大淀三千風は、一風イヤ三千風も變つた、性格の持主であつたとも察せられる。肉食をせず、妻を娶らず、處定めぬ一大旅行家であつて、日本の行脚、文集七卷は驚異に値ひするもの故に其作は机上吟でない、實踏上の實感だから、一般詩人の如く軌を一にしてゐない、解説をきかぬととりつきにくいものがある。西行に心醉し、和漢田鳥集を編み、鴫立庵の開祖となる。「何はなくとも鴫立澤の夕煙」馬方などに頭馴染があらうとは、三千風禮讃である

○うり喰やこのきさらぎのかちんの日

の句に就て、聽雨窓主人は「西行五百年忌の追福の句であるが、かちんの日といふのは恐らく、きさらぎのもちの日といふ事であらう隨分振つたものではないか」と言ふ。彼は東北地方に親みをもつてゐた。仙臺には十五年以上も住み、行脚文集の第一卷は陸奥でもある。

(42) 鐘撞て船頭起す金花山

仙臺卯辰方に位する海島、黄金産出すといふ大金寺がある、黄金神社がある。

○海鼠には過た名所の金花山(武十一)

煎海鼠は名物。

(43) 四ッほと眼のほしき象潟

古川柳に「出羽の海六十六の浮寢島」、六十六島を指したもの、八十八潟と共に絶景と賞せられたが、島海山の噴火のため田圃と變ず。

○鯛をころしに遣ふ象潟(眉七)

(44) 鮎買ふて草津の宿の力足

「鮒膾草津の宿は荒れにけり」(子規)草津追海道、中仙道、名護屋道」のシルベが建つてゐる。京へ近づいた旅人の足は力强さを覺えるであらう。琵琶湖の小鮎、あれは變種で美味とはいへぬと通が云ふ。大津では飴だきにして名物のレッテルが貼られる。

(45) 大津まで出向かつている京の山

此附近古川柳には姥ヶ餅と櫻木是齋が詠まる

姥が餅草津の宿は地にかなひ

餅までが名のひろくなる姥が見世

(46) 奥同者是齋が素湯を呑干て

(47) 雪隱借りて和中散買

元和の頃梅の木ありて、其木陰にて和中散を製し、旅人に賣ふ、本家をぜさいといふ。醫師半井卜養が女を娶て、和中散小兒藥の奇妙丸等の藥方を授り、永く此家に商ふ、參宮及び吾妻上下の旅客も足をとゞめさせて、藥を立て散湯を惠む。(東海道名所圖會)

(48) 鮒料る間に參る義仲寺

(49) 粟津が原で八日將軍

義仲寺に和田内とした銀包院宜により朝日將軍と名乘つた義仲も、粟津ヶ原に一敗して、深田に馬をのり入れあへなく最後を遂ぐ。「また稻妻の青い義仲寺」(ム十三)

(50) 名古屋の城に鰭の稻妻

通言總籬に「金の魚虎をにらんで、水道の水を産湯に浴て、御膝元に生れ出ては」とか廓數可佳妓にも、「お江戸の眞只中に水道の水を産湯となし、曳窓より金の鯱をみて長となりたる息子樣」などゝ、傳へられて居るがそこに藝術上の冒瀆がひそむ、江戸に金鯱のありしを知らぬ。

尾張名古屋は城でもつと唄はれる。大阪城の新天守閣は、今や燦然たる金の鯱を頂いて聳立つ。天下の偉觀は、何をシムボルする乎百號のゴールに入る「川柳雜誌」の使命的希望の光輝にも等しからう。(三月二日朝稿)

一路集（募集句）

妻

橋本緑雨選

妻の愚痴朝の電車で思ひ出し　利生
白粉も忘れたやうな世帶染み　鳳石
針を持つ妻へ時計の音ばかり　坊茄子
新妻の前に手かげんさもあらん　宙介
妻を叱れば末つ子は妻へつき　銀雪

妻の開腹手術

手術臺妻の視線の吾に向き　青兒
妻今日はゆうべの遲い譯をきゝ　吉絃堂
婦女界へ妻の投書をフト見つけ　菊路
人妻に或夜愚痴を聞かされる　おさむ
子が起きて妻の餘憤も消え失せぬ　晁史
子を一人生んでそろ〳〵世帶じみ　青天
人妻になつてお世辭もうまくなり　鴉天
從順な妻に夫はいとしきものならず　白花子
妻ほめて會社の書の和かさ　素月
病む妻へ心もとなく朝を出る　秀樹
妻ノロと云はれて家庭恙なし　憲坊
あかぎれも農民らしく俺の妻　天痴人
妻の顔果敢ない笑ひとはなりぬ　沒食子
人妻を手本にされて揉めて居る　薫
入婚に妻賢うて氣兼する　素風
あの人の出世は妻の力なり　一柳
子を生まぬ妻は淋しい動物園　橙舍
標札が妻になつてる詫住居　叶句坊
町角でヒョッコリ會つた妻の顔　青柳子
鏡臺のほこり四五日妻は病み　方眠
妻がまだ起きて居るのか火がともり　富美三
入髮をワイフ見せまいものにする　靈壺
いつの間か妻もすゝめる酒となり　英賀夫
腹へつて歸れば妻はミシン臺　勝二

續川柳家の戸籍調

▽　係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）きらひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（307）　久田狂水

（一）久田克位（二）狂水、波樂庵（三）福島縣石城郡草野村（四）同縣同郡磐崎村（五）明治廿一年四月一日（六）醫師（七）川柳雜誌新年號より。花道は相合傘の幅に出來（かほる）（八）銀座から出て武藏野の月が知れ（九）讀書、下手の横好圍碁將棋（一〇）有子供四人皆健（一一）嘘と阿諛（一二）不詳大正十年頃？（尤も柳風狂句は明治時代から）

（308）　岩垣奇可愛

（一）岩垣俊雄（二）奇可愛（三）德島縣（四）大阪市東淀川區天神橋筋七の十三（五）明治二十五年九月一日（六）藥劑師（七）俺に

鼻聲で妻が云ふのも面白し　四五磨
妻としての第一日の日も暮れる　無鬼
妻君に叱られるぜと叩かれる　春秋
吾まゝを言つて子のない妻のゐる　ともも坊
内職の妻へ子供は泣き止まず　えいを
千鳥足ふと先妻の兄に會ひ　蝸牛
あきらめて暮す妻とは成りにけり　沐天
眞直ぐに歸れば妻のかやく飯　錦石
たゞ歩くだけでうれしい妻をつれ　掉二
裾模様もう用のない妻となり　水車
サイレンへ妻心得へて立ち上り　岩石
妻持つてほしいと思ふ日もありて　機見女
良妻は不束でよし針仕事　紅
今更に妻の不徳をなじらざり　いわを
終日の疲れを妻へふと忘れ　耕朗
借金も慣れて世帶泌みた妻　柳人
こんな日もあつたつけ妻の寫眞　義郎
憂鬱を棄てぬに若き妻の顔　民郎
空想の妻幻になつて來る　あや美
銘仙をこんなに喜ぶ妻なるに　艸樂
エプロンは妻の財布のへれごころ　白柳子
又しても里の仕振りを妻喋り　鯉友
妻と言ふ名にしばられて老ける行く　靜太
計畫を無視した樣に妻が居る　裸人
口癖に妻はプルジョアめいて來る　慕秋
打ちとけた妻の姿もあごけなく　同

佳　作

子供だけ着せて喜ぶ女下駄　曲豆
月給へ妻の意見も笑はれず　鳳石
安心をしきつて妻のアッパッパ　吉紘堂
化粧する妻を下から呼びかける　一久
寛いだ浴衣に妻の燗もよし　しとし
默つてる妻へ氣兼な日が續き　史錄
目覺むれば忠實な妻がゐてくれた　與詩雄
春の灯に妻の存在忘れられ　千雨
新妻の意地はむつつと掃き始め　銀雨
人妻の魅惑に勝てぬ若さなり　利生

人

信仰が違ひ主張を枉げぬ妻　千雨
妻と子に爭鬪心をにぶらせる　啓秀
酒癖も知つて良妻賢母なり　えいを

地

湯上りの妻の匂ひに子の匂ひ　小柳子
友愛も忘れ女房になりすまし　虚白

天

子を負ふて日がな一日歩む妻　明珠

似よ俺に似るなと子を思ひ、路郎。甘たれた子の鼻聲に乘らじとす、山雨樓。齒車の如くがつきと腕を組み、町二(八)いつとはなしに出來た坊やの土ふまず。掛算の九九の樣には儲からず(九)子守(一〇)妻と長女十一才長男三才、一一酒とみゝず(一二)昭和五年暮から、投句を初めたのは六年一月

(309)　生田翠夢

(一)生田英三(二)翠夢(三)京都市下京區木屋町松原上ル(四)大阪市東區粉川町一六(五)明治三十三年九月十五日(六)齒科醫(七)行末はどうあらうとも火の如し、路郎。青空のいよ〳〵青し片思ひ、同。颱風よ人間がゐる虫がゐる、山雨樓。(八)罪であろうとなからうとまつしぐらふと秋を女の髪に感じたり。やるせなさ人間なんか消えちまへ(九)文學(大衆物等全部)自然科學(一〇)未婚(一一)プルム人。人間味のない人。常識のない人、ハチュ類、新派劇(一二)昭和四年九月、萬よし老より。

空想

空想のとかく兄とは折り合はず　耕朗
空想の頭かゝへて書く履歴　奇可愛
空想へいきなり炭のはぜる音　柳次
空想の兄妹に火鉢暖かし　機見女
空想の尻から冷へて來るベンチ　とも坊
空想へ只大空の限りなく　没食子

同想の句多し

空想に己が綽名を思ひ見し　同
空想が醒めた欠伸の素晴しさ　言絃堂
現實はよしや食客なればとて　同
春晝の陽に空想のある仔豚　勝二
空想へ歆傍耳梨香久霞み　同
空想へニンマリ笑ふ淋しさよ　一笑
空想を追ふうつとりとした睫毛　與詩雄
空想は滿洲へ向く金儲け　吐句坊
空想の足並かろく春を行く　正司
裏店へ空想だつた五十過ぎ　暢山
空想の鍋は盛んに煮へてゐる　柳仙
三等の隅に空想乘つてゐる　虹一
窓一つあり空想に更けるべく　晁史
空想のカケラ現實性があり　同
あゝ思ひかう思ひつゝ年を取り　明珠

岩本素人選

空想も責任のない顔でよし　同
空想は當つた金の費い途　水車
空想へフト行きつまる筋のあり　蒼梧樓
空想の一ト口呑んで箸を置き　裸人
卒業の空想親も抱き込まれ　虚白
十燭へ空想猶も續くなり　靜太
空想へロイド眼鏡の好く似合ひ　白峯
空想の向ふ霞の中にほけ　湖山
空想をラッシュアワーへ捨てにけり　柳人
裏成りの如く空想生きてゐる　義郎
空想をまとめて輕い煙草の輪　民郎
空想の指につめたき密柑なり　秀樹
空想を彼女へ語れば尚淋し　あや美
媒人口罪な空想抱かせる　艸樂
空想は死と言ふ文字へ行くも戀　白柳子
空想に慰さめられて冬の月　鯉友
空想がこんがらがつて眠をつむり　慕秋
空想は只ハイハイと返事だけ　正路
空想へ階下から飯を呼んでゐる　呑湖
空想家彼れが通つた足の跡　青柳子
空想へあまりに我家みすぼらし　方眠
生れ更つて來いと友達只笑ふ　愁人

(一)越中義雄(二)今雨(三)石川縣金澤市小立野一本松卅二(四)同じ(五)明治四十一年七月一日(六)北國新聞社文撰工(七)ガラ空きの電車有難がつて乘り(紋太)朝の市トマトの色が眼を奪ひ(久流美)工場課電氣で上る水を呑み(水府)(八)住みなれた土地で死にたい母の慾(九)浪花節、映畫、朝寢、スポーツ、その外大抵のものは好き(一〇)なし(一一)政治、食物では野菜類、人間では諂ひ者(一二)昭和二年頃

(311)　金井有爲郎

(一)金井明夫(トシヲと訓む)(二)有爲郎時として井蛙(三)長野縣中野町(四)同前(五)明治四十四年五月三日(六)半穩信用組合勤務(七)おもしろい顔に生れた父なし子(勝二)—農夫—案山子燒き燒き絶望的な冬の空(町二)(八)北風の中を女工等まるく行く。貧しさがみんな働く子に育て今日の自信句も明日のそれでなくなる事を悲しむ。(九)將棋ぐらいのもの(一〇)共になし(一一)讀み惡い達筆文(一二)昭和五年三月

空想へ時計ぼんやり聞へて來　掉二
空想を枕時計に嘲けられ鐘生
若者の空想惱みばかりなり幽光
空想の寢ころべは限りなく伸び蝸牛
死は悲しなご空想のうたふなり錦石
空想へ西陽は遠く落ちかゝり沐天
空想へ美人の顏が亂れ飛ぶ一久
千年も死にたくはない金があり利生
漂流の助けられたは女護の島同
空想の無意識に吹く膝の灰龍王
空想が眞二つにされたベッドかすま
現實のバンに空想消へてゐる耕民
恐しい空想ハッと廻りを見銀雪
空想に更けり朝寢の床にゐる一正
金持ちになる空想のウゴメク大阪青兒
薔薇色の空想を秘め二十才史錄
空想へ火鉢だん〳〵冷へて來る菊路
青春の日記飾つたまでのこと光外
彼の女の瞳よ何思うてる曲豆
金の要るとこで空想膝を立て四五磨
空想は一ト口吸つたまゝで絶ち同
空想がルッボの中ににへかへり武子
灰皿へ空想と言ふ愚をさとり鬼笑太
空想に疑問がわいた面白さ同
頰杖をつき空想の面白しおさむ
空想へ乘換券が見當らず同
空想の八年間を無駄にする玄坊
空想へ誰か來るらし親父らし慈雨來
空想にふとほゝゑむであた見る湧三
空想も食ふ事ばかり恢復期橙舍
空想だよと貯めた男は笑ふなり青天
空想を夢みて妻や子を忘れ一柳
空想の見る煙突に煙の無し三碧
空想の夫に妻のさからわず灯羊子
空想にふと思ふなり借りたこと幸村
空想の別莊圖面引いて見る薫
空想の醒めてごつそり腹かへり富士雄
空想を破り椿の花が落ち鴉天
空想へブラジルの野は暮れかゝり瑞穗
空想の捨場に株を買つて見る白花子
空想の人一倍のニヒリスト同
みだらなる唇へ空想の消へ坊茄子
空想に耽り電車を乘りすごし旬兒
空想も日記帳には書いてあり愛草
劍を執る空想今は踝を振り世都象
空想だなごと先輩取り合はず　しこし
彼と會ふ明日が騷いで寢付かれず素風
空想へ煙草の煙を輪に吹かしいわを

西之町 MEMO

綠雨

▼大阪日日新聞の「日日柳壇」が復活（廠生路郎選）いたしました奮つて投句されたことを切望致します。▼篠川支部では創立五周年川柳大會を五月八日開催されることになつてゐます。詳細は次號で發表いたします。盛大ならん事を祈ります。▼松江支部では支部の會報としてみゝずくの第一輯を出されました。▲楊井二南君が三月六日目出度華燭を擧げられました。（紀南白濱溫泉から只今ホネムーンの佳境にあります、噂に勝る白濱の美景、濱崎古稚溫泉の春を心ゆくまで樂しんでゐます」と云ふ便りを寄せて編輯局の人々をうらやましがらせて左の句を寄せられました「旅の朝妻の若さにうながされ」▲本誌の百號紀念の編輯費中社友某氏から金貳拾圓の御寄附がありました御厚意を深謝いたします。▲福田山雨樓君は三月六日父の還歷祝に鄉里岡山へ歸着され。左の句を寄せられました。「ちゝもはゝも六十一の鑑になり」▲鶴峰君は二月廿三日伊勢參宮をされました。▲熊谷紅君は濱名湖から左の句を寄せられました。潮鳴へ沖から戻る船つゞき」▲茨木縣奈緒美君は病を押して永らく釜ヶ池支部幹事として御盡力下されてゐましたが

バリカンを聞いて空想續けられ　素月
空想ゝ不安に暮れた八合目　龍一
空想ゝ意氣地も捨てゝサラリマン　憲坊
空想の膝に毛糸の無心なる　葉光
空想の自己清算へ腹がへり　靈壺
青雲は及ばず養子になつた俺　辰之助
空想ははなかし飯が吹いてゐる　英賀夫
空想が小さくなつて世帶じみ　富美三
空想ゝ知らず惚れたを悔ひたゝ　柳民
空想に輝く瞳引く眉毛　水人
空想の破れ小石に蹴つまづき　胡蝶
病み臥せば空想暗らくなるばか　邦哉
空想に非ず砂金も出る話　紅
空想は兎も角妻の小商ひ　同
空想の行く手ランプに突當り　岩石
空想へ近づく找に怖くゐる　鳳石
空　想　の　中　に　童心蘇り　八歩
空想の鼻へ現實ゆるぎなし　千雨
空想の淋しく爪をむしりつゝ　比呂詩
獨り者何かにたゝ〳〵笑つてる　曉鳴子
すばらしい宵空想の下駄輕し　たし路
空想の咽が渦いて午前二時　笛秀
空想は二つ彼氏ゝ彼女ゐる　南京豆
空想のいつゝは知らず曲り角　水玉
空想の煙草の灰が落ちかゝり　天柳
獨酌の酒空想へ冷切つて　啓秀

（軸）

極樂は住みよい所か佛達　素人

▼句會出席回數表　（山雨樓調）

昭和六年中本社句會へ六回以上出席された方を調べて見ました。一回でも、出席された方を全部調べて見ますとその顏振れは二六六名でした。

三回	路郎	〃	水車	八回	みつる
〃	綠雨	〃	白柳子	七回	町二
〃	かほる	〃	九回	山雨樓	〃
〃	夢裡	〃	新水	〃	變人
二回	愚陀	〃	里十九	〃	公二
〃	鶴峯	〃	沐天	〃	葉平
〃	いわを	〃	三碧	〃	柳甫
一〇回	琴人	〃	柳次	〃	久郎
〃	艸樂	〃	明暗子	〃	山茶花
〃	夕鐘	〃	おさむ	〃	あやみ

七回吉一
六回亂耽
鮎美
青踏
竹水
哲郎
さだを
愛緒
素月
機見女

▼句會點取表　（山雨樓調）

昭和六年中本社句會で拔けた句數二十句以上の方を調べて見ました。但し雜誌に掲載された句のみに付て調査、天地人もみんな一點として計算。

四七	白柳子	四三	鮎美	二八	水車	二三	愚陀
四三	かほる	四四	夕鐘	二六	亂耽	二三	豆秋
四一	山雨樓	三三	山茶花	二七	獨月	二三	雅幽
三八	柳甫	三三	路郎	二七	青踏	二二	南
三三	柳次	三二	公二	二六	鶴峯	二二	夢魚
三二	沐天	三〇	いわを	二二	夢裡	二一	里十九
三二	さだを	三一	艸樂	二二	葉平	二〇	變人
三四	琴人	二九	裸人	二五	明暗子	二〇	おさむ
三四	新水	二九	三碧	二四	奇可愛	以上35名	

新誌友

（七年三月十五日まで）

「川柳雜誌」半年分壹圓八十錢以上佛込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します何卒此際新讀者を御勸誘下されゝ横、御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい（綠雨）

瀧口壽惡兒（外二名）柳秀三郎、福住信吉（阿部閑生）越智紅一（荒井英賀夫）太田光坊（北山梧郎）森口一風（岩崎柳路）今本宇兵茂（日野華水）青山三平（關本雅幽）山崎邦雄、田中瑞穗、河村舊水、河野夜王、江戸みつる、富士野鞍、名越ゝ然、梶浦正武、三井伊之吉、眞田眞典、桝岡兵四郎、原田光男、林翠仙、横山勝二、（本社事務所）括孤内は紹介者

病に耐へられず龜井愚寵君と交替されましたが一日も早く全快の程を祈ります。▲池田雪峰君は家事の合で二月限りで社友を辭されました。▼岡崎桂枝、永井秋月の兩君は家事の都合で社友を辭されることになりました。一日も早く復活を望みます。▼三月八日夜京阪神川柳團事務所に於て第三回關東川柳家觀迎相談會を開かれました。本社から松盛琴人君が出席いたしました。▼私は二月十五日伊勢參宮、三日七日大阪府河内野上村の地辷りの見學に行きました。▲本號の編輯は路郎先生、琴人・町二、丹路、山雨樓、鶴峰の諸君と私とで致しました。當日河盛純子竹内機見女の兩孃が御手傳ひ下さいました。

句評公開

岩本素人

この小文は熱心な或る苦い作家から頼まれた句評の返事でありまして、公開すべきものではありませんが、初心の方々の參考にもならばと思ひ非禮を顧みず公表するのでありまして、柳道の爲作者の御寛容を得たい次第であります、

君迄が戀をしてゐることは知らず

自分の意中の人を、その同じ人を、親友である君も慕つてゐるのであつたか。少しも心付かなかつた。友人同士で一つの戀を爭ふことは……三角關係の惱みを唄つたものであります。君迄が」で友人に語つてゐる樣ですが、「知らず」と下に置いたところは「獨白」の樣にも見へます。どちらにも取れますが、後者即ち獨白の体を採つたものでありませう。

此の句の缺點は、三角關係に由る　悶々の感情が極めて稀薄であるところにある樣です。此原因はあまりに事もなく手輕に言つてのけた點にもありますが、下の知らずの置き方にある樣です。そして一氣に讀下して何だか舌に戀るものがあります。これもやはり知らずが突拍子なためであります。前書は此位にして進んで具体的な研究に掛りませう。

君までが戀してることは知らなんだ
君までが戀してたことは知らなんだ

どうも面白くありません。會話の片れ端の樣で締りがない。で次は君を彼れに入れ替へて、

彼れまでが戀仇ことは知らなんだ
いけない、知らなんだがいけない。

彼れまでが戀仇ことは思はざり
思はざりも變だ。

彼れまでが戀仇ことは知らざりき
少しまになつたが戀仇はよくない。

知らざりき彼れも戀せる女ことは
知らざりき彼れの戀せる女ことは

原句では自分の戀人を君も戀してゐる。だがこんな風に替へると、彼れの戀してゐる女を自分も戀してゐる。になつて意味は同じでも主客地を替へた形になつたが、句としては大分見直

して來た。女を入れたので三角關係が明瞭に出て來た。知らざりきを上五に持つて來たので感情的になつた。

それから彼れもだと自分も彼も又は自分も彼れも他の男もと言ふ風に原句の君迄ものまでを尊重した譯だが彼のとなると彼と自分とのみで他に競爭者が居ないから三角關係がはつきりする。そしてもであると女が女給か何かで商賣人の樣にも聞へる「知らざりきなどゝ文章語を使ふと堅苦しくて川柳らしくない」と言ふ風に考へるのはよくない。茲では知らざりきで戀の眞剣味が出ると思ふ。又煩悶の感じもある。それでは、

知らなんだ彼れも馴染んだ女とは
知らなんだ君も慕つた彼女とは

前者は女があばずれて聞へ、後者では調子が輕い。主人公が少しも悶へてゐない。

「知らざりき」の句にしてもまだ〳〵推敲の餘地がある。

思はざり君も撰びし彼女とは
友情も重し此戀棄てられず

同じ事をどんな風にでも種々表し方はあるものです。充分推敲して自分の感情に最も適した表現法を採るべきであります。

ハンチング郊外へ出てよく寫り

寫りは映りと書くのが正しいのです。何んでもない事の樣ですがこんな時は字引を引いて正しい文字を用ゐる事を習慣づけてください。不慥な場合は假名を使ふ方がよろしい。

さて此句は明らかな春の郊外の感じがよく出てゐます。中折れなんぞよりハンチングの方がのんびりした郊外の風景に應はしいと言ふ意味でハンチングの色合までが想像されます。

郊外へ出てハンチングよく映り

郊外へを上五へ持つてきてはどうですか。

よく映りも何かもつと適切な他の言葉と更へて見たらどうかと思ひます。よく映りはちと幼稚な樣です。

九時を打つ音おだやかな日曜日

佳句であります。氣ののんびりした情景がよく描かれてあります。おだやかは極めて適切であります。殊に穏かとせず假名を使はれた點は賛成です。句によつて漢字にするか假名にするかは輕々に定められません。意味には變りはなくとも感じの上に大變な相違があります。此句は好い意味での適例であります

獨身をあざける樣ないゝ日和

着想平凡です。類想の多い句です。「樣な」は出來るだけ使ひたくありません。この爲に句がふやけます。絶對に用ゐてはならぬと言ふ譯はありませんが餘程考へて使はないと句に緩みが來ます。こんな場合でも「樣な」と遠慮せず「嘲けるいゝ日和」と斷定的に言つてしまつた方が好い樣です。

芽生へてる春に人生觀があり

少しく難解の句であります。人生觀の内容の何であるかの暗示に缺けてゐます。人生觀は春ばかりではなく夏は夏、秋は秋

の人生觀がある譯です。芽生へてる春を季節の春ではなく人生の春動期を唄つたものとしても、この句から中芯點を見出すに苦しみます。「人生觀があり」と放り出してしまつたのでは作者の感情も出てゐなければ主張も不慥であります。作者たるあなたには

失戀の惱みがぢくり〳〵する

と言ふ句がありますから斯う言つた情熱を唄はれたのかも知れませんが「芽生へ」の句丈からでは何ものをも受取る事が出來ません。要するに意餘つて言葉の足りない形であります。もとより川柳は短い詩ですから暗示が必要でありまして何もかも文字の上へ表す事は出來ず、またその表はさないところが川柳として面白いのであります。皆言つてしまつたのでは散文的で一種の說明に終るし象徵的に唄へば摑み處のない漠然とした句になります。そこをお互が苦勞もし研究もしなければならないのであります。進めば進む程川柳のむつかしさをしみ〴〵と感じさゝれます。そこにこそ川柳の有難味があるのです。

古句を御覽になるのも良い事であります。先輩の句を數多く味讀する事は更に必要な事であります。それ等から表現手法を學ぶのであります。

獨自の境地を開いて行かうと言ふあなたの努力には常に敬服してゐます。只今の態度を變へない樣に精進なさいます事を希望いたします。旨言多謝

昭和七、三、一一

關東川柳團 歡迎句會

日時 四月三日午後一時

會場 南區中寺町 芳雲寺（谷町九丁目下車西ノ辻北へ二丁）

挨拶 麻生路郎 岸本水府

挨拶 村田周魚氏

講演 阪井久良岐氏

兼題 雜沓（各題二句づゝ）

川上三太郎氏選　訛　椙元　紋太選

酒　前田雀郎氏選　橋　藤本福造選

海苦　西島○丸氏選　馴染　木村小太郎選

會費 三十錢

歡迎晩餐會

同日午後六時より（九時散會）

南區清水町「北むら」にて

會費 一圓

▼關東川柳團の御一行は三日午前七時十八分大阪驛着ですから、精々御多數の御出迎を願ひます。

京阪神川柳團

來賓諸氏御芳名……一若、芳浪、碧水、茶六、杜若、花川洞、義博、太郎丸、○丸、夢一佛、愚佛、空壺、文英、盈光、榮二、三太郎、山門、玉兎朗、金一郎、迷亭、しげを周魚、雀郎、比呂志、桃太郎、千壽郎、占魚、久良岐（以上東京）珍竹林、柳葉女（靜岡）瀧の人、懷窓、五萬石、天邪鬼（橫濱）柳兒（長野）の諸氏

（神戸支部二月例會）　<寫眞說明>　向つて前列右より珠明・南耕・幸村・人琴・かほる

笑鬼・夫一・水華・風竹・月觀・居卜・美鮎・仙昇・秋豆・雲詳・堂繁（列二）木古・南・二九十里

太・人草・伽藍洞・九葉・方眠・主稅・喜多八・木竹・坊茄子

各地柳壇

本社三月例會

於ちとせ倶樂部

三月五日

本社三月例會は、新裝なりし「ちとせ倶樂部」に於て開催せられた。同倶樂部は此種の會場としては最も理想的にして內部の裝飾設備萬端整頓し我社句會係りの苦心の程も知られ來會者より非常な歡迎を受けた。

當夜は大阪帝大教授醫學博士長崎柳秀氏の講演に對する翹望と例によつて句會プリントの有益なる收獲が期待されて新會場は忽ち滿員の盛況を呈した。

席定まりて兼題席題は次々と帖り出され作句精進は刻々と進展し、各々自信の句の成る頃出句は締切られた。此時長崎博士と市議萬よし氏は急霰の如き拍手を浴びて演壇に現はれた。萬よし氏が氏獨特のユーモア味を以て長崎博士を紹介して降壇すれば、博士はおもむろに口を開き、博士自身の川柳入門頭初より說き起して「川柳は如何にすれば其堂奧に達し得らるゝか」といふ要旨を有名なる古人の實蹟に籍りて、滔々數千言、氏の熱情はほとばしりて、源心和尙の修業時の有樣を述ぶるあたりに至りては聲涙共に下るの熱誠さを以て語られ爲めに滿堂肅然と襟を正さしめ談いよ〳〵佳境に入り聽者に異常の感激を與へたのは流石に蘊蓄深き學者の名講演であり、偉大なる人格者である事を頷かしめ白熱的賞讃裡に其講演が閉ぢられ、それより披講に移り終始一貫緊張裡に三月例會の幕を閉ぢた。

出席者名簿

柳秀、綠雨、萬よし、ひろし、琴人、山雨樓、かほる、鮎美、杏三、里十九、素人、豆秋、華水、鵜峯、丹路、鵜足、夢裡、水車、晩春、黑ン眸、方眠、鳴玉、古木、夜玉、句骨、きよし、緩勾配、竹風、麥魚、八步、勝二、茂草、機見女、慈雨來、楳太郎、おさむ、棹々、夕鐘、裸人、蠻人、岩期、紫風、光外白柳子、四五磨、千雨、草風、洋々、秀樹、えいか、艸樂、柳仙、鵜郎、光坊一笑、一眞、さだを、翠峯、みつる、あや美、鐘生、孤舟、沐天、瓢水、青蹐

兼題　臍　　ひろし選

臍のあたり父の度胸のうかゞはれ　奇可愛
無抵抗臍は空しく生きるのみ　方眠
脂肪過多臍忍従の姿なり　洋々
つくねんと居る兒の臍に湯が溜り　きよし
物言はぬ臍にも不平ありはあり　さだを
横綱のお臍ぼつてり奥で見え　紫風
忘れてたものゝ如くに臍を見る　萬よし
病上り臍に力を入れて立ち　八歩
自己清算に臍あはてたり　山雨樓
春風に牧場の牛へ臍を見せ　鮎美
千圓の重味を臍に感じて來　孤舟
臍垢を溜めて男の兒は達者　秀樹
臍へ土つけて子供の無事な顔　豆秋
貧角力土俵の砂が臍へつき　一貞
晩酌の臍へ泌み込む嬉しい日　千兩
臍から臍へ連綿として續き　素月
臍ぢつと世の不景氣を眺めてゐ　鵜足
洋服を脱げばお臍の無事に居る　華水
我慢もう出來ぬ怒りも臍も知る　八歩
空腹の臍から力抜けてゆく　媛勾配
子供等の臍に魂うばはれて　觀月
重い荷へ臍から波が打つてくる　夕鐘
臍へ手を當てゝ寝ますといゝ養子　鳴玉
臍の緒にすまぬ不純の俺となり　琴人
悪人の臍の緒罪もなくしなび　同
(人)あつすぎる臍のあたりのいろばひ　青踏
(地)石切さん臍のあたりへ息をかけ　かほる
(天)どこにゐることか臍の緒書き出る　麥魚

席題　店番　　萬よし選

店番へ思ひ出せない人が過ぎ　鶴耶
宵の雨店番厚い本を出し　孤舟
峠茶屋聾の店番よく喋り　華水
すき焼の匂ひ店番うけたまはり　勝二
店番は店の明さに氣が疲れ　秀樹
店番の坐つておれぬ空模様　八歩
店番に相手がほしい男の子　柳仙
店番は客のとぎれへ時計を見　一笑
店番の一人旦那の趣味を持ち　黒ン眸
店番はスカイサインへあきて來る　一貞
店番が亭主と變る宵の口　翠蜂
店番の話食氣に落ちて行き　えいを
店番へ外は五月の人通り　青踏
店番は晝寝へ値段聞きに來る　鶴耶
店番にもうなれて居る手ですゝめ　句骨
店番をすれば養子と見えぬなり　鳴玉
店番にそろ〳〵近所戸が閉り　麥魚
店番で一生いまいぞ資本論　洋々
店番へ委せておけぬ苦勞性　水車
店番に號外ばかり來る日なり　夜王
店番の旦那を舞子見て戻り　夕鐘
歯をほじり乍ら店番負けぬなり　緩勾配
店番の夢は本壘打を飛ばし　晩春
店番の娘いつものプロフィル　鐘生
店番へシンカラカンと更けてゆき　鵜足
店番へ皆スピードの一文字　山雨樓
遊びたい店番寒く言ひつかり　琴人
店番はキートンの顔してる也　鮎美
店番を旦那に頼む糠袋　柳秀

店番に漸く馴れた口をきゝ　夢裡
(人)店番のどこで聞いたか勞働歌　孤舟
(地)陳列の位置を店番變へてみる　麥魚
(天)ゑ譯けをして店番を叱りつけ　白柳子
(軸)店番へ赤字赤字の日が續き　萬よし

席題　ピストル　　素人選

ピストルの出所になつて手古づらせ　棹々
ピストルと別に兇器があつてゐ　みつ坊
握つてるピストルにいか汗ばんで　柳仙
ピストルの土産近所の子が集り　きよし
通り魔のやうにピストル響いて來　青踏
ピストルへうてるものならうつてみよ　方眠
逃げて行くピストルに續けさまに撃ち　八歩
ピストルを玩具にマダム一つ持ち　勝二
あの時は玩具のピストルとは知らず　鶴耶
ピストルの先は急所をそれてゐる　麥魚
ピストルを買つてから一層怖くなり　艸樂
高飛はなまじピストル邪魔になり　楳太郎
ピストルへ女案外度胸あり　孤舟
責任のピストルなどにたじろげず　變人
ピストルの掃除を親に見つけられ　裸人
ピストルがたじろぐ程の妖艶さ　黒ン眸
ピストルへ手を上げてゐる若い母　一笑
ピストルへ同志の顔は殺氣立ち　古木
ピストルを女が持てば物凄し　おさむ
ピストルは女賊の肌のぬくさ知る　山雨樓
ピストルをあづかる女惚れてゐる　かはる
短銃を片手に駒子見榮を切り　琴人
ピストルの暗殺あつけなく倒れ　同
ピストルの音は舞臺の裏でさせ　水車

ピストルへ護衛三段間に合はず　同
取り直す氣持ピストル重ふ持ち　白柳子
その頃の話ピストル出してみせ　同

席題　工　面　杏　三選

まがりなりに工面がついて風呂に　素人
工面しに行くを嫂見のがさず　青踏
工面したことをこまゝ〳〵書いてくれ　夕鐘
友の言ふとうりに工面して戻り　鮎美
工面して來た女房の小聲なり　草風
工面たゞお願ひします賴みます　方眠
工面した物が倉庫に積まれてゐ　鶴峯
工面した金と娘も知つて嫁き　慈雨來
借りて戻て晩酌の追加　勝二
工面した金へあつけない笑顔　萬よし
度胸とは工面のつきた形なり　掉々
あてもなく工面煙草は灰になり　麥魚
工面する話子供も聞いてゐる　柳秀
その戻り工面の金で少し醉ひ　夜王
工面まだつかず豆炭消へかゝり　光外
どこでどう工面をしたか安來節　黑ン眸
工面もうその陽氣さに云ひそびれ　鳴玉
工面して戻れど炬燵冷えてゐる　夕鐘
工面に來れば奥の間で高笑ひ　翠峯
割前へ工面の金が並べられ　みつる
工面した金とは女信じてず　豆秋
工面してやると親友笑つてゐ　孤舟
女房の工面と知らず醉うて寢る　鶴耶
應接へ通し工面が出來ません　華水
工面する顔へ白粉濃くぬり　機見女
(佳)工面しにゆけば先客巾をとり　艸樂
(同)女房をはら〳〵さして行く工面　竹風
(同)呼鈴を押す手に工面信じてゐ　さだを
(同)怨む氣になれず工面の戻つて來　おさむ
(同)工面してからの世界が面白し　裸人
(同)一番汽車で金の工面に親が來る　夢裡
(同)晦日の工面夜となり夢となり　鮎美
(人)羞かしく話上手に工面する　おさむ
(地)工面して工面を一月はたち　萬よし
(天)吸殼の數で工面も賴まれる　杏三
(軸)工面して今日春陽のうらゝかさ　選

席題　信　仰　互

信仰へお前は慾をすてゝ來い　方眠
信仰をするのに時期を言ふ若さ　古木
信心へついぞんざいな聽診器　慈雨來
信仰へもう寄附のこと云ふて來る　鶴峯
信仰は今日ある事を敎へたり　茂草
ケーブルを無視し信仰登つて來　秀樹
信仰へまだ石段の高いこと　華水
信仰の有る顏には見へぬなり　あや美
信仰はあしたへ死んだやうに寢る　勝二
信仰は下駄を破らして戻つて來　夜王
信仰へフト貧苦も感じたり　紫風
お百度の足に冷たい霜柱　えいを
(暗合)信仰の瀧に打たれて風を引き　翠峯
(暗合)信仰の瀧にうたれて風邪を引ひ　豆秋
信仰の話へ機嫌ちと直り　鐘生
信仰のあとは芹など摘んで去に　鮎美
食ふことに缺かず信仰つゞくなり　麥魚
信仰の女浮世の眉でゐる　一貞
霜踏んで朝の社の鳩の群れ　白柳子
信仰に活きて不具を活きのびる　變人
つまぐる珠數に冬の風衝く　さだを
信心をして商賣も上手なり　水車
信仰と別に嫉妬をしてるなり　孤舟
信仰も忘れた樣にもうけてゐ　八歩
信仰は離れの母にまかせとき　同
信仰へ息子のやせが見え過る　四五磨
信仰へ嫁が可愛ゆく見へるなり　同
信仰をすませビールを飲んでゐる　鳴玉
信仰へコツポリの音下駄の音　同
信じてる力枯木の如き生き　琴人
信じきる千人針の妻若し　同

川柳雜誌社
神戸支部

二月句會（神戸）

二月十二日　於八宮神社　西村明珠報

兼題　村　琴人選

村芝居女になつてひげをそり　泰典
隣村の娘と知つた秋祭　主稅
村の灯へもうつく頃と疲れて居　鬼笑太
亡き母の村で中學まで育ち　南耕
村境今日も眞赤に夕暮れる　竹風
村はづれ草花のある娘の手　華水
上等兵になつて戻つた村の秋　觀月
歸省して村の鎭守の秋を踏み　一夫
村を去る夜の星屑が瞳にのこり　伽藍洞
村にゐて慾な話に手を出さず　二南
幻滅を笑つて村の花ざかり　草人
笛一とすじに暮るゝ寒村　水車
地味なのと着變へて村の驛へ下り　かほる
嫁入の荷がまがり行く村はづれ　古木
我が村の誇となつて遺骨着き　喜多八
大臣の出た村に居て米を搗き　春秋
(佳)さて村へ歸へれば村の心もち　里十九

(佳)表彰へ村長も來て雪になり　九葉
(佳)酒さかなありの障子もなつかし　南耕
(佳)同性が多く五位鷺おりる村　鮎美
(人)村長を心配させるバーが出來　伽藍洞
(地)遺骨又悲しい村へ迎へられ　昇仙
(天)芋の嵶が來て思ひ出す俺が村　水車
(軸)村一番の娘へ椿赤く咲き　琴人

席題　旦　那　二

旦那はんに町は墨繪のやうに更け　南選
貧民に寄附して旦那ふけてゆき　竹木
氣が折れて旦那兩人を呼びにやり　泰典
油虫旦那の煙管から逃れ　主税
大旦那朝の火鉢へよくつとめ　鮎美
三越へ旦那に添ふてはいるなり　琴人
(人)旦那の碁あなどりがたくなりにけり　かほる
(地)風邪氣味の旦那に軸を見せられる　春秋
(天)損をした話旦那はおかしがり　九葉
(軸)嬉しさを云へば旦那は年を聞き　古木

席題　年　頃　かほる　二南選

年頃を集め校長寄附のこと　泰典
年頃へキネマキッスがありすぎる　伽藍洞
年頃になれば近所が世話を燒き　南耕
年頃へ父は小言を一寸言ひ　坊茄子
母親と別に年頃行きたがり　主税
靜かなる晝へ年頃縫ひ續け　華水
年頃へバットの剩錢が未だ足らず　二南
年頃はいやらしい事ばかりにし　鬼笑太
年頃の娘があつて母ひとり　ト居
朗らかに笑ふ娘の胸の中　竹風
年頃はうちへ歸つて食ひ直し　豆秋
あんまりな母へ年頃ぶいと立ち　春秋
年頃もよしと親だけきめて居る　琴人
年頃になつて弟連れてやり　喜多八
(人)年頃になつてみんなを笑はせる　觀月
(地)日が長くなつた表を昨日の娘　九葉
(天)年頃の机になにか飾るもの　竹木

席題　想　像　鮎美　選

想像がふと吐切れてる原稿紙　一夫
想像はみんな儲ける朝の市　方眼
想像へどこまで弱い男なる　ト居
想像の江戸川亂歩めいてくる　春秋
想像があたり泪を見せて置き　二南
想像をし乍ら朝の水を汲み　かほる
(佳)想像へかけ出したくなつてゐる　坊茄子
(佳)想像を裏切つて行く子の勝氣　明珠
(佳)想像の結局强く生きるのみ　觀月
(佳)想像へ疲れ凹んだ眼をさすり　鬼笑太
(人)想像　戀ゝ裏切る菊池寛　草人
(地)まぼろしがくずれる爪を切つてゐる　九葉
(天)想像の前に現實曲つてる　竹風
(軸)ゲーテーの詩にたづく生きむ　鮎美

席題　大　臣　豆秋　選

信心をする大臣の氣が淋びし　明珠
大臣の夢は丸さを欠けてゐた　ト居
大臣へマイクロホンの少さ過ぎ　華水
大臣のこんな日もある孫の守　草人
大臣になれば命あつた筈　喜多八
大臣が泊り廊下の冷える事　九葉
大臣へ女將遠慮なくしやべり　里十九
面會へ大臣はまだ起きてゐず　琴人
大臣へ秘書うなづかすことがあり　竹木
大臣の旅は景色の中に立ち　二南
たんぜんを着て大臣の愛想よし　觀月

席題　裏　互　選

裏道を走つて女儲けてゐ　靖弘
好天氣足袋の裏へ陽が當り　華水
裏口で辛棒せよといさめられ　明珠
裏口を一寸出て行く客があり　觀月
裏口へ目出度い料理運んで來　二南
女房を裏から出して火鉢にゐ　春秋
かなしみの家の裏なるあんずの木　竹木
子の貰は裏からそつと届けられ　南耕

川柳雜誌社天王寺支部

同人句會(大阪)

二月十日　於内藤製作所　須崎豆秋報

丸　髷　公　二選

丸髷のほこりに疲れ見せるなり　鶴峯
モダン趣味もう丸髷の根がくづれ　水車
丸髷が出て挨拶は改たまり　豆秋
(軸)出迎へた妻のお髷みづ〳〵し　柳村

名附け　村選

命名も濟んで父さんらしくなり　水車
一人前のお膳を貰ふ名附けの兒　鶴峯
先生へできぬ先から名を頼み　豆秋
(軸)秀才へ三人もある名附け親　車選

エレベータ　水

三越でエレベータだけの客になり　柳村
降りようと思へばエレベータ昇り　鶴峯
八階へ鮮食ひにゆくエレベータ　豆秋
エレベータ藏きられたる身を運び　公二
女秘書エレベーターに用が殖え　同
(軸)エレベータ巾をとつてる紙包み　豆秋

號　外　豆秋　選

號外へ日本人の氣が尖り　公二
號外のちぎれて廻はる喫茶店　水車
(軸)占領の號外空家へも這入り　鶴峯選

旗

先頭が旗もつてゆく天主閣　豆秋
日の丸の旗へ滿洲よみがへり　水車
春の風旗靡かせて東西屋　同　公二
軒々の旗がなびいて日本晴　同
(軸)入營の旗背の兒も持たされる

鶴町川柳行脚（二月分）

妹尾變人報

故　郷

橋本綠雨選

故郷の手紙二三度讀みなほし　天柳
故郷に急に歸つた忌中畳　碧郎
淋しさに亦故郷を立ち出づる　雅幽
「晩年は故郷の土とならん」
朝顏の蔓をのばして落ちつこう　鮎美
下手な字で故郷から來た年賀狀　小柳子
貧しさへ妹も俺も故郷を立ち　寛柳
(佳)故郷へ錦を飾る日は遠し　秋月
(同)故郷を忘れジヤズに醉つて居る　寛柳
(同)人力も嬉し故郷の道に搖り　紅
(人)故郷へ夫婦で歸る顏のつや　錦石
(地)腕組めば故郷の空は曇つて來　白峯
(天)故郷を思ひ續ける雨が降り　變人

ラヂオ

福田山雨樓選

込み入つた話へラヂオ留めさせる　碧郎
父親とラヂオを聞いて今日も無事　變人
珍客へ先づラヂオを聞かしとく　岩石
擴聲器二人の話大きすぎ　正路
調子よう合せばラヂオ終ひなり　一笑
母親は二階でラヂオ聞いてゐる　白峯
催足に來ればラヂオを鳴らして居　小柳子
ラヂオ止めて口はしたなき女達　雅幽
兩側の店のラヂオに夜が長し　同
ラヂオなど引いて國から母をよび　秋月
散髮へラヂオは明日の雨を云ひ　寛柳
アナウンサー少しあはてた三蘭打　同
JOBKおむつをかへてゐる母よ　鮎美
出戻りへラヂオはお休みなさいませ　同
(人)放送の博士の聲で子はれ入り　錦石
(地)春日和ラヂオほつたらかし居る　小柳子
(天)よく寳ねる晩にラヂオは安來節　鮎美
(軸)神棚の灯が眠そうにあるラヂオ　山雨樓

二　階

熊谷紅選

子の出來ぬ丈けが淋しい二階借　秋月
二階借男二人の苦學生　雅幽
二階から世間話に降りてくる　天柳
二階借す話も出たる年の暮　錦石
氣之毒な二階の話きかされる　正路
堂々と刷つた名刺の二階借　天柳
二階から見る高低の屋根ばかり　鮎美
二階など借して子もなく金を貯め　寛柳
二階借りする約束の金指輪　變人
(佳)二階借り下から智慧をかりられ　錦石
(佳)二階とは知らず國から母が來る　秋月
(軸)呪はれたやうに二階はしめたま　紅

梅日和偶會（大阪）

二月廿一日　於琴人居

題　替へ玉、踵　素、琴共選

石段へかゞとは一つ一つ鳴る　素人
ひろはかゞとへ膏藥をつめ　同
替へ玉を見拔いた樓主輪を吹かせ　同
替へ玉のお金で濟んだありがたさ　四五磨
かゞととは別に小さい婦人靴　同
替へ玉を信じきつてる色男　同
替へ玉へ兎も角猪口を一つさし　琴人
替へ玉は電氣の方へ脊を向け　同
駈落の闇は踵に追はれてゐ　同
替へ玉へ白足袋はいてついてゆき　同
細いかゞとへ照明のあや　壽枝女
替へ玉と知らず責任負はされる　同

阪大川柳會二月例會（大阪）

丸島利生報

兼題　心　配

路　郎選

心配が時計に變る親の愛　溪邨
心配を一時おさえの酒であり　竹涯
お正月案じた通り醉ひ潰れ　柳秀
心配はこれからですと母は云ひ　斗仙
心配がぼやけていつか寢てしまい　路生
萬歲に送られてさて家のこと　湧三
あれこれが胸につかへて床につき　山彦
十一時何んでこんなにおそいやら　同
心配を隱す睫毛の長さなり　橙舍
云ふ程に心配さうな顏でなく　同
心配の數々男上の空　鶴生
聽診器心配事も聞いてやる　同
(人)今晩が危ないと云ふ電話口　湧三
(人)金持たぬ家出が皆の氣にかゝる　柳秀
(人)心配を神樣丈にあかして來　芳一
(地)寢ころんでする心配は苦にな　路生

(地)捕まへるやうに容態聞きにくる　湧三
(天)聞いてみりやまだ可愛い心配だ　同
席題　家　出　路郎選
濟みませぬ叶ひませぬと置手紙　竹涯
家出もの金の切れ目にけりをつけ　芳一
宣傳の爲めにスターは家出なり　洗塵
あつらへた樣に家出に雪が降り　路生
高遠の理想を畫く家出なり　筑川
功成りて家出の頃を懷かしみ　同
廣告に寫眞も入れた家出人　利生
駈落もならずとう〳〵岩田帶　同
木の芽立ち家を出る氣になる若さ　方正
ふと家出する氣になつた暮し向き　同
今はもう家出の頃の夢もさめ　山彦
第一に立ち寄つた家が貸家札　同
新聞に話ついたと出て呉れず　橙舍
出る程の事でなかつて歸られず　同
(人)大阪をたちの二歩を淋しがり　路生
(地)家出もしてしまひたい子の病氣　洗塵
(天)家出より金を案じる雇主　柳秀
(軸)子の家出も商賣をする氣なし　路郎
(同)家出と追手道頓堀で別に呑み　同
(同)義理の仲金百圓の尋ね人　同
(同)逃げて來た二階で手紙はかりかき　同
雜　吟　路郎選
戀愛は神聖と言ふて此しまつ　斗仙
人を待つショールは鼻へつき上げる　路生
落選に次から次へもつれて來　山彦
ふところも知らずサービス露骨なり　湧三
白い呼吸長う吹いてた牛の顔　鶴生
散歩する狐の頸卷尾があつた　同

その眼たゝ拒むが如く目たゝかず　橙舍
千代紙の着物着せ度い乙女なる　同
ラッシュアワー縛られに行く顏　利生
働けり疲れけり一本つけてくれ　竹涯

川柳雜誌社
鶴町支部

二月例會（大阪）

二月十七日　妹尾變人報

兼題　厄　介　雅幽選
厄介な支那聯盟へ又すがり　一枝
酒亂の父警察迄も手古摺せ　三丁
厄介のついで交番送つて來　水車
厄介にされても繼母へさからはず　寬柳
厄介な道連が出來日も暮れる　茂草
厄介なと言ふ目尻を見のがさず　變人
(軸)地主草を伸ばして逆らはず　雅幽
兼題　應　援　水車選
應援の辯士の方がよくしやべり　一笑
應援に行けば我が子で無い姿　岩石
合宿の應援團へ夜が更け　永樂
應援旗夕陽を受けて補回戰　寬柳
應援歌まだ聞こへる風呂の中　雅幽
應援を求めに行けば病んで居る　鮎美
應援へ山あり部落まだ見へず　白峯
(軸)ラヂオ今應援團の拍手なり　水車
席題　時　計　小柳子選
ぜんまいを捲いて感謝の宵を寢る　寬柳
ルンペンは正午の針を眺て居　白峯
たゝ議長時計眺めて居るばかり　雅幽
落ちつけと言はんばかりの大時計　變人
門衛は時計合はした處で暮れ　水車
電報の聲が大きい午前二時　三丁

此の頃の景氣時計が止つて居　雅幽
(佳)脈膊へ時計悲しくみまもられ　水車
(同)日曜日隣も時計あわして居　雅幽
(同)目覺まし寢むた朝を寒う出る　寬柳
(軸)靜かさの中に時計の動く音　小柳子
席題　自　惚　岩石選
自惚の心を叱る歳をとり　變人
自惚が足を踏まれた電車なり　水車
自惚をはつきり見せて筆をとり　瓢水
自惚を笑つた樣に柳散り　雅幽
冷へた茶を呑んで自惚歸るなり　同
(佳)自惚に聞けば社說も間違だ　寬柳
(同)自惚と女房鏡を持つて來る　茂草
(同)自惚て飲まない酒を無理に飲ん　しげる
(同)自惚の端唄に困る病みあがり　變人
(同)自惚は鎖へ不平あるのなり　水車
(人)自惚て道頓堀を歩いて居　小柳子
(地)自惚の客を眺めて隅で呑み　雅幽
(天)巢をはるくもに自惚れてはおれず　變人
(軸)自惚れぬ力かぎりが床に伏し　岩石
席題　不　服　變人選
不服へ風が強く當るなり　正路
朝刊がまだこぬ不服膳が出來　瓢水
(佳)宴會に不服は隅の方に居る　小柳子
(同)不服など言わぬっもりの紹介所　一笑
(同)不服なぞ言ふなと青い〳〵空　雅幽
(人)不服ある事を言わずに笑って居　小柳子
(地)爪かんで不服まだ〳〵あるいらし　同
(天)階段のこんなところに不服あり　白峯
(軸)不服など言はない事に決めており　變人
席題　逢　曳　互選

逢曳へ親の用事もそこ〳〵にしげる　白峯
逢曳の二人は遠く遠く行き　三丁
逢曳をひやりとさせた靴の音　變人
逢曳へ廣告燈が遠く見え　雅幽
逢曳へ新内遠く流して居　寛柳
足音へ又逢曳は歩きだし　岩石
町を出て逢曳らしゆなつて行き　同
逢曳は橋の上まで來てしまい　同

川柳草々會句會（大阪）

神樂　報

二月十三日夕七時より、平松睡蓮居に於て句會を開く、本社高橋かほる氏を迎え、參會者九名熱心に作句、九時半より雜談の裡に初心者誘導の効を奏した。

兼題　酒　かほる　選

春雨が降るなり道頓堀の酒　豆秋
酒呑むでやつぱり戀を考へる　あや美
コツプ酒のよい機嫌である天秤棒　神樂
酒のんで別れた友がなつかしい　みつる
大丸の包みを提げて呑み歩き　豆秋
二本目の銚子に手料理賞られる　神樂

兼題　白　衣　奇可愛　選

小さい窓口から白衣呼んで　神樂
汚れてる白衣で今日を儲けてる　みつる
看護婦の白衣に目立つ頬の色　睡蓮
あはてゝは居るが白衣しわが無し　かほる
手術臺白衣の群の聲もなく　翠夢
妹もう白エプロンの似合ふ頃　水車
病院の廊下が長い白い服　豆秋
（人）容態へ落付いて居る白衣なり　一二三
（地）病院臭い白衣で自動車呼び出る　神樂
（天）臨終を告げて白衣ソツト立ち　一二三
（軸）博愛衆に及ぼす氣持白衣着る　車選

席題　手　袋　水　かほる

手袋をはめて易者は荷を終ひ　奇可愛
サイレンでぬぐ手袋の尊くて　神樂
乘車券もどかしく手袋のまゝちぎ　水車
（軸）手袋も交通と言ふ白さなり　神樂

席題　散　歩　神樂　選

犬つれて散歩してゐる家主の娘　みつる
チョツト散歩辻で圓タク呼んで居り　睡蓮
姑に散歩散歩の若夫婦　一二三
歯が痛くなつて散歩ひつ返し　かほる
散歩する堤にバーが出來てゐた　奇可愛
散歩今はなれん〳〵になる明かさ　水車
散歩して歸れば朝のお味噌汁　豆秋
散歩する二人は幸福そうに見え　あや美
褞袍着て散歩をしたも旅の事　同
（軸）演説會を一寸覗いて來た散歩　同

支　那　互　選

つまらない支那の話へちよくがなし　かほる
支那と云ふとこはと眼鏡はずす　同
支那から歸つて日本の有がたく　みつる
便衣隊肉彈戰におじけつき　あや美
新遊戯腕白らしい便衣隊　奇可愛
カインドは支那の地圖を拔け目なし　水車
飛行機を飾つて置くも支那の國　豆秋

全　權　互　選

全權はカフエーも一寸のぞいとき　水車
全權へ葉卷くはへて横を向き　豆秋

翠夢居小集（大阪）

二月二十五日夜　江戸みつる報

雪

雪が映へ面白そうな夜が明ける　あや美
春の雪もう地にしみこんでゐたりけり　翠夢
大阪の醜を覆ふてる雪の嵩　同
雪の夜何か氣になり逢ひに行く　みつる
初雪の朝あてどなく歩いてる　同

川柳雜誌社神戸支部　二月小集（神戸）

二月十八日　明　珠　報

席題　疊　春　秋　選

表替させて家賃がきめられる　繁堂
新婚の疊の匂ひへ廣ふ居る　竹風
沈默の疊へ落ちた冬の蠅　霞川
泣いてゐる娘疊の巾にゐる　華水
疊屋は斯うでもなしと敷きかへる　松葉
（佳）不甲斐ない事を疊の上で知り　明珠
（佳）おしづまり新しくなる古疊　雅雪
（軸）捨てられた女へ疊冷えてゐる　春秋

席題　切　符　明　珠　選

白切符持つて隣と親しめず　繁堂
無駄乍ら破れ切符をついで見る　雅雪
初旅は切符のありか確める　竹風
まだ賣らぬ切符賣場へ並んでゐ　春秋
切符賣り手の先ばかり見て暮し　華水
（人）乘替へへの切符へ寒い交叉點　竹風
（地）運命を指さす切符握りしめ　同
（天）座蒲團の廣さを許す切符なり　春秋
（軸）狸寢に切符切らしてもらひま　明珠

席題　酒　華　水　選

親しさは酒があるぜと誘はれる　春秋
日本酒へ氣の合ふたのが窓により　繁堂
大阪の酒阪急で寢てしまひ　竹風
敎會を出ると酒場の灯が赤い　同
（軸）初芝居酒の匂ひをさして來る　華水

席題　臺　所　竹　風選

臺所へ時計キチンと合ふてゐる　繁堂
臺所で胃散わけなく呑んで來る　鬼笑太
よろこびを擴げられたる臺所　明珠
臺所一杯ひろげる新世帶　雅雪
（佳）天窓の影が動いた臺所　華水
（佳）臺所おどる擂鉢押へられ　春秋
（軸）臺所で亭主は慣れぬ音をさせ　竹風

卷二　居小集（松江）

田中都之介報

二月二十日宵　柳人選

席題　黄　昏

街は暮るゝ財布と足の妥協　晁史
黄昏が來て賽錢の音がする　卷二
黄昏の何處迄伸びる影を見る　冬精
（佳）持て餘す化粧女給へ黄昏れる　陽子
（佳）黄昏へ誘惑の手が延びる春　眞沙緒
（佳）ウエーターの微笑み春は黄昏る　玲人
（佳）灯が點けば女給となり眉を描く　都之介
（秀）宵はせまれり新妓の憂鬱　晁史
（同）夕刊賣も歸つた黄昏の淋しさ　玲人
（同）覓のリズムの感傷的な夕　都之介

席題　敗　慘　玲　人選

敗慘の身へ餘りに重き荷よ　眞沙緒
敗慘の身深山に炭を燒き　冬精
敗慘の末エプロンの姿なり　卷二
敗慘へ桃色の夢果敢なくも　同
迂濶さがこの敗慘となつて來た　陽子
拳汗して敗慘の夢　都之介
敗慘へ月蒼白く蒼白く　柳人
敗慘へ嗤りの瞳が出會ふのみ　晁史
（人）敗慘の路次に小さく生きる身よ　柳人
（同）罠の自覺に餘期せぬ動悸　都之介
（天）敗慘の突叉復讐心となる　同

席題　過　去　卷二選

過去を捨て陽氣な女になれと言ふ　玲人
貧乏の過去不自然に路次に生き　柳人
過去を談じ共稼ぎ貯めて居る　眞沙緒
囚人へ淋しい過去があるばかり　冬精
その過去を女給は笑ふ許りにて　陽子
エプロンへ慘たる過去を秘してゐる　同
へし折れし楽にからむ過去の夢　都之介
（佳）ラストラブ過去餘りに慘めにて　冬精
（同）プロフイル過去を冷く嗤つてゐる　玲人
（同）剃眉の青さに謎の過去を秘め　都之介
（同）砂濱の歩み過去等思ふまじ　柳人

席題　魔　窟　都之介選

大の字の女魔窟の眞晝間　卷二
頬のしは女淋しく居る魔窟　陽子
客もなく魔窟冬雨に更けてくる　晁史
榮養不良魔窟に媚を賣る女　冬精
都を追はれ魔窟を追はれて來た女　眞沙緒
（佳）流血の噂魔窟の灯が點り　陽子
（同）魔窟の灯强い刺激を放射する　柳人
（同）探偵と魔窟の路次ですれ違ひ　玲人
（同）云ひ拔けて出はれ魔窟の灯が見る　卷二

白鳳川柳會二月例會（大阪）

三月一日　於一柳居　南草路報

兼題　鋏　路郎選

一鋏毎に生垣延びて行く　呑郎
湯あがりが鋏片手に足をのべ　清流
初産が鋏へ用もふへたのよ　柳三
乳房あて坊やの爪を切つてゐる　窓伍
鋏を持つて病上り息がきれ　一犬坊
月やくの廣告を切る未亡人　康童
爪を切る鋏亡き妻思ひ出し　一柳
鋏とぎ糧にもならず日が暮れて　草路
夕風に研屋の聲が震へてる　同
この俺と鋏と丈はつかひよう　美夜路
よい事があろが無かろが爪を切る　同
密柑山鋏の音に淋れゆき　光外
血と不安の中を鋏がおし進み　同
此の通り切れる鋏へ紙が散り　柿三（凡人改メ）
鋏の音碁石の音がすみ渡る　曲豆
紋付を寸斷に人形のべゃよ　黄犬
腕前は鋏一つで貧家もち　同
戰爭の話鋏の手をやすめ　喜代路
鋏おばかくしてみたい若さ也　同
鋏まで揃へてゐたい稽古づれ　同
蟹の畫にお伽の國を思ひ出し　計司
衣擦れに木鋏の音はたと止み　同
お針子は鋏を盾に身をかばい　同
木鋏の音に暮れ行くよいくらし　同
未生流鋏は他家で買ひました　慈雨來
クラス會話の合はぬ鋏刈り　同
小包をポチ〳〵ほどく家風にて　同

同窓に遭へば白足袋鋏刈り　同
青春の第一歩なる鋏刈り　同
(佳)目と口を歪めて鋏派出な音　柿三
(佳)鋏持ち撥もつ君と野を墓ひ　美夜路
(佳)初戀へ鋏も共に溜息し　喜代路
(佳)見あたらぬ鋏の行衛吾子居ず　黄犬
(人)髷と憂鬱と傳統を切る鋏　慈雨來
(人)髷切つて大衆と共に生きんとす　同
(人)日はのどか鋏庖丁とぎ直し　曲豆

(地)その指にしては邪ケンな花鋏　凡人改メ柿三
(地)切符より顔見て鋏入れてゐる　如一
(天)仕立屋の銀次鋏に親しめず　光外

席題　土瓶　琴人選

入營に土瓶の酒をふるまはれ　光外
勝手元に土瓶のかげも物を云ひ　曲豆
鋏け土瓶朝顔種の鉢となり　一柳
友の身を思へば土瓶に手がさわり　美夜路
土瓶まだ煎ぐすりの香が殘り　喜代路
(佳)土瓶まだ昨夜のまゝに二日酔　同

席題　火鉢　琴人選

どてら着がどつかとすわる長火鉢　曲豆
がらになき火鉢新築祝なり　一柳
破れ火鉢又此冬も無二の友　草路
長煙管頭かき〳〵かんをつけ　曲豆
やいてゐる事は火鉢の知らぬ事　柿三
(佳)たすけ合ふよと兄弟は手をしぼ　美夜路
(佳)火鉢まだ滴ぬけの樣な大廣間　喜代路

變人居偶會（大阪）

二月九日　題未練　妹尾變人報　互選

未練あり他人あり父の手前あり　白峯
笑ふてる顔に未練の殘るなり　小柳子
未練なか〳〵橋が渡られず　岩石
降つて來た空に未練のある二人　同

題　短氣　互選

短氣者已が短氣を知つて居る　岩石
びざ頭抱いて短氣の折れてゐる　變人
下駄迄が俺の短氣を知つてゐる　同
鉛筆のシンを尖らす短氣な兒　小柳子
年のせい父の短氣にさからはず　寛柳
一匹の蠅に短氣は立ち上り　雅幽
氣短かへ手傳ふやうに赤子泣き　同
末の子は父の短氣を知らぬなり　白峯
短氣今茶碗のカケを持つてゐる　同

かほる居偶會（大阪）

二月十五日　高橋かほる報

題　火鉢　互選

長火鉢によれど艶聞持たぬ身の　葭乃
宣德へわれ白魚の手を持たず　同
火鉢から父親らしく退いてやり　かほる
餘技と云ふ人形火鉢の上で見る　同

塗青柳壇二月例會（大阪）

二月十一日　於塗料青年團事務所　熊谷紅報

盃　互選

天盃が二ツ藥屋の自慢なり　光
醉ふて來て盃あだ名で返される　三丁
恐る〳〵課長の盃受けて來る　謙公
盃の順をあせつて幹事醉ひ　紅
聞き馴れぬ聲に盃下へ置き　碧郎
盃を押し戴いて母は呑む　變人
盃を投げる一座の賑やかさ　碧郎
盃へ二タ人がもめるのもよろし　變人
なみ〳〵とつがせたまゝの自慢話　木馬

麥　紅選

麥飯で太く育つて出征し　光
軍隊と麥飯ともに馴れて來る　碧郎
麥飯も感謝の腹の美味さなり　變人
旅客機の影がはつきり麥畑　青踏
先生に揮毫願へば麥の穗　三丁
(佳)麥畑にきゝめが見えず轉地する　碧郎
(同)來るとすぐ麥の話を故郷の父　三丁
(同)乃木宗となりて麥飯食よと居る　琴人
(人)麥作る不平へ遠く汽笛なり　變人
(地)麥五寸娘は惱むことを知り　琴人
(天)青麥のまゝで畑を賣ると決め　光
(軸)麥の穗へ今日麓まで晴れた富士　紅

鹽　碧選

盛り鹽が汚れ料理屋やまを入れ　紅
清め鹽少し身を引く五ツ紋　青踏
入口の鹽ノーチップ踏んで出る　木馬
花嫁の鹽の加減が氣に入らず　光
鹽加減砂糖加減も新家庭　青踏
病む母へおも湯を贈る鹽加減　瓢水
(軸)喜びをお重に載せた鹽包　碧郎

佛　像　青踏選

佛像に親しみにくい新夫婦　木馬
大佛へ一年生が八釜しい　變人
(佳)本尊は知らぬがまゝで拜まれる　同
(同)國寶を覗いて見ればまつ黑け　琴人
(同)佛像は御光を重たそうに頂ひ　木馬

(同)飛びかゝりそうな十二天　琴人
(人)佛像は印度で育つ姿なり　碧郎
(地)み佛に俺の心の灯をともし　變人
(天)佛像へ思つた通り無理を言ひ　三丁
(軸)佛像の眉はまあるく長く引き　青踏

春風　變人選

春風へなぶらせてゐる洗ひ髪　青踏
春風へ女は春の帶の事　同
春風へ戀のボートよ何處へ行く　光
春風に五重の塔へ上つて見　謙公
合服を着た氣輕さへ春の風　紅
春風へ中座初日の蓋を開け　琴人
病院を出る横顔へ春の風　碧郎
(佳)春風ないとう此身の病み上り　三丁
(同)春風に猫は迷子になつた切り　琴人
(軸)春風を仔猫と俺は待つてゐる　變人

兼題　包み紙　琴人選

包み紙かゝへてみると角があり　青踏
包紙も一度使ふ皺をのし　碧郎
危紙ソツト上から押さへて見　謙公
包紙ひろげた妻の氣嫌なり　變人
包み紙を丸める若さ面白し　木馬
店員の手に包紙素直なり　碧郎
包紙切手は餅と云ふ重さ　紅
包み紙渡して靴の紐をとき　瓢水
(秀)商品を包む手際の生活線　變人
(軸)新聞で包んだものを買ふ孤獨　琴人

松濤、羅門對座吟（島根）

二月六日　羅門居(羅門報)

題　傘、影、口笛

蛇の目傘二人の愛の朝の霧　松濤

晴天の氣持よき口笛となり　同
パラソルの色に染りし麗らかさ　同
影を意識する失戀の月　同
影を知るその悔恨に立ち盡す　羅門
口笛のフツと自嘲に突き當る　同
こゝやかな影をまたげば春の呼吸　同
番傘へ思想なんかありませぬ　同
コーラスの日傘ぐる〳〵伸びる道　同
繪日傘を嗤ふ嵐とはなりぬ　同

西條柳壇第二回句會々報（愛媛）

日時　二月十日午後六時半
場所　裁判所宿直室

兼題　選　擧　越智虹一選

兩黨の政談聞いて氣が迷ひ　孤鶴
小使へ社長の推薦狀も來る　英賀夫
杖ついて來る一票の尊さよ　同
選擧まで出入者にも頭下げ　孤鶴
(客)推薦狀寄こした程に禮が來る　西英子
(同)どちらでも景氣のなほる方へ入れ　英賀夫
(地)一票で傳令とんだ開票日　夜舟
(天)特高が選擧違反になぐられる　晴比古
(軸)遊んでゝ投票權の有難さ　虹一

兼題　風　邪　荒井英賀夫選

風引の子の無理を母親甘く聞き　西英子
電話口風引らしい聲であり　風柳
風引は呑めばなほると上戸言ひ　夜舟
風引か伊達が濕布の念の入り　西英子
(人)風邪ひいた社長和服でやつ來る　虹一
(地)風邪の床母の看護へ二時が打ち　晴比古
(天)風邪いえて晝風呂のチト熱ぎみ　都々城

(軸)二日目を欠勤シップでやつ來る　森晴比古選

兼題　興　奮

興奮がさめれば人を切つた後　英賀夫
興奮へ時刻む音の喰入つて　孤鶴
興奮の中にダンサー儲けてる　英賀夫
(人)興奮のあまりに煙草ちびて居り　同
(地)都會の興奮に子までゐて　都々城
(天)興奮へ女給は酒をつぎこぼし　英賀夫

兼題　素　直　吉田都々城選

サイレンが鳴れば素直に待つてゐる　讓二
押賣が素直に歸り淋しまれ　英賀夫
(人)素直に承諾をした儲け口　虹一
(地)あの娘なら素直と兩親話し合ひ　夜舟
(天)一人娘へ素直な親となつてゐる　英賀夫

兼題　涙　黑川孤鶴選

子と母へ涙の列車遠くなり　虹一
書置は涙じ書いた跡があり　英賀夫
言過ぎたへ女の涙光つてた　都々城
物乞ひへ涙のもろい母であり　虹一
出棺の中に泪の又あふれ　英賀夫
涙ふきけなげに語る未亡人　一葉
(人)目の露を浮べて娘承諾し　風柳
(地)戰死した子の親涙で滿足し　夜舟
(天)思出の話涙でお通夜する　晴比古

川柳雜誌社　梅田支部句會（大阪）

二月廿八日　於鮎美居

兼題　夜　霧　清記互撰

一點句

靴音の高く波止場の灯の夜霧　鮎美
二人きり夜霧の町にかくれんぼ　良坊

廉雀を出ずれば夜の霧深く　坊茄子
天王寺五重の塔も夜の霧　方眠
戀もすて親をもすてゝ夜の霧　ト居
あきらめの言葉夜霧に消へゆきし　同
夜の霧湯槽に白く立ちにけり　石竹

二點句

たゞならぬ氣配夜霧の街を行く　一流
辻うらは實れず夜霧の中に立ち　鳴玉
霧深い夜のネオンへ來た孤獨　晴夫
誘惑を逃げた女給へ夜霧の街　同
子を探す夜霧に更ってゆくばかり　鮎美
夜の霧ベールの下に女の眼　坊茄子

三點句

原稿紙ふとペンを置く夜の霧　古木
薬瓶さげて夜霧の辻を折れ　同
待人は來らず夜霧深くなる　鳴玉
夜霧ふか〳〵夢の街ゆく　晴夫
夜の霧向片を吸ふて眠りいる　鮎美

四點句

小兒科たゝく夜霧の街は更け　古木
銅鍍が光る夜霧へ醉ふてゐる　ト居

五點句

誘惑にのる氣夜霧の中に立ち　ト居
忍び寄る心よ夜の霧ならむ　古木

六點句

この邊酒倉多し夜の霧　方眠

兼題　泡　觀月選

おかしさは泡のなかなる我が顏よ　ト居
瀧壺をぢつと見つめた泡が立ち　古木
春の陽にシャボンの泡の幸福さ　晴夫
痛快な話ビールの泡がとび　鮎美
ほのかなる望が泡に映つてた　同
(佳)靜かなる泡舞ひてかなしみの　石竹
(佳)死の一つ手前に泡が浮いてゐる　古木
(佳)失戀に泡一つゝつ消へてゆく　鮎美
(人)失業にコップの泡のさびし　同
(地)泡立ちたちつゞ見てゐる良き心　一流
(天)泡一つかすかに音を立てゝ消へ　同
(軸)泡ついたまゝエプロンの紐を　觀月

兼題　自梅　方眠選

白梅へ武骨な父の手を思ひ　一流
十八の戀白梅を剪つて來る　晴夫
薄曇り白梅雪を呼んでゐる　坊茄子
白梅に立札がありまだ蕾　鮎美
白い梅ほんとに寒い風になり　觀月
(佳)紅梅の中に白梅美くしゝ　坊茄子
(軸)梅だより紅白妍をきそひ咲き　方眠

兼題　影　古木選

傳說の柳の影が搖れてゐる　一流
影よ！お前も疲れてゐるれ　晴夫
泣けば泣く笑へば笑ふ影さびし　ト居
父の影子の影畑のうらゝかさ　鮎美
催促の影は大きくうつる也　同
(人)我が影の金のないのを疑はず　同
(地)正直な姿となりて影動く　觀月
(天)一粒の米にも影があるのなり　鮎美
(軸)太陽の眞下にありて影はなし　古木

席題　春風　一流選

春風をうけた彼女の裾さばき　夕鐘
戀人と春風に醉ひ戀に醉ひ　坊茄子
退院をするのだ春の風よ吹け　古木
春風へたのしい戀をのせてこい　鳴玉
春風のこゝは二人の寶塚　晴夫
若麥が香ふ春風牛を連れ　ト居
父と子の姿へ春の風が吹き　鮎美
春風に空ははてどもなく青し　觀月
(佳)春風へ戀へ小砂利を踏む音の　ト居
(佳)春の風女は芹など摘んでゐる　古木
(佳)日本は近し春風匂ふなり　觀月
(佳)春の風京人形に魂が　鮎美
(佳)二階から見る春風に信號旗　同
(軸)春風に欠伸する日が續きけり　一流

席題　ピストル　晴夫選

ピストル押しあてゝトリツク出來　夕鐘
ピストルが少し重たい女の手　古木
ピストルを出すと誰かゝノツクする　觀月
處女を守るピストルの手がふるへ　鮎美
(佳)物語るやうにピストル影を引き　ト居
(佳)ピストルを捨てた川底探される　古木
(佳)ピストルに何も知らぬ子は眠る　鳴玉
(人)ピストルへだん〳〵壁が迫て來　觀月
(地)ピストルへおのれを否定しつゝ　ト居
(天)ピストルを擊ち寒月を罵れり　鮎美
(軸)冗談でなくピストルを出て來る　晴夫

兼題　思ひ出　鮎美選

思ひ出の土橋を渡る月あかり　古木
梵論寺の鐘がきこへる丘に來て　ト居
思ひ出の丘から石を投げて見る　觀月
思ひ出の校舍に佇てばポプラ散る　晴夫
胸疼く白きベットの思ひ出よ　一流
思ひ出は今宵の月もまんまるし　方眠
(人)思ひ出も僕にひとりのもの　良坊
(地)思ひ出の悔ひることなき戀なり　坊茄子

(天)佇たずめば風はうしろに過ぎし　卜居
幼時をおもひて
(軸)風音の子の泣き聲に聞ゆなり　鮎美
席題　美　人　角力吟(勝句)
美女の眼にうつる男の痩せてゐる　鮎美
夕涼み美人はうしろ向きになり　觀月
魂をうばふ美人へ手がふるひ　古木
武子姫に似たる面さし見守られ　夕鐘
美しい女よどんな夢を見る　一流

第十一回關西土地句會（大阪）

小西無鬼報
琴人選

題　樂しみ

別居して　無鬼
樂しみに待つと新妻からの文　鐘生
樂しみの明日へ寢顔の安らかさ　素月
桃割に結つて正月近く居る　同
顏合はす樂しみ同じビルに住み　同
樂しみは同じ出番のバスを待ち　同
(人)明日の遠足へ夕陽のあか〳〵　無鬼
(地)ペン軸をたてゝ今宵のランデブー　同
(天)晩酌の父へ並んだ頭數　鐘生

題　長　い　琴人選

引眉の長さに夜の灯がともり　一久
長い事待たして置いて留守と言ひ　無鬼
ながゝの無沙汰へ就職頼んで來　同
爭議團扉へ長く待たされる　素月
長い夜を落葉聞きつゝ語り合ひ　同
氣の長いことを信用されて居る　鐘生
不景氣と別に暮して日の長さ　同
長々と寢そべつて見る兩の足　同
(人)十五年勤めて守衛発げかける　素月
(人)結婚の日迄が長い許婚　無鬼
(人)線香の長さ拍子木鳴つてゐる　一久
(地)長い手紙の不得要領　無鬼
(地)長い事待たして女優おそよし　素月
(天)又してもお話し中へカンを立て　無鬼
(軸)寢そべつて春日の線へ思ふ事　琴人

題　傘　琴人選

破れ傘させば悪人らしう見え　一久
停車場迄を迎への傘を持ち　無鬼
照明へ日傘は輕く輪を描き　素月
寄合の傘はいつしよにすぼめられ　同
幼稚園傘の下から足が見え　同
(軸)借りて來た傘の印へ嫉妬の目　琴人

題　キッス　琴人選

息詰まるキッスへ弟の歌の聲　無鬼
出勤のキッスへ妻は面を伏せ　同
キッスして見度い程醉うてしまひ　鐘生
キッス迄何時の間にか來て仕舞ひ　同
桃割に結つてキッスも知つてゐる　素月
乳の香へそつとキッスを與へたり　一久
(佳)キッスは日でチョイ〳〵喧嘩し　同
(佳)洗面器昨夜のキッス思ひ出し　鐘生
(佳)カクテルよりジンよキッスがして　素月
(佳)はつきり腕の強さへキッスする　同
(佳)唇を許した樣に椿落ち　同
(軸)唇を許して言葉から變り　琴人

題　賢　明　琴人選

賢明に見えても女だけの智慧　一久
賢明に默殺をする支配人　素月
賢明にやつて幹部のはしに居る　同
賢明な策と知つての無口なり　鐘生
結局は勝てぬ事だと知つて居り　同
賢明と言はれ敬遠されてゐる　同
(軸)賢明を自席に首相チラと見せ　琴人

鶴町川柳行脚（大阪）

雅幽報
鶴峯選

題　賛　成

賛成は我黨だけの可決なり　紅峯
不機嫌へ賛成してる母であり　白峯
金の要る事とも知らず賛成し　寛柳
賛成にゴタ〳〵あつて鶴が鳴き　三丁
すゝまない賛成後をついて行き　碧耶
賛成の人もう酒の話なり　錦石
賛成の拳手が硝子にうつるなり　雅幽
賛成の長屋家賃の値下げなり　天柳
成賛はともかく財布あらためる　變人
賛成へ議長大きく念を押し　元山
滿場一致同志の眼の動き　卜居
(佳)賛成してこゝろよく部屋を出る　小柳子
(佳)絽賛を浴びて議場の平和なり　元山
(佳)賛成を課長にさせる役が揉め　青蹠
(人)賛成はしたが歸りの暗い道　雅幽
(地)賛成に笑ひあひたる父と子と　鮎美
(天)賛成をせずに淋しく一人居る　元山

題　別　れ　秋月選

嚊きの小路別れとなつてゐる　鮎美
別れなぞ考へまいと眼をつむり　紅峯
勇士今父の位牌に別れてゐ　白峯
彼の女は行きぬ
黒雲にかくれた月へ汽笛なる　岩石
泣いてゐる二人へ汽笛高ふ鳴り　寛柳

別れた夜時計の刻む音を知り　碧郎
送別の旗の後に泣いて居る　同
別れて來てショールの色が眼にのこ　青蹠
(佳)別れフト雁の音を聞く星がわび　岩石
(佳)お別れの土橋に小藪蓼畑　青蹠
(佳)お別れの握手へ降らずバスケット　同

題目　的　寛　柳選

目的に緣談キッパリ斷られ　碧郎
目的を思ひ〳〵に待つ床屋　錦石
目的が替り天井塗りかへる　紅
目的へ清い心を持ちつゃけ　卜居
目的を讃めてやるのに淋しがり　雅幽
目的をとげず目的又替へる　しげる
目的が無雜作に立つ若さなり　青蹠
目的はもう嫂に知られて居　鮎美
目的は忘れて居ない醉ひ加減　岩石
目的も矢張り兄らし弟らし　三丁
目的へ滝は青々してるなり　白峯
(佳)目的へ甘い言葉がこびりつき　正路
(同)目的の一歩大地へ揃ふ鍬　青蹠
(同)目的も云はずに友と醉ふて　鮎美
(軸)目的は大きく書生低う居る　寛柳

川柳雜誌
松江支部　**みゝづく會例會**

三月一日夜　於龍昌寺精舍　奈良井柳人報

兼題　浮　世　多久和喋朗選

紺絣浮世を恐く逢ふてゐる　哲緒
禁酒して浮世を渡る指の節　羅門
單調な暮し浮世に暇があり　柳人
瞑想に浮世の醜を知るばかり　都之介
認識が不足浮世を呪ふのみ　天痴人
前科者小さう浮世の隅をゆき　九紫
手なぐさみ浮世の裏で灯を細め　無鐵砲
人の死へ浮世の泥を堀る仕事　同
(五客)社會課は人の浮世に泣かし　雪丸
(同)死と生の浮世に躍る大活字　羅門
(同)浮世から離れて久し茶器の色　都之介
(同)死に金を蓄めて浮世に獨り者　柳人
(同)砂風呂で浮世の朝を起される　天痴人
(人)部屋住居儘な浮世を寢ころが　雪丸
(同)落ぶれて浮世の春へ目をつむり　無鐵砲
(地)かつとして浮世をすねた獄中記　砂詩朗
(天)糸と撥浮世〳〵の音がする　大鳥

兼題　意　外　田中都之介選

(秀)待合を意外な人ともつれて出　無鐵砲
(同)零落へ意外な系圖出てくれる　喋朗
(同)校長の意外な戀にもめる村　哲緒
(同)病床へ妻の不倫を聞かされる　柳人
(人)附け鬚をむしつた顏に突付ける　喋朗
(同)書き置きに意外や戀の多角形　無鐵砲
(地)うなされる夢に意外を口走る　同
(天)舞扇別れた人の瞳と出遇ひ　喋朗

席題　歡喜の日　小田無鐵砲選

新調の靴が鳴る〳〵歡喜の日　馬耳郎
島台も生々として歡喜の日　天痴人
記念樹へ土の香親しむ鍬を執り　雪丸
歡喜の日お仕儀ばかりが續くなり　都之介
兩腕のこぶしに見入る歡喜の日　柳人
(客)歡喜の日チャルストンへ君と僕　喋朗
(同)結局は笑顏で叱る歡喜の日　九紫
(同)人間がみんな親しい歡喜の日　天痴人
(人)眞心の觸れ合ふ火鉢よ歡喜の日　柳人
(地)生き甲斐を族行列の數に入り　雪丸
(天)氷解の爭議へ笑ましカレンダー　喋朗

席題　本　氣　奈良井柳人選

(秀)本氣で眠む子供がいぢらしい　汀華
(同)お互が本氣になつてからの戀　雪丸
(同)猫イラズ本氣になつた怖しさ　喋朗
(同)冗談へ逆つて來る純情さ　都之介
(同)儲け口本氣にしてはならぬ人　同

席題　舌　打　ち　吾郷玲人選

舌打ちを聞いて仕舞つた御用聞き　喋朗
何氣なくする舌打ちを悪くとり　墓秋
(人)舌打ちを氣にして女立ち去らず　柳人
(地)舌打ちの儘燒き捨てる無心狀　都之介
(天)舌打ちを續け復讐思ふ夜　同

席題　同　前　後藤馬耳郎選

好い事にまで舌を打つ癖があり　雪丸
舌打ちの儘燒き捨てる無心狀　都之介
會へぬ夜鐘の余韻へ舌を打ち　無鐵砲
舌打ちへマッチはすれた樣着かず　同
(人)飛び去つた鳥を舌打ちと眺め　九紫
(地)舌打ちは人の動きまだるがり　柳人
(天)舌打ちを手錠の男脊に聞き　喋朗

席題　尾　行　互　選

そろうてる足へ尾行の氣が付かず　雨人
尾行する刑事へ犬が吠えかゝり　馬耳郎
此の寒いのにと尾行は笑われる　玲人
立話尾行は足を持て余し　雪丸
懷ろ手尾行を知つてゐる姿　都之介
ぬかるみへ尾行の足は逆らはず　無鐵砲
プラタナス尾行の息の休めどこ　喋朗

川柳雑誌社 **同人社友句會**

三月九日　於カナメ喫茶店

題　健　康　　路　郎選

健康な方の財布は粗末なり　奇可愛
段梯子の音に健康喜ばれ　絲雨
冬の汗坐れば腹が空いてゐる　町二
健康のしるし汚れを送つて來　艸樂
健康を害するほども親心　水車
健康を案ずる妻の湯のたぎり　變人
大食の優越權を認めたり　夢裡
國からの便り健康な健康な　里十九
すこやかな子供と貧を忘れてゐ　琴人
産みふやすだけは健康通り過ぎ　同人
(人)紋附きが達者な人にそ似合ひ　かほる
(地)お茶漬けが好きで母親七十九　素人
(天)スカートに春の空氣を孕ませて　丹路
(軸)靜脈のわれはさびしき男なり　路郎

綠雨居偶會　三月七日夜

兼題　旅　　橋本綠雨報

バスケット出迎ひにとられ汗を拭き　葉光
はるゞ〳〵と來た旅先は雨になり　あや美
鑛橋の響へ旅を意識する　鮎美
金力にうちかつことのできぬ旅　同
以上の三氏は投句
道をたづれ〳〵て旅の陽が落ちる　一流
日歸りの旅に土産を頼まれる　同
トランクの上で妻への便り書く　山茶花
買いたいが荷物にこまる名物屋　同
二三日の旅に鞄は大きすぎ　同
妻も子も待つてる旅で醉ふてゐる　同

川柳雑誌社 **梅田支部句報**（大阪）

題　切　炭　　川村觀月報　かほる選

切り炭の赤くいこつた新世帶　瓦坊
切り炭を立てゞ話を聞いてくれ　ト居
宴會へ板場切り炭いこして居　坊茄子
切り炭をつぎ〳〵議のことを言ひ　觀月
切り炭の匂ひへ下駄の音がする　同
切り炭へ女將の呼吸のやはらかし　古木
切り炭を持つて廻つた裏座敷　鮎美
切り炭をいこしお座敷きれいなり　方眠
(人)妾宅は今日も切り炭とゞけられ　同
(地)吸ひつけに行けば切り炭はぜる音　夕鐘
(天)白足袋を履いて切り炭つけてゐる　鮎美

題　生家（ナリワイ）　かほる選

生家歸へり思はぬ人に話される　瓦坊
いつ來ても變らぬ生家の溫かさ　坊茄子
餅燒けば生家の匂ひになつてゐる　ト居
生家からの便りに稻は穗が揃ひ　觀月
生家歸へり三人の子に服を着せ　古木
襟垢もつけずに生家の火にあたり　鮎美
生家からの仕送り次男も嫁を持ち　方眠
粟おこし久しぶりなる生家かへり　同
(人)生家近い商人にお愛想で買ひ　坊茄子
(地)二三日手傳ふ生家の鍬光る　鮎美
(天)子を抱いて生家へ畑のなかを　同

題　退　社　　新水選

退社して鼻毛を拔いてゐる生活　ト居
退社する我に淋しき紅椿　坊茄子
退社した俺をうさんな眼で見つめ　夕鐘
父におくる
退社した父に老眼鏡光り　鮎美
責任感きつぱり退社すると決め　方眠
(人)社を辭めてかゞまの高い靴を履き　古木
(地)歸國せよせよの手紙へ退社する　方眠
(天)退社して子煩惱の父となり　坊茄子

川柳雑誌社神戸支部 **部友句會**（神戸）

三月一日　於華水居　西村明珠報

兼題　鼻　　華水選

特徴のある鼻藝妓に覺えられ　竹風
吾が鼻の高さを信じつんとゐる　明珠
理想家にあるまじき鼻眞いなり　鬼笑太
席題　緊　張　　明珠選
ふと寒さ覺えて記者は落つかず　竹風
緊張は汗の滲んだ襯衣を拔ぎ　繁堂
ザエンド緊張をせる彼女の眼　鬼笑太
緊張の顏へ喇叭が響くなり　華水
君が代が鳴り御車が動きかけ　同
(軸)緊張をしてゐて不味い飯となり　明珠
席題　摑　む　　明珠選
決裂へ帽子摑んで立ち上り　竹風
口上のうまい男に摑かまされ　繁堂
負けそうな力士も鹽を摑んで出　華水
一摑みから剩錢を出す集金人　同
席題　便　箋　　華水選
便箋へシークな趣味を見せてゐる　竹風
父母へ出す便箋の字があれる　明珠
便箋の二行へペンを走らせる　同
席題　水　筒　　互選

手を合すからと水筒へしがみつき　鬼笑太
水筒の水を殘こして雨に會ひ　明珠
盛塲へ廻り水箇邪魔になり　同
遠足の朝水筒が待つてゐる　華水
幼稚園水筒だけをかけて行き　同
水筒が後へまはる第一線　同
先生の傍で水筒からになり　同

特別兼題　早　口　清記互選

早口が指で文字を空に書き　華水
なする罪早口の娘は泣きかける　鬼笑太
早口をたしなめられる電話口　竹風
早口へ返事しておく知つた用　鬼笑太
將軍は早口の子をたしなめる　明珠
早口の同なじ事にもつれてる　竹風
早口へ問ひ返へしてる交換手　華水
早口で云ふて斥候引き返へし　明珠
早口の使ひ二度目の店へ來る　竹風
要件になつて早口あなどられ　繁堂
早口で賣と買との氣が揃ろひ　明珠

舶來のポマードと言ふ美容院　紫白
全快の髪にポマード尙光り　濁水
(人)ポマードへ微兵はすんで　春風
(地)ポマードの好み戀と　紫涙
(天)ポマードは見合へ新の封を切り　柳風
(軸)七分三に分けてポマードを來る

醉眼　紫涙選

醉眼にふつと淋しい窓があり　春風
二次會の灯へ醉眼の光りやう　同
(人)醉眼に何か不滿の底があり　浮城
(地)物皆んな小さく見えて醉うてゐる　柳風
(天)醉眼へ春の天地が面白し　紫白
(軸)醉眼に勘定書がやゝこしい　濁水

兼題　鬼　濁水選

あこがれて來た大阪に鬼も居り　兼子
お廻りと鬼との强さ子に訊かれ　柳風
降伏の鬼へ手眞似の桃太郎　同
(地)當然の權利へ債鬼などと言ふ　浮城
(天)愛すればこそ母親は鬼となり　盛山

春宵鼎座吟（大阪）

三月一日夜　島田翠峯報

題　看護婦

臨終の部屋に看護服の皺　規堂
看護婦はついでに喪章買ふて來る　同
看護婦があとで笑つてゐたゝらう　舟々
看護婦の手も溫きものならず　同
看護婦の親切いとゞ身にしみる　翠峯
看護婦の腕に喰ひ入る腕時計　同
看護婦を呼べば返事の行き屆き　同

題　因　緣

半歲も食ひ倒ほされる緣の端　規堂
飯焚きとなつてゆかりの家に居る　翠峯
因緣となりゆく戀の恐ろしき　舟々

題　太　陽

目曜の寢床欠伸へ陽がはいり　規堂
陽を浴び溶けきつにゐるスキーヤー　同
朝風呂の背中へ春の陽が當り　翠峯
太陽の下で眠むたい乞喰の子　同
白日にさらされてゐる轢死體　舟々
春陽麗らか俺の決意を鈍らせる　同

二月柳路居八集例會（撫順）

柳路報　岩崎柳路選

風　呂

石炭の値に隔日の風呂がわき　十酊
砂風呂へ心もとない足を延べ　阿喜良
貰い風呂いらぬお世辭も云つて見る　同
錦洲は儲かる風呂に二人居る　仙涙
ふと湯冷め覺へ分れる立話し　同
內風呂を据えて父にもある持病　天弓
(人)錢湯に常連らしい聲をきゝ　十酊
(地)內風呂が欲しい中將湯の妻　天弓
(天)男湯へ兒を待つ女房小さく　仙涙

流　連

流連のたゝ氣になるは金の事　阿喜良
醉醒めてから流連の飽が來る　同
流連の客に仲居は不案がり　松代
つまらなさそうに流連畫を食べ　天弓
俎の音を流連近ふ聞き　同
流連へ電氣が點いたなと思ひ　柳路
流連のごてらのまんま電話口　同
流連の舌が荒れてる二日醉　同
(人)歸り度くなつて流連畫になり　天弓

川柳雜誌社高知支部　二月例會　濁水報

二月十日夜　本與力町碌々庵に於て

席題　裏　門　互　選

裏門で頭を打つた急ぐ用　浮城
裏門に居屋の車待たされる　紫涙
裏門へ開かず炭屋は置いて去に　濁水
泣きに來た娘裏門からしのび　柳風
裏門へ廻る男に荷の重さ　春風
裏門へ廻ると犬に吠えつかれ　紫白
裏門の首豆腐屋へ用があり　同
ポマード　浮城選

(地)流連へ無心の手紙讀まされる　同
(天)くたびれた樣に流連歸つて來　柳路
(軸)浮かぬ顏ひよいと流連尋れられ

櫛　日高阿喜良選

まゝ事の妹母の櫛を折り　十面
ふけ掻に母の小さな櫛を借り　同
櫛の目をはつ切り宵の口を出る　仙涙
呼鈴がはつ切り櫛の手へ聽こえ　柳路
(人)南椽梳櫛で居る麗かさ　天弓
(地)物思う娘櫛の齒拭いて居る　仙涙
(天)玄關で落ちそうな櫛敎へられ　同
(軸)麗かさ病後の髮を梳せて居

髯　福井天弓選

見忘れた顏を詫びてる髯があり　阿喜良
久し振り爲替が着いた髯を剃り　仙涙
剃り落す髯を床屋に惜しまれる　同
先づ髯を剃つて出て行く公休日　柳路
(人)不性髯たまの青さを冷かされ　仙涙
(地)劍劇の殺られる方に髯があり　柳路
(天)名を言へば髯のある事話される　松代

川柳雜誌社

天王寺支部三月例會（大阪）

三月十一日　於內藤製作所　須崎豆秋報

兼題　驛　綠　雨選

呼び賣りのとぼけた聲に驛は更け　水車
驛長の室に櫻の花匂ひ　豆秋
冴えた眼に通過驛の灯の更けた色　艸樂
驛からはもう見えてます天主閣　洋々
(佳)驛へ來てしめ直してる腕時計　裸人
(同)驛の灯を目當てに道を迷つて居　雅幽

席題　美人　雅幽選

うまの合ふ同士が美人批評する　鶴峯
顏に自信があつてマネキン　水車
立ち廻りになつて美人は手をたゝき　裸人
ショウウインドへ美人の眼が肥みわた　艸樂
美くしい女へシヤボン泡を立て　豆秋
うぬぼれた美人したしみうすれて來　綠雨
(佳)視線みな美人の方へ座つて居　同

席題　暗殺　艸樂選

月光の下に蠢く暗殺團　洋々
ドンブリを食つて暗殺眠てしまひ　豆秋
暗殺に宿屋の女おもてに出　鶴峯
暗殺へ暫し北濱默したり　水車
暗殺へ書類を持つた儘たをれ　裸人
暗殺で今朝の寄附き引きしまり　雅幽
暗殺に松の枝振り變りなし　同

席題　地圖、猥談　互選

獨り旅小さく地圖をたたんで居　雅幽
猥談へたゝにんまりと笑ふだけ　洋々
がてんのゆかぬ母へ世界地圖を見せ　裸人
猥談へ尺袋のコハゼがはづれてゐ　同
はつきりと地圖に印した領事館　鶴峯
其地圖の要所要所の日章旗　水車
猥談は外の寒さを忘れてゐ　同

亂雨送別句會抄報（大聖寺）

白花子報

友　互選

逆境に友の心がはつきりし　雪杖
燃ゆる希望へ友立ち上り　溪鶯
乾盃を希望に輝く友にあげ　吉祥
友達の辯を嬉しく眞似てみる　茶撫郎
春の空久しい友に見送られ　水玉
惡友は一圓あれば飲むと言ひ　白花子
空想の都へ故郷を捨て友を捨て　柳鴉人
友愛結婚妾いやだわ　燕子花
明星の一つは消へて友は去り　一寬
打明けば友は月夜を笑ひたり　醉羊
醉つてゐる友だに喧嘩分けてくれ　亂雨
久々で會つた竹馬の禿げてをり　吉龍

相撲吟　亂雨審判

幸福な色艶でよし處女でよし　燕子花
色男今日はどの街どの巷　一寬
白山がハツキリ見える空の色　醉羊
日本の色にこゝ迄塗る氣焰　吉祥
全映の皆で喜ぶ顏の色　水玉

川柳雜誌社
螢ヶ池支部

三月例會（大阪）

龜井愚寵報

梅薰る春三月十三日、こゝに嬉しくも、私達の支部は、かほる、鮎美、水車の諸先生がた並びに一流君を迎へて、一同晴れやかに、談笑裡に句會を開催した。

兼題　故郷　かほる選

魂のふるさといつかうしなひぬ　合歡人
ふるさとが戀しい宵よ春雨だ　公平
發奮の話故郷を懷しみ　寬枝
國訛り聞けば淋しく微笑みぬ（ある女に）　芳朗
反逆の子でも戀しい故郷だ　たき女
故郷の青さのなかの山晴れる　鮎美
せゝらぎよわがはつこひよふるさと　晴夫
あかぎれを見つめて故郷を思ひ出し　梨風

着せかけたドテラに氣がつく故郷の雪　同
故郷へ近く夜汽車に搖られ居る　松雨
ふるさとを捨てた男へ秋がくる　康夫
故郷は遠しひとりの母のこと　一流
故郷の姿となりし落ち椿　水車
夕食のさかな故郷を思ひ出し　由一
(人)ふるさとへ不孝をわびる年に　靜太
(地)ふるさとのみかんばたけの戀　晴夫
(天)故郷へ十六ミリを持つてゆき　鮎美
(軸)故郷で風呂の湧くのを待つてる　かほる

兼題　燃える　鮎美選

よく燃えるれと出勤は手をあぶり　公平
青い風紅の椿が燃ゆるなり　愚寵
燃えあがる火にはつきりと父の皺　松雨
手をとれば燃ゆる心のつたはりて　一流
山火事のはるか向ふが燃へつゞけ　巷巴
燃え殘る焚火をかこむエキストラ　同
(人)人間の無能を嗤ふ如く燃え　松雨
(地)燃え付に粗朶へ影法師ゆれる　青鬼
(天)燃えるのを夫と見てる新世帶　かほる

兼題「OH(又は)おゝ」　水車選

OH！これが不景氣か百貨店　公平
おゝみんな春に姿に忙がしい　巷巴
おゝ生きることにすつぱしの實　鮎美
オヽ今日もいくで人が死んでゐる　愚寵
CH！足袋も穿かぬ鮮人の子等　一流
(佳)おゝ天井が落ちそうだ熱が　巷巴
(佳)おゝ悲し魂までも反逆兒　鮎美
(佳)おゝ眼をあけたまゝ死んでる　晴夫
(軸)おゝ悠久の一人なる　水車

席題　響　愚寵選

病んでれば(サイレンの響も又なし)　靜太
氣味悪い響となつて急停車　巷巴
サイレンの音にもなれてよく眠り　友坊
默殺の響くこゝろを疑はず　鮎美
病み臥せば風に響のあるを知る　晴夫
(佳)響みな家路へ急ぐ音になり　水車
(幼時をしのびて)
(佳)響かない太鼓たゝいてゐたり　晴夫
(軸)寢ころべばかすかに息吹くもの　愚寵

席題　港　一流選

口笛は水夫らしい港の夜　五百吉
物思ひ遠く港の灯を見つめ　巷巴
港寂しく女に日が暮れる　靜太
駄菓子屋があつて少さな港なり　康夫
(佳)こほろぎに港も更けてゆく　鮎美
(佳)白粉をつけて港へだましに出　かほる
(佳)已が住むこゝろの港探すなり　愚寵
(佳)希望の港はるかに灯のあかく　晴夫
(佳)廢港へ今日も夕陽が沈むなり　康夫
(軸)セーラーが醉ふて歸つた港の灯

席題　タオル　康夫選

蒸しタオルヘリオトロープを知つて　青鬼
春の午後タオル靜かにゆれてゐる　由一
干乾らびたタオル淋しき心なる　一流
タオル眞白く今日も病んでゐる　靜太
蒸しタオルなんか女房都會馴れ　水車
眞白いタオル湯槽にわれひとり　晴夫
青春をタオルに汗のふききれず　鮎美
(人)戀のひまタオルを持つて畫を出る　晴夫
(地)朝風呂へタオル靜かに沈む　靜太
(天)あたらしきタオルのにほひ春の朝　五百吉

席題　眞操　互選

眞操を社長大きく嗤ひたり　康夫
惚れてゐるから眞操をさゝげたり　巷巴
眞操を守り家庭は平和なり　由一
夜毎々々の夢に眞操奪はるゝ　一流
眞操と噂のマダム痩せてゐる　五百吉
眞操を守り妹と夜を明かし　かほる
眞操がどうこうのと女給醉ひ　水車
眞操を守つて花の師匠なり　鮎美
貞操とかへたダイヤの光り　靜太
白粉が厚く眞操疑はれ　晴夫

「番傘」金參拾錢
大阪市此花區西野田驛前
番傘川柳社

「川柳きやり」金廿五錢
東京市四ツ谷區寺町六
川柳きやり吟社

▽川柳雜誌投句用箋
本社制規の投句用箋を左の價格でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴二冊價金拾二錢（送料共）
▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用不苦）

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

カナメ喫茶店

朗らかな心と愉快な顔は
カナメ喫茶店より
大阪市南區疊屋周防町
東入南側

「後の葉柳」分讓

新興川柳の先驅「後の葉柳」の殘部が少し出て來ました。同好の士にお頒けいたします。（一揃郵券十錢）本社宛

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な裝幀に出來ました

第一卷 第二卷 各金五圓也
第三卷 第四卷 各金參圓也
第六卷 第七卷 各金參圓也
當分第五卷に限り

特價（合本）金壹圓五拾錢

各送料十八錢

尚古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで 各一部金拾錢
第四十八號より第八十三號迄 各一部金貳拾錢
（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所

綠雨居倶會

四月六日午後六時半より
兼題「陽當り」
會費 不要
本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。

懸賞川柳募集

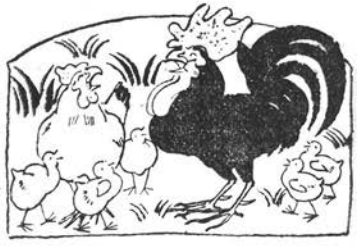
題「滿洲」 路郎選
四月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句謝を呈す
▼投吟 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

昭和自選 川柳句集の發刊

川柳家の自選作品を集めて一卷の句集として上梓し、毎月一出版する會員組織。
句集は日本紙に木版或は石版刷とし、永久保存に堪へるものとする。
柳壇の爲有意義な企てである。
目下會員募集中、詳細は左記へ
大阪市外守口町大枝二ノ二
岩本素人方

川柳同舟會



編輯の窓

路郎生

▼前號の編輯後記は私の病狀が思はしくなかつたので葭乃が代つて書いた。何分編輯後記を書くことになれてゐないので、妙なとこで氣焰をあげたり、折角書いたものが長すぎて、組み版の方で、ぶち切られたりしたため、諸君の方でも物足らなかつたであらうが葭乃自身も甚だ遺憾に思つてゐる。それもこれもみな私の病氣が原因してゐるので恐縮の外ない。只管諸君の御寛恕を願ひたい。

▼私の病氣については諸君に少なからず御心配をかけたが、昨今では餘程輕快になつてゐる。忙しい中を特にお見舞下さつた方々に深謝する。

▼實は前號の編輯後の二月の二十八日から葭乃が寒冒にかゝつて熱が三十九度から出た。そこへ純子も私もやられて、ウン〳〵うなつてゐた。あとは小さな子どもばかりで奈那もアートも止むなく學校を休んで、リリや一歩の世話をしてゐるありさまだつた。そこへ艸樂君が見舞に來て驚いて喰べるものを買ひに出掛けてくれたりして漸くしのいでゐた。

▼ところが三日の夜半、金澤の久流美氏から電話がかゝつて、病氣見舞だ。電話には葭乃が出たが僕は三十九度以上の熱で頭が痛んで苦しんでゐた最中だつたので、久流美君の遠來の聲に接することが出來なかつた。越えて十日の夜半に、再び金澤からの電話。久流美君は近來禁酒を破つてゐる聲であつたがこちらは寒むくて咳が出てやりきれず遂々二通話で失敬したが君が友情に對しては近來にないよろこびを感じた。

▼毎號原稿が輻輳するので非常に力强く感じてゐる。柳界秘話として大好評であつた秋農屋翁の「幽明無線電話」もいよ〳〵本號で幽明境を異にしてしまつた御執筆の勞を厭はれなかつた秋農屋翁並に御愛讀を惜しまれなかつた柳友諸君の御好意を感謝する。

▼長野吉高氏の「柳の絮」の愛讀者から、總明な「貞子さん」はどうなるのでせう。「雨軒居士」はどこ迄脫線するのでせう。四月號が待ち遠しい氣がしますといふやうな投書が舞込んでゐる。

▼阿部閑生氏の「今非明是」、船津梵兒氏の「紙上噴水」蛭子省二氏の「寶の帖漫興」岩本素人君の「句評公開」等々讀むべきものが多い。

▼表紙は例によつて大西長三郎氏を煩はした。グロテスクからエロテイツクに遷つた。それは陽春四月號にふさはしい現象だと云へやう。

▼本號發表の月評は本社で開催したが集つた時間が遲かつたのとその他の事情から私は多くを評することが出來なかつた。

▼創作句の發表欄が複雜すぎるので何んとかしたらといふ意見が出てゐたところへ、安井ひろし君が公務多忙のため「近作柳樽」欄の選を辭されることになつたので、同人社友會に協つて左の通りに改廢することになつた。「第一線」及び「春秋點」欄は廢止すること、「近作柳樽」欄は

祝百號記念
廣告を募る

本誌五月號が創刊百號に相當するので柳友諸兄の祝百號記念廣告を募ります絕大の御後援を祈ります。**一口金五十錢**幾口にても御申込下さい。

締切四月十日限。

（切手代用參錢以下）

大阪市住吉區平野西之町八三

川柳雜誌社

電話天王寺一一六七番

振替大阪七五〇五〇番

路郎選とし句數は十句以内とすること「近作柳樽」欄は同人社友誌友は勿論何人でも投句し得ることに改めた。

▼本社例會席上講演は新春句會は葭乃、二月例會は琴人、三月例會は柳秀で何れも大好評、四月は聲の出ない素人君演壇に立つことになつた。「ちとせ倶樂部なら聞えるらしいです一つやつて見ます」と素人君なか〳〵の乘り氣である。數年間聲が出なかつた詩人の聲が我等にどんな感激を與へてくれるかは四月の句會の夜を待たねばならない。

▼本誌の五月號は創刊壹百號に相當するので記念特輯號として素派らしいものを刊行したいと編輯委員ここらと大車輪であるその内容についてはお樂みといふことにしておく。

▼同時に祝賀と宣傳を兼ねて、五月四日の夜、朝日會館で「川柳の夕」を開催しここに大衆の視聽をあつめて、本社が多年主張して來た川柳の社會化をより具體化させることにした。先づ講演の方では井上劍花坊氏（東京）川上三太郎氏（東京）等が來援されることになつてゐる本社側で庄萬よし君や私などが熱辯をふるうことになつてゐる。その他交拶中の人々もあるので素晴らしい「川柳の夕」が開催されることは今から想像に難くないなほ會館では餘興に多くの時間を割き、長唄、（東都の杵家彌七師並にその社中）こども舞踊（山根舞踊研究所）川柳劇（川柳座）等が公演されることになつてゐる。新に組織される川柳座は掴句「戀の罠あの眼だらうか眼だらうか」を演出することになつてゐる。これ等の催物は一川柳社の仕事としては荷が勝ちすぎてゐるかも知れないが天下にやつてやれない事はないといふ意氣で、立ちあがつたのであるから、川柳の愛好者は我等の意氣を壯とせられ、川柳愛好者は來り會して出來得る限りの御援助を惜まれないやう特にお願ひする。

▼又各地の同人及社友で會館に於ける祝賀記念を好機として來阪される人々も多い。松本市の石曾根民郎君、松山市の三好計加君、滋賀縣の平井蒼太君等からは既に來阪の報に接してゐる京阪神の同人社友は何れも委員として活躍しつゝある。

▼三月の月は同人社友會をカナメ喫茶店で九日と十七日と二回開いた。九日の會合は百號記念號及記念祝賀催物に關する委員選定の件。十七日の會合は祝賀委員及び編輯委員の具體案に關する協議並びに決議であつた。

▼關東川柳家の關西訪問團の來阪もいよ〳〵近づいた。幾度かそのための相談會が開かれたがこの事のためには特に「番傘」の諸君の勞力を多とする我社でもそのための準備を同人社友會に協つたり特に緣雨、山雨樓、琴人、私などが會合をしたりした

▼函館の龜井花童子君金澤の安川久流美君松江の廣江天痴人君等何れも男子を儲けられたと聞く。男であつても女であつても不足は云へぬが女が生れるよりは男が生れたと聞かされる方がピンと響く。遙におよろこび申上げる。

▼大連の大島濤明氏は目下奉天長春、ハルピン地方を旅行中であるが、北大營の戰跡を見て左の句を寄せられた。

彈痕が少うしあつて古戰場

▼螢ヶ池支部前幹事茨木奈緒美君が二十三日の午前七時十分に永眠された。

五位鷺の一聲闇（をさぐ）　奈緒美

が最後の句となつた故人の死を悼むと共にとりあへず柳友諸氏へお知らせしておく。

▼岩本素人君が「昭和自選川柳句集」の刊行を企てた。私は病臥してゐたために、下相談にあづからなかつたが兎に角、有意義な仕事であることには間違ひがないので、せい〳〵この難事業の完成を援助されたいものである。會費一ヶ月一圓、木版或は毛筆石版刷製本は和裝、寸法は柳樽の原本と同じであるさうだ悉しいことは大阪市外守口町大枝二〇二岩本素人宛にお問合せが願ひたい。

▼三月廿八日から葭乃の經營で小さな喫茶店が開店される運びになつてゐる。私は勢ひ家主であり、資本家である。里十九君にそのことを話すと「二階に住んでる家主がおますかいな、アハヽヽヽ」と景氣よく笑ふ。そんな家主があるか、ないかの議論はサロン・キングでお茶でも啜りながら、やつてくださいと葭乃が早速商賣氣を出す。さう〳〵「千客萬來みな來ると困る也」でポツ〳〵來て、ポツ〳〵儲けさせて貰ふに限ると儻が資本家らしい本音を吐く。

▼海野夢一佛氏著「川柳巷談はしからはしへ」が東京市新田小木麥房巢文社から出た。定價壹圓參拾錢。

▼柳誌「鳴子」創刊號が東京府下澁谷町上智二四川柳二猪に村役場から發刊された。

投稿規定（改正）

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る但し女性作家を除く
▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
▼光耀抄は女性作家に限る。
▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
▼締切は嚴守されたし。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第九卷第六號課題

四月五日締切（各題十句以內）

▼同伴　松盛琴人選
▼ぶらんこ　安西杏三選

第九卷第七號課題

五月五日締切（各題十句以內）

▼皺　福田山雨樓選
▼階段　朝田新水　中島鐵洲共選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選
▼光耀抄（婦吟廿句）麻生葭乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年三月廿五日印刷
昭和七年四月一日發行
第九卷第四號（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（國館）
石橋（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和七年三月廿五日印刷納本　昭和七年四月一日發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい
全國有名化粧品藥店にあり

川柳雜誌　（第九十九號）

定價　金三拾錢